
遊戯王5D's ～ 転生者はサテライト

ランサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's 転生者はサテライト

【Nコード】

N5461V

【作者名】

ランサー

【あらすじ】

突然トラックに引かれて死んでしまった大学生、進 海斗^{しんかいと}彼はまだ死ねるはずではなかったが、天界のミスにより死んでしまった、そして彼には二択があった転生者として第二の人生を歩むか天界で静かに暮らすか、彼は神様の後押しにのり遊戯王の世界に転生する事になった……ダークシグナーやイリアステル等の驚異に彼は勝てるのか？。

転生？王道だな

「はあゝやつと終わった」

俺は、いつものようにコンビニのバイトを終えて今日の勤務を終えて帰ろうとした因みに夜勤だから時給は高い、今は朝の8時だ……ようやく夜勤のバイトが終わり俺は自分のアパートに戻るため帰宅の途中に事件が起きた。

プーーーーー！！！！！！。

トラックが突然、俺の所に突っ込んで来たのだ、俺はトラックが突っ込んでくる瞬間に自分がこれまで生きた人生を垣間見ていた。

（ああ……漫画の話どうり人間って死ぬ間際ってこうなんだな）

これから死ぬのにいたって冷静な自分にツツコミを入れたくなるが俺の人生は……小学校の時は、よく友達とサッカーした記憶、中学は中間テストで赤点を取って親父に怒られた記憶など高校は友達とよく遊戯王でデュエルしたな、そんな思い出が全部、思い出す……

そして俺はそこで意識が途切れた。

「ゴメンなさい!!」

俺が目覚めると、そこに土下座している巫女服を着ているお姉さんがいた、しかもスタイルがよく日本オタクの外国人なら間違いく大和撫子と叫んでいるけど間違いない。

しかもよく顔を見るとますます美人で髪はロングだ、ますます外国の人が見たら「大和撫子!!」と叫んでいるな絶対に。

だけど俺は確かトラックに引かれたよな、なにこの状況?……だつたら言わしてもらうつ……なんだこれ、もう一度言わしてもらつとするか。

「なんだ、これ?」

「本当にごめんなさい!!」

すみません話が読めません……だから言わして、なんだ、これ？。

「実はアナタは死ぬ筈の人じゃなかったんです！」

「………………。は？」

「ゴメンなさい？よく聞き取れません、てか話の内容がよくわかりません。」

「あの、お姉さん聞いてもいいですか、何故に土下座、そしてここはドコ？」

説明しよう俺は今、和室にいるし、そこには古き日本の和室の所にいて、そして巫女服を着ているお姉さんわかりました……………て、ダレに言ってるんだ俺。

「なら話します、ここは天界です、そして貴方は死ぬのはもっと先

でありましたが私のミスで貴方を死なせてしまったんです」

「はいわかりました、それで何のミスをしたんですか？」

いきなりトラックに引かれて気がついてみれば、こんな和室にいたんだ、このさいだ話しに流れて聞いてみよう。

「怒りませんか？」

「怒るに何も理由を聞かなきゃ、わかりませんよ」

つつかこのさいこの巫女お姉さんの話しに着いていきますか。

「実はいつものように書類の仕事をしていたんですが、いつものように休憩していた時に貴方の人生書類にお茶を溢してしまい貴方の人生を狂わせてしまい死なせてしまいました。」

「え、俺の人生ってそれで終わるものなの、それよりお姉さん何者？」

「はい、私は神様に使える天界の巫女の、ミキです」

そういえば職場仲間に、この手の話に詳しくてよく聞いたな、最近のケータイ小説やネット小説に転生する主人公がよく天界など地獄にいくって話はこんなパターンってわけ？

「ミキさん俺、この後どうなるの？」

とりあえず理由を聞こう、そうしないと話が進まない。

「そ、そうですね私の話を聞いた限りでは天界のミスで死んでしまった人は、別の世界に行く事が決まりですね、あ、でも天界で過ごすのも選択の一つですけど」

別の世界ってまんまケータイ小説などのパターンだな。王道的な。

「因みに俺、みたいな人は今までいたの？」

「聞いた話では、たまにあるみたいですよ、その殆どの人が別の世界に望んで転生した人ですが他の巫女仲間に聞いたところ、「俺のハーレム時代が来た！」だの「けい。んのキャラ全員を俺の嫁に！」

他に「Fa。eの主人公を殺して俺が主役になる!」「I。でラ。ラたとシャ。たんを嫁にするため一のハーレムを無くす!」などの人だったみたいですよ」

うわ!典型的な原作ブレイクの最悪なパターンだな………つつかその別世界にいった奴ら絶対に勘違いしているパターンだよな、アニメの世界だと認識してる奴等だ既に別世界にいる時点そこはもう物語ではない、その世界が現実である事だ、全て自分の思惑どうりにいくと思つてやがる。

その転生者が現実と妄想の区別が出来ているか出来てないかは俺にはわからんが………まあ俺が気にしても仕方ないか。

「はあなんか、そんな話を聞くと別世界にいくのが失せたな」

「え!いかないんですか!?!」

ここで俺も転生者になるなんて言ったら、なんか俺も最悪な転生者の同類に認識されそうでなんかやだ。

「突然で悪いんですが、進^{しん}さん」

「何で俺の名字を知ってる！」

「あ、あの私は天界の巫女ですから、それに貴方の人生の書類を汚して死なせたのは私ですよ」

そ、そうだったな……あ、説明しよう俺の名前は進 しんかいと 海斗なんだ歳は20、今さらだけど。

「それよりも進さんは転生しないんですか？」

「そうだな俺もアニメやゲームは好きだけど……話を聞かぎりだと俺もここで転生したらさっき聞いた転生者と同類だと思われたくないし」

俺は確かにアニメは好きだ自慢じゃないが暇さえあればパソコンでYo。Tu。eを開いて見たりDVDを買って見たりもするぞ、最近買ったのはイ。フィニット・ス。ラトスだな、それからゲームも遅れて買ったが第二次ス。ロボZだな、けどスパロボZの、命中は本当に宛にならなかったな……なんか5%でもよく命中してリアル系は直ぐに死ぬし80でも簡単に回避される事はあるし、イライラする場面が結構あった……おっと話がずれたな。

「まあ、欲を言えば転生して好きな世界には行きたいけど、俺みたいなイレギュラーが入る事は、世界のバランスを崩す、自分を過大評価していると思われるけど別世界は別世界の住人がその世界で歴史を作るものだ、俺は自分のわがままで俺は転生して世界を崩すつもりはない、俺は天界に残るよ」

「……………進さん」

ミキさん、そんな申し訳ない表情するなよ……………確かに欲を言えば転生はしてみたいよ前の世界じゃ経験は出来ない出来事だからな。

だけど世界のバランスを崩してはいけない、別世界の人間が入る事はその世界を壊す事に繋がるかも知れないからだ。

まあ確かに急に死んだ事は悲しいがこれも俺の道だと気持ちを決めるさ。

「気に入ったぞ！若造！」

「どわ！なんだじいさん！」

つつか誰だこのじいさん！いきなり現れやがって！。

「か、神様！」

「え！コイツが！」

「コイツとはなんじゃ！コレでもワシは神だぞ！」

エッヘンとするな……こんないかにも威張りちらしている神様だとキリスト信者が知ったら幻滅するだろうな。

「それより若造、お主は今までここに送られた人間と違い優しさがあるの」

「優しさ、俺はただの小心者さ」

「いや、他の世界を気遣い自分のわがままで世界を変えたくないなど良い若造だと思うぞい」

「はあ」

どうしたいんだ、このじいさん？。

「これまで、そのミキが話したとおり、これまで天界のミスで来た人間達は自分の欲望のままに別世界に行きおった、しかも好きな能力で世界を思うがままに使用とした奴等が殆どじゃ……まあこれも天界のミスが原因で人間を死なせたワシらがいけないがの」

はあ……最悪だな転生するなら最低限の事は守るくらいはしろよ。

「じゃが、お主みたいな優しさもつ若造がまだいるなら安心がしたわい……じゃから安心せい天界のミスで死なせてしまったんじゃお主の好きな世界にゆけい」

「本当にいいのか……俺は知らんぞ」

「よいよい、流石にその世界で限度を超えた人間は地獄に送られるからの、まあお主は大丈夫じゃろ」

そうなのか話を聞く限り、ミキさんから聞いた転生者は地獄に送られたのかな……まあ気にしないでおこつ。

「それでは進さんドコの世界に行きたいですか」

「俺は……遊戯王の世界だ時代は5D・Sの時代をお願いします」

「はい、わかりました能力はどうしますか」

「能力？」

「はい、転生者になる方は一つ好きな能力を与えるのが決まりですから」

「そうか……遊戯王だから能力はいらないから。」

「能力は要らない代わりに俺がこれまで集めた遊戯王のカードをあの世界に転送してくれないか？」

「それでいいんですか？」

「ああ、それで構わない」

「つつか俺はシグナーに入れないから遊星達に関わるにしても俺は影

から遊星達を守ればそれで良い。

「わかりました、因みにドコに転生するかはランダムですから気を付けてくださいね」

「わかった」

ミキさんはなにやら呪文らしきものを唱えていた。

「まあ頑張れ若造」

神様の声を聞いて俺はそこで意識を失った。

主人公紹介（前書き）

タイトルどおり主人公紹介

主人公紹介

進 海斗（旧名）

身長、遊星より少し小さめ

20歳↓17歳

この物語の主人公、突然トラックに衝突され死んだかと思われたが死んだ理由は天界のミスによるものであり彼は本来は早く死ぬはずはなく天界では天界のミスで死んだ人間は転生者として第二の人生を歩むか天界で静かに暮らすかのどちらかだったが……彼は天界の巫女のミキにこれまで自分以外の転生者が自分勝手の振る舞いばかりしていた事を聞いて自分もそんな奴らの同類になりたくないため最初は転生者になることを拒み。自分みたいなイレギュラーが介入すると別世界が混乱して世界を壊すとも考えている。しかし神様の後押しで自分の気持ちに素直になり遊戯王の世界に転生する。

性格↓仲間のためなら現実的な事を考えず突っ走る性格、人を思いやる優しい心をもち仲間を大切に作る気持ちは非常に高い。

ルックス↓中の上………ちょいイケメンくらい。

髪型↓短めで赤

デッキ マシンナーズと古代のコラボデッキ。

一話〱サテライトからの始まり（前書き）

初めて決闘を書きます、初歩的なものですがそれでも観てくださるかたは嬉しいです。

一話〱サテライトからの始まり

この世界に来て17年になるな……飛ばし過ぎだつて？。

だったら説明してやるよ俺は気がついたら赤ん坊でカプセルみたいな所で寝ていた名前の海斗はそのままだがしかし名字は違っていた名字は真田になっていた、話を戻すがサテライトに流れ着いた、俺はそこでマーサに拾われて俺は遊星達と一緒にマーサの所で育てられたんだ、それからだいぶ一人で出来るようになってからはマーサの所を出てサテライトで一人で暮らした今は遊星やラリー等と仲間になってDホイールを作っているちなみに俺はDホイールのテスト走行をしてサテライトを走っている最中だ。

「か、海斗!!」

「どうしたラリー？」

テスト走行から戻って来てみたらラリーが慌てた様子で俺の所に来ていた。

「おいおい兄ちゃん、そいつはDホイールかよ」

「俺達に寄越しな」

「そうだぜ痛い目に会いたくなきゃ渡したほうがいいぜ」

黄色い線がいくつかあるな成る程……マーカー着きに因縁をつけられたなラリー。

「ど、どうしよう海斗！遊星は今、アジトにいるしここからアジトは遠いし」

「心配するなラリー俺が何とかする」

俺がそう言つと三人は笑い出した。

「おいおい俺がどうにかするだつてよ！」

「兄貴を相手にあの態度は、バカかモグリだぜ！」

「おいガキ、俺様はサテライト最強のデュエリストの雑魚田様だぜ！」

いかにも体格がいい真ん中の男がどっしり構えてそう言った……
雑魚田つていかにも直ぐにやられそうな名前だな。

「誰が最強のデュエリストだ最強のデュエリストなら俺の仲間にいるぜ」

「な、なんだと！」

そう最強はサテライトをいや世界を繋ぐ可能性を秘めた俺達の仲間が最強だ。

「さっきからなめた事を抜かしやがっておいガキ俺と決闘しやがれ！俺が勝ったら貴様のDホイールと貴様のデッキは俺が貰うぞ！」

「何だよ！そんな自分勝手なルール！」

「やかましい！サテライトのルールは弱い奴は奪われ！強い奴が全てを勝ち取るだよ！さあ決闘だガキ！」

「良いだろう」

俺はDホイールからデュエルディスクを装着する、そしてデッキは自動的にシャッフルされた改めて思うが便利だよなこの機能。

「へえハイブリッドが高く売れそうだぜ」

「なに、売るだと！」

「ああ売るんだよ！俺達、サテライト住人にはDホイールは持つてても仕方がない代物だ、だったら俺が有効利用として売るんだよ！」

コイツ！俺や遊星そして仲間の皆の夢のDホイールをそんな目的で売るのが！！。

「それを聞いて尚更、テメーに渡したくないな、こいよ叩き潰してやる！！！」

「ほお、やる気になったみたいだないくぜ！」

俺と雑魚田は互いにデュエルディスクを構える。

「決闘！」

海斗 4000

雑魚田 4000

「先ずは俺が先行だ！」

そう言えばこの世界の先行は早い者勝ち何だよな、ライティング決闘だと先にコーナーを取った奴が先行って決まりがあるが……まあいいかさてどんな戦術だ。

「俺様は！ゴ布林突撃部隊を召喚だ！」

ゴ布林突撃部隊

レベル 4

ATK 2300

ゴ布林か懐かしいな、今じゃ最初は強いけど次のターンには必ずやられてしまうカードだけどシンクロ召喚やエクシーズが出てから、あまり観なくなっただよな。

「そして俺は装備カード、デーモンの斧をゴブリン突撃部隊に装備だ！」

ゴブリン突撃部隊

レベル4

ATK 2300 ↓ 3300

「これで俺様の勝利は確定だ！俺様はカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

おいおいただか3000を超えた、だけで勝利宣言しかもゴブリン突撃部隊は一度攻撃したら守備に戻るのに。

「さっすが兄貴！決まりですよ！」

「そつだガキ！とつとと、サレンダーしやがれ！」

まるでもう俺が負けるみたいないぐさだな、まあコッチは青眼の白龍や初期のエースが伝説となっているから青眼の白龍の3000が勝利みたいなんだろうな。

「俺のターン！……うん」

うん、そうだな。

「どうした手札事故か！」

うるさいな、さて召喚するか。

「俺は手札のイエロー・ガジェットとマシンナーズ・フォートレスを墓地に送って俺は墓地のマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚する！」

マシンナーズ・フォートレス

レベル7

ATK 2500

「そんなバカな、レベル7モンスターがリリースも無しに召喚だとして！」

「マシンナーズ・フォートレスは手札の機械族を合計8以上になるように捨てる事により手札または墓地から特殊召喚する事が出来る、そしてその効果対象はマシンナーズ・フォートレスにもあるイエローガジェットはレベル4そしてマシンナーズ・フォートレスはレベル7条件は満たした」

「く、生意気な（だが大丈夫だ攻撃力はゴブリン突撃部隊のほうが上だそれに万が一にも俺の伏せカードは聖なるバリアーミラーフォースーだ）」

「俺は手札からレッド・ガジェットを守備表示してレッドガジェットの効果を発動イエローガジェットを手札に加えて一枚セットしてターンエンドだ」

レッド・ガジェット

レベル4

DEF 1500

まあ最初はこんなもんだ。しかし表の守備表示って便利だな前の世界じゃ攻撃表示じゃないと効果誓えなかったからな。

海斗

フィールド

マシンナーズ・フォートレス

レッド・ガジェット

伏せ 一枚

手札 3

「くくく貴様がせっかく召喚した上級モンスターも俺のゴブリンに殺られちまいな！ゴブリン突撃部隊でマシンナーズ・フォートレスを攻撃！」

マシンナーズ・フォートレスのほうかまあ、このまま攻撃されてフォートレスの効果を使うのが一番だが、だけどこんなバカにダメージを追うのはムカつく！

「俺は畏カード発動！炸裂装甲を発動このカードは相手の攻撃宣言

の時に発動し相手モンスター、一体を破壊する！」

ゴブリンは塵となり消えていく、相変わらずと何度目か知らんが、海馬コーポレーションの技術力は凄いねホント。

「このやろ、姑息な手を」

これで姑息？つか罫カードでモンスターを排除したり防ぐのはセオリーだろうが、これでよくサテライト最強を名乗れるな。

「俺のターン、俺は岩石の巨兵を守備表示で召喚だ！ターンエンド」

岩石の巨兵

レベル3

DEF 2000

またまた懐かしい初期モンスターだよ子供のころ入れたのが最後だな。

「俺のターン、来た」

よし、この手札なら。

「俺は速攻魔法サイクロンを発動お前の伏せカードを破壊する！」

「く、俺のミラーフォースが！」

よかったあのまま攻撃したら全滅だった。

「俺はレッド・ガジェットを攻撃表示に変更して更に二重召喚を発動！このカードは通常召喚を二回行う事が出来る俺はトロイホースを召喚！」

トロイホース

レベル4

ATK 1600

「そして俺はトロイホースをリリースするトロイホースは地族性のモンスターを召喚する場合リリースは二体分になる俺は古代の機械巨人をアドバンス召喚！！」

古代の機械巨人

レベル 8

ATK 3000

「そんなバカな！何でお前、みたいなガキが古代の機械巨人を持つてるだよ！」

「あ、兄貴！」

「あわわわ」

古代の機械巨人が現れた途端に三人組は慌ただしくなっていた無理もないか、この世界なら古代の機械巨人は高額なレアカードだ、まづサテライト住民が持つてる時点が怪しいが俺はずっとこの町で、古代とマシンナースのコラボデッキで戦って来たんだぜ！。

「俺は古代の機械巨人で岩石の巨兵を攻撃、アルティメット・パウンドー！」

「ぐおおお!!」

ライフ 4000 ↓ 3000

「バカな守備表示なのにライフが!」

「古代の機械巨人の効果だ古代の機械巨人は守備モンスターを攻撃したとき攻撃力が守備力を上回っていた場合その差の分のダメージを相手に与える」

さて……………仲間の絆を下らない目的で売ろうとした奴等に制裁だ!。

「俺はマシンナーズ・フォートレスとレッドガジェットでダイレクト・アタックだ!!」

「ぐおおお!こんなガキに!!」

3000 ↓ - 500

勝者 海斗

「やったね！海斗！」

「ああ、ありがとうラリー」

ラリーは、はしゃいで跳び跳ねている……嬉しかったのだろ。さて……次は。

「おい！次、またラリーや俺達の仲間に手を出したらコレだけじゃすまないぞ！！」

「……はい！すいませんでした！！」

マーカー付きの三人組は一目散に逃げていった、たくそれよりもあんなプレイングでサテライト最強を名乗るなんて……。

まあいつか、さて俺のDホイルのテストも終わったし遊星のアジトに帰るか。

第二話　始まりライディング決闘その1（前書き）

まだ決闘はしませんオリキャラが一人です、次の話し当たりで決闘します。

第二話　始まりライディング決闘その1

いつもと変わらないサテライトでの日常……俺はそんな日常は嫌いだ毎日シティーの連中が捨てたゴミを再利用するなんて俺は嫌だがサテライトが完全に嫌いな訳ではない俺に切れない絆の仲間がいるからだ。さてさて俺のDホイールの性能も順調だ今日は遊星のアジトにでも行くか遊星から聞いたが遊星のDホイールが完成に近いって聞いたしな、けどなんか遊星に何か申し訳ないんだよな、俺のDホイールが完成したのは遊星が俺にパーツを譲ってくれたから完成したんだよな俺は最初はパーツを貰うのを断ったけど遊星が「仲間が困っているのは見過ごせない」って言って足りない部品を俺に譲ってくれたから俺はDホイールで走れるんだよな。

この前はラリーにテスト走行を手伝って貰いDホイールの調子は完璧だった。

俺は遊星のアジトに向かいDホイールを進めアジトの中に入る……遊星、タカ、ナーヴ、ブリッツの四人に出会った。

「よお遊星」

「海斗か」

「調子は……聞くまでもないか」

パーツの質が悪いのかDホイールの調整に戸惑っているようだ。

「遊星、何なら俺のDホイールからパーツを取っていいぜ」

「いや海斗のDホイールは完成している、そこから貰う事は出来ない」

「だけど元々、お前がパーツを譲ってくれたから俺のDホイールが完成したんだぜ」

「つつか俺にパーツを譲らなきゃもうDホイールは完成しているのによ。」

「海斗、俺達は仲間だ仲間が困っているのは俺は見過ごせない、海斗のDホイールがパーツを譲って完成するなら俺はそれでいい」

遊星……相変わらず仲間を大切にするため自分を犠牲にするのか、これだから俺は遊星を助けたいと思うんだよな。

「遊星！」

ん、足音が聞こえるそれにこの声はラリーか。

「よおラリー」

「オース」

ラリーに気づいた三人もラリーに話をかける。

「あ、皆も来てたんだ」

「どうしたんだよ、そんなに急いで？」

ラリーは遊星の所にいきラリーはポケットからチップを取り出した。

「おい、これ新品じゃないか！ドコで手に入れた！」

「ち、違つよこれはジャンクの中から見つけたんだ」

ラリーはそう言うけど俺は……。

「ホントにかラリー？」

「何だよ海斗は疑うのかよ！」

「そう聞こえたならすまないが、ホントにやってないんだな？」

「ほ、本当だよ！」

俺は真剣な表情でラリーを見つめる。盗んだ事は知ってるが一応仲間としてこれくらいはしないとな。

「よせ海斗」

「遊星、わかったよラリーゴメンな」

俺はラリーに謝る、そして遊星はラリーからチップを受け取る。

「いいのか遊星？」

「きつと速くなるよ！絶対だよ！」

ラリーは嬉しそうにそう言うが俺達は少し呆れていた。

「なあ遊星、気持ちはわかるけどジャックの事なんかもうほっとけよ」

「遊星はジャックと決着をつけにいくんだよ！」

「だからさ、その為だけにわざわざ危ない橋を渡るのはどうかって言ってるの」

「でもジャックは遊星のエースモンスターまで奪ったんだよ！」

ラリーが怒鳴るが、まあ気持ちはわかるが遊星に危険な橋を渡らせたくない奴の気持ちもわかってやれよ。

「遊星、本気でここを出ていくのか、それに海斗もおんなじなのか？」

「出るんじゃない行くだけだ」

「俺はただ遊星に借りを返すだけだ」

そうだ遊星はDホイールだけじゃない、このサテライトに住んでいた時から俺は遊星に助けられてばかりだった、その借りを返したいんだ仲間として。

「やめとけアッチは俺達に合わないぞジャックは、はなっから俺達とは違う」

Dホイールの設定が終了したのか遊星は自分のDホイールのハンドルを握りアクセルを回す。すると先ほどまでと違い凄いパワーが当たりに響いた。

「どお、全然違うでしょ走ろうよ凄く速いよ」

ラリーがそう言いかけた時にライトが俺達のアジトにさされた。

「な、なんだ!？」

「セキュリティだ！」

やはり原作どうりラリーが工場から盗み出したんだな。

まあ今さら怒ってもしかないか。

「おまえ！」

「ご、ゴメンよ！本当は工場から持ち出したんだ、だって遊星にジャックに勝って欲しかったんだよ」

「だからって！」

そこに遊星が仲裁にはいる、そして遊星はパソコンをいじりジャミングをかけた。

「マーカーの信号は攪乱した」

「ジャミングしたのか」

相変わらず見た目に似合わず派手な事をするな遊星。

「皆は向こうへセキュリティは俺が引き付ける」

「さて遊星、俺も行く餌は多いほうが食らいつきやすいだろ」

俺も自分のDホイールに乗り遊星に言う。

「……海斗」

「セキュリティの単純な脳みそなら簡単に引つかかるはずだ、良いだろ？」

「ああ、わかった行くぞ海斗」

「おう!!」

遊星はDホイールでアジトを出て俺も遊星の後に続くようにアジトを出る、外に出るとセキュリティはやはり追いかけてきたラリー達に目は言っていないようだ単純だな。

『そのDホイール二台、逃げてても無駄だ止まりやがれ!』

しつこいなこの声は牛尾だな、この時の牛尾はまだサテライト住民をクズ呼ばわりする権力を振りかざすやつだからな。

工場の中にまで行くと俺達は止まる、そこにセキュリティのDホイールが二台にセキュリティのパトカーも止まる。

あれ確かこの時Dホイールは一台で牛尾だけのはずだよな、原作と離れているのかな？。

「おい、そのDホイール何処から盗んだ？」

盗んでない遊星がスクラップから部品を持ち出して作りあげたんだよ。

「ふ、はははマーカー無しか、フン圏かよクズはクズどうし庇いあいか？」

クズ、クズって言いやがってムカつくやつだな！。

これまでセキュリティの奴等と事を構えたが一言目にはクズ、二言

目にもクズとばかりだ。

「お前達が逃亡を手助けしたお陰で拘束する理由は出来たな、まあそのDホールの出所も聞かなきゃな」

明らかに俺たちを見下している目だ俺はこの目は嫌いだ。

「おい」

「ん？」

「決闘しろよ」

「フ、サテライトのクズがこの俺と決闘だとカードも持ってないくせに笑わせんなよ」

サテライト住民だからってデュエルが出来ないって決めつけるなよ、つつか昔サテライトには決闘ギャングがのさばっていたのによセキユリテイの認識、可笑しくないか？。

「カードは拾った俺が勝てば今日の出来事は全てなかった事にしてもらっ」

「随分、面白い事を言いますねこのサテライトのクズねえ牛尾先輩」

もう一人のDホイーラが降りてきてヘルメットを出すと、何とも漫画に出てきそうな金持ちキャラみたいな奴が出てきた、しかも歯は全部金歯だし……。

「コレだからサテライトのクズは汚ないサテライトから拾ったクズカードで戦うなんて本当にクズですよね」

コイツ……遊星が大切にしているデッキをバカにしやがって。

「おい！その金歯やろうさつきから聞いてればよ、遊星のほうがテメーの何億倍もましなんだよ！だいたいテメー見た目もそのDホイールも趣味が悪いんだよ！」

金歯に何よりDホイールも、とてもセキュリティが扱うような代物には見えない何しろ金一色に染まっているのだから。

「な、何だと君は僕の美しき趣味を侮辱するのか！」

何が美しい趣味だよ、悪いが趣味悪すぎ……。これが美しいなんて思ってるなんてな。

「牛尾先輩！僕に汚なくて醜いこのサテライトのクズの相手をさせてください！」

「お、おういいぞ」

あの牛尾が退いてるまあ確かに顔も趣味もまさに最悪だからな。

「ふふふ、僕に勝てたら君の罪はなかった事にしてあげるよ、まあ万が一にもサテライトのクズカードしかない君に勝ち目はないけどね」

明らかに俺をバカにしている感じだ、だが負けるつもりが全くない、よしやるか。

「遊星、俺はアッチの金齒をやるからお前あのセキュリティを頼むな」

「ああ、わかった海斗、気をつけろよ」

「なにあんな金齒野郎に負けるつもりはないよ勝ったらお前のアジトに集合な」

「ああ」

俺達は拳を重ねお互いのDホイールに乗る、遊星は牛尾で俺は金齒野郎に勝負する事になった。

俺はデッキをセットしてDホイールにフィールド魔法スピードワールドを起動させる。

『デュエルモードセットオートパイロット起動』

当たりは紫色になりいよいよ始まるライディング決闘が。

「君みたいなサテライトクズが僕と決闘できる事を誇りに思うことだね」

うるさいやつだな、つうか金齒がウザイから顔を向けるな。

第三話　始まりライティング決闘その2（前書き）

ライティング決闘です、それとS pスペルですがゲーム版で使われる奴もこれからも出しますが、しかし今回は出ません。

第三話　始まりライティング決闘その2

遊星は工場の中だが俺と金齒野郎はサテライトの外を走っている。

「さあ決闘のはじまりだ、サテライトのクズめ！」

「アンタそれしか言えないのか、まあいい来い！」

「「決闘！！」」

海斗　4000

セキュリティ（金齒）　4000

「僕のターンドロー、僕はサファイアドラゴンを召喚！」

レベル　4

サファイアドラゴン

ATK 1900

サファイアドラゴン初手にしては良いカードだ、しかしパラレルレアのカードなのだろうピカピカ光っている。

「どうかね？この美しき僕のサファイアドラゴンはサテライトのクズである君にはお目にかかれる事はないだろうがね」

いちいちうるさいやつだな、そんなに自慢したいのかコイツ……気のせいかも知れないがサファイアドラゴンが嫌そうな表示をしてる。

「僕はこれでターンエンドだよ」

セキュリティ（金歯）

ライフ 4000

フィールド

サファイアドラゴン

伏せ無し。

「俺のターンドロー」

海斗 S P C ↓ 1

金齒 S P C ↓ 1

「俺はマシンナーズ・ソルジャーを召喚」

レベル 4

マシンナーズ・ソルジャー

A T K 1 6 0 0

「このカードは自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードを除く『マシンナーズ』と名のつくモンスターを手札から特殊召喚する事が出来る俺はマシンナーズ・スナイパーを召喚！」

レベル 4

マシンナーズ・スナイパー

A T K 1 8 0 0

「俺はカードを二枚セットしてターンエンドだ」

海斗 4000

フィールド

マシンナーズ・ソルジャー

マシンナーズ・スナイパー

伏せカード↓二枚

「僕のターン！ふ、殺られ専門の雑魚モンスターしか呼べないなんてプレイングもモンスターもクズだね君は」

海斗 S P C ↓ 2

金齒 S P C ↓ 2

「君に見せてあげるよライティング決闘の仕方！僕は S p - エンジェル・バトンを発動！」

エンジェル・バトンか、ライティング決闘用の手札補助と墓地肥やし
が出来る差し詰、今は禁止カードの天使の施し版だな、だけど。

「ここで俺は罫カード発動、アクセル・ゾーンこのカードは相手が
S pを発動した時に発動する事が出来る！そしてこのカードは自分
のS P Cを6つ増やせる！」

海斗S P C ↓ 2 ↓ 8

俺のコースに白いレーンが表れ俺のDホイールのスピードが上がる。

「く、S P Cを増やしたか、だけど僕はチューナーモンスター炎龍
を召喚！」

レベル2

炎龍

A T K 1400

レベル2にのチューナーモンスターサファイアドラゴンはレベル4
だからレベル6のシンクロモンスター、セキュリティだからゴヨウ・
ガーディアンあたりか？。

「僕はレベル4のサファイアドラゴンにレベル2の炎龍をチューニング！」

4 + 2 = 6

「氷結界から舞い降りし龍よその美しき姿を見せ敵を氷尽かせたまえシンクロ召喚！氷結界の龍ブリューナク！」

レベル6

氷結界の龍ブリューナク

ATK 2300

ブリューナクか、ゴヨウかと思ったがゴヨウだと俺のモンスターを奪われてチューナーの素材にされるからな。

「僕は氷結界の龍ブリューナクの効果発動、僕は二枚捨て君のクズモンスターを戻させる！」

「く、ソルジャー、スナイパー」

やっぱりブリユーナクの効果はキツいなでもコレがシンクロモンスターならもつと痛いけどか伏せカードは何で戻さない手札はかなり余裕があるはずだ……まあブリユーナクはグングニールとトリシユーラみたいな破壊や除外じゃないからな手札に戻すだけだからな俺のライフが少なかったら真っ先に使ってたと思うけど。

「僕はブリユーナクでサテライトのクズにダイレクトアタック！」

「ぐわああああ……！」

海斗 ↓ 4 0 0 0 ↓ 1 7 0 0

S P C ↓ 8 ↓ 6

くそ今のダイレクトアタックでS P Cが減ったかスピードワールド2と違って一度のダメージで1 0 0 0につきS P Cが一つ減るからな。

「ふふふ、聞こえるよ君の敗北のカウントが、さあサレンダーしたまえここでサレンダーすれば君の罪は軽くしてあげるよ」

「冗談じゃねえ仲間も俺と一緒に戦っているんだ！俺だけのこのことサレンダーしてたまるかよ！」

そつだ遊星も戦ってるんだ、ここで逃げたら遊星を二度と仲間と呼べない。

「ふん、仲間かまあシティー出身の牛尾があつちのサテライトのクズに負ける訳がないがな全くトップスの僕が何でゴミみたいなサテライトに配属されなければならぬんだ」

「お前」

「何だねクズ」

「俺をクズ呼ばわりするのは構わない、だけど仲間をクズと呼ぶのは許せない！」

「フン仲間だから」

「ああ、そつだ！」

そつだとも俺がいまこうして暖かい仲間に囲まれてるのは遊星達のお陰なんだ。

「僕にはサテライトのクズの考えは理解出来ないね全く……牛尾も牛尾だ、こんなクズ捕まえた所で何になるんだ」

「お前、寂しいな」

「何だと！」

「お前は仲間の温かさを知らないで生きているんだな、自分以外の人間はクズと決めつけ、全くもって悲しいな」

「黙れ！クズの君に僕の高貴なトップス出身の考えがわかるはずがない僕はターンエンドだ！」

金齒は怒りを表してターンエンドをする……さああのカードが揃えばこのターンで勝てる……行くぞ。

「俺のターンドロー！」

海斗SPC ↓ 7

金齒SPC ↓ 3

「俺もSP・エンジェル・バトンを発動！」

ちなみにエンジェル・バトンの効果はゲーム版じゃなくてアニメ版の効果だよってSPCが二つあれば足りる。……よし来たぞ！

「俺はカード二枚ドロして手札一枚を捨てる」

これなら行ける！。

「俺はSP・サモン・スピダーを発動！このカードはSPCが3ある時に発動、レベル4以下のモンスターを特殊召喚出来る！俺はマシンナーズ・ソルジャーを特殊召喚する！」

レベル4

マシンナーズ・ソルジャー

ATK 1600

「ふん今さらそんなモンスターを召喚して何になる」

「俺はマシンナーズ・ソルジャーをリリースして古代の機械獣をアドバンス召喚！」

レベル 6

古代の機械獣

ATK 2000

「な、クズの君が何で古代の機械のカードを持ってる、まあだが攻撃力じゃ僕のブリーナクには及ばないが」

「まただ見せてやるぜ俺のカードの仲間の絆をな！俺は罨カード発動！リビングゲッドの呼び声このカードの効果により俺は墓地から古代の機械巨竜を攻撃表示で召喚だ！」

レベル 8

古代の機械巨竜

ATK 3000

「攻撃力3000だと！そんなモンスターがなぜ墓地に！？」

「エンジェル・バトンの時に墓地に送ったのさ」

「そうかあの時か！（だがブリューナクが破壊されても僕のライフは半分は残る）」

「そして更に俺は手札のマシンナーズ・スナイパーとマシンナーズフォートレスを墓地に送ってマシンナーズ・フォートレスを墓地より特殊召喚だ！」

レベル7

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

「リリース無しでレベル7モンスターを召喚だと！」

「マシンナーズ・フォートレスは機械族のモンスターをレベル8以上になるように墓地に送れば手札または墓地より特殊召喚出来る、この効果対象はマシンナーズ・フォートレスにも適用される！」

この効果はマジで助かるんだよな、前世の時もマシンナーズの展開でよく助けられたよ。

「あ、あああ」

「さあ行くぞ、これが俺の絆の力だ！先ずはマシンナーズ・フォー
トレスでブリューナクを攻撃！」

「ぐー！」

金歯↓4000↓3800

「そして俺は古代の機械巨竜と古代の機械獣の二体でダイレクタ
タック！古代の機械獣パウンド・クロー！古代の機械竜ギアクラッ
シュ・ダイブ！！」

「ぐわああああああ！！」

金歯↓3800↓-1200

勝者↓海斗

「バカなサテライトのクズに僕が……トップス出身の僕が！」

「お前の負けた理由の一つはブリューナクの効果で俺のリビングデッドの呼び声を戻さなかった事だ戻せばまだ、1ターン希望があったはずだ、そして二つ目はお前自身が自分の力を過信して相手を見下してカードをクズ呼ばわりした事だ……カードをクズ呼ばわりしたり出身や身分だけで相手をクズと決めつけるお前にデュエリストを名乗る資格はない」

俺に言われてセキュリティは下を向いていた俺は決闘に勝利しその場を後にした。

第三話　始まりライティング決闘その2（後書き）

海斗「今回も古代の機械とマシンナーズのコラボで勝ったな」

ランサー「まあ、この二つ相性が良いんだよね事故率も少ないからさ」

海斗「それよりも、あのセキュリティ、オリキャラって出してるけど、何かモブキャラくさい感じだけど、これからも出るのか？」

ランサー「いや、それはここでは言わないよ言ったらネタバレになるか」

海斗「そうか、でもあの金齒、牛尾並みにしつこかったらやだな。」

ランサー「ネタバレになるから詳しくは言わないけどお前、牛尾に巻き込まれる可能性高いよお前、遊星と一緒に行動すること多いし。」

海斗「マジか」

ランサー「マジ」

海斗「そうか、まあこのままぐちぐちしゃべったら時間が長くなるからここで区切るか」

ランサー「よし、まだ始まったばかりですがこの小説をよろしくお願いします！」

第四話〈サテライト脱走、セキュリティの追跡（前書き）

今回はいよいよゲーム版のS pを使います後、オマケもあります。

後、O C Gとアニメ効果とバラバラになって展開が原作と違います。

第四話　サテライト脱走、セキュリティの追跡

遂にサテライトを出る時がきた俺と遊星は自分のDホイールに乗る。

そして仲間の皆に成功を祈られ遊星はラリーからワンショット・ブースターを貰いデッキに入れ俺と遊星はいよいよ出発の時間になる。

そして俺達は出発する。

「遊星、海斗、頑張れ!!」

ラリー……皆、必ず帰って来るからな。

「遊星はやっぱり皆に慕われてるな」

「……そうか」

「そうさ俺も遊星を手伝って嬉しいさ、ラリー達の方まで俺が確りサポートするさ」

「すまない海斗」

「良いつて」

俺は遊星を絶対に助けるさ……。

次第に俺達は工場に近づくと警告をされる

『警告するこれ以上の接近は認められない直ちに引き返せ』

関係ないね俺達はただ進むだけさ。

そう思っていた時に……。

「またあつたなクズ、ここはお前みたいな野郎が来る所じゃないんだよ……消えろ！」

コイツか……。俺は遊星のDホイールの間に入り牛尾のDホイールを退かす。

「ち、邪魔してんじゃねえよ、クズ野郎!!」

「うるせえ！クズクズしか言えないのかよセキュリティは！」

「海斗！！」

「遊星！先にいけ俺は後からいく」

「しかし！」

「いいから行け！サテライトを出てやる事があるんだろ！」
俺は怒鳴り遊星にそう言う。

「く……。すまない！」

遊星はトップスピードで走り集積所のフェンスを飛び越え中に入る
さて俺は牛尾の足止めだ。

「そらそら治安維持局の犬がよ！捕まえてみな！」

「コノヤロー！」

俺も遊星と同じように集積所の中に入るが遊星の姿は見えない……
よしよし上出来だ。

「クソ！サテライトのクズが……先にテメーを倒してから、あのクズ野郎を倒してやる！」

来るかライディング決闘が！。

『決闘モードオン、オートパイロットスタンバイ』

紫色に周りが包み込まれ強制的にライディング決闘に持ち込まれた……だがそれでいい俺が囷になれば遊星は何の不自由なくパイプラインを抜けられる。

「は、どうだコイツはスピードワールドに連動して強制的に引き込む優れもんだ！あのクズ野郎とドコにいくかは知らんがあんたのクズを先に貴様を倒してやるから覚悟しな」

牛尾は正義感は強いがサテライト住民っただけでクズ呼ばわりする俺はまだこの段階では牛尾は嫌いだ。

「決闘！」

海斗 4000

牛尾 4000

「先行は俺だ、ドロー！俺はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚だ」

レベル4

ゲート・ブロッカー

DEF 2000

俺の目の前に一目の壁が現れた。ライディング決闘だとコイツの能力は厄介なんだよな。

「俺は更にカードを伏せてターンエンドだ」

牛尾

フィールド

ゲート・ブロッカー

伏せカード↓一枚

海斗 S P C ↓ 0

牛尾 S P C ↓ 1

「小僧、S P C が上がらないんじゃないのか？」

確かに俺の S P C が上がってないゲート・ブロッカーの効果だよな。

「それはな普通、フィールド魔法スピードワールドが発動している間はお互いのスタンバイフェイズでお互い一つずつ上がっていくものだ、だがゲート・ブロッカーが表側守備表示で存在する場合、お前はスピードワールドの効果を受けられない、よってお前の S p は封じられたんだよ」

確かにコレで S P C を封じられたが、まだ戦う選択は残っている。

「それくらいで俺の戦略を封じたつもりか俺はグリーン・ガジェットを召喚」

レベル 4

グリーン・ガジェット

ATK 1400

「そんなクズカードで何が出るんだよ！」

「なら見せてやる！グリーン・ガジェットの効果発動、このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、レッド・ガジェットを手札に加える事が出来る！」

「は、そんなクズカードを手札に入れて何が出るんだよ、クズ野郎！」

そうやってバカに出来るのも今、だけだ。

「俺はレッド・ガジェット墓地とマシンナース・フォートレスを墓地に送ってマシンナース・フォートレスを墓地から特殊召喚だ！」

レベル7

マシンナース・フォートレス

ATK 2500

「なに、ゲート・ブロッカーの守備力を上回った!!」

「行くぞ俺はマシンナース・フォートレスでゲート・ブロッカーを攻撃!」

「くそ!」

マシンナース・フォートレスの攻撃でゲート・ブロッカーは塵になつて消える。

「そしてグリーン・ガジェットでダイレクトアタック!」

グリーン・ガジェットが牛尾に襲い攻撃を加える。

「ぐお!だがダメージを受けたこの瞬間に罠カード発動、ガード・ブロックこのカードは相手の戦闘ダメージ計算時に発動可能、このカードは自分の戦闘ダメージをゼロにしてカードを一枚ドロウ出来る!」

あれ、確か原作だとブローケン・ブロッカーの筈だよな、同じガード繋がりが入っているのかな……まあいいやコレで俺はSPCを増やせる。

「俺はカード二枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

マシンナーズ・フォートレス

グリーン・ガジェット

伏せカード↓二枚

「さあ！コレで俺の阻むものはない行くぞ！」

俺はパイプラインの中に入り黄色い道を真っ直ぐ進む。

「逃がさねぞ！クス野郎！」

「しつこいな、ゴミに埋もれても知らねーぞ！」

「うるせえ俺のターンドロー！」

海斗SPC ↓ 1

牛尾SPC ↓ 2

「俺はサーチ・ストライカーを召喚だ！」

レベル 4

サーチ・ストライカー

ATK 1600

ここでサーチ・ストライカー……俺が決闘してるから原作とかけ離れたのか。

「更に！俺はSp・二重召喚を発動！」

おい！ゲーム版のSp・じゃないか確かに俺も持つてるけど牛尾も持つてるのかよ！だけどコイツの発動条件は出来た。

「この瞬間に俺は罫カード、アクセル・ゾーン発動！このカードは相手がSpを使用したとき俺のSPCは6になる！」

海斗 ↓ 1 ↓ 7

「何！だがコイツの効果で俺はジュツテ・ナイトを召喚だ！」

レベル 2

ジュツテ・ナイト

ATK 700

「俺はサーチ・ストライカーにジュツテ・ナイトをチューニング！」

4 + 2 = 6

「シンクロ召喚！ゴヨウ・ガーディアン！！」

レベル 6

ゴヨウ・ガーディアン

ATK 2800

出た禁止カード！まだこの時代じゃ禁止カードに認定されてないけ

ど、ゴヨウ・ガーディアンの効果で泣かされた奴はいっぱい、いるからな、それより俺はゴヨウ・ガーディアン of 禁止カード入りが遅いと思った事が何回あったか。

「ゴヨウ・ガーディアンでマシンナース・フォートレスを攻撃、ゴヨウリアット！」

「ぐわー!!」

海斗 4000 ↓ 3700

「この瞬間、ゴヨウ・ガーディアン of 効果発動! このカードが戦闘によって破壊し墓地に送った時にそのモンスターを自分のフィールドに守備表示で召喚出来る」

え! アニメ効果じゃないのか!? さっきから思ったがアニメ効果とOCG効果で別れてるなさっきから……… これも俺がここに介入したからか? だけどこれで助かる。

「だがコレでマシンナース・フォートレス of 効果を発動するマシンナース・フォートレスは戦闘で破壊され墓地に送られた時、相手フィールド上のカードを一枚破壊する効果がある! 俺はゴヨウ・ガーディアンを選択!」

「なに！俺のゴヨウ・ガーディアンが、くそ俺はカード一枚セットしてターンエンドだ！」

牛尾

フィールド

無し

伏せカード↓一枚

（来るんな来やがれ、俺が伏せたカードはミラーフォースだコレでお前のモンスターは全滅だクス野郎）

何を伏せたかは知らないが俺の予想だと破壊や除外系の罠カードだな。それよりゴヨウ・ガーディアンがアニメ効果じゃなくて良かったアニメ効果じゃなかったら、フォートレスの効果使えないからな。

「俺のターンドロー！」

海斗SPC↓8

牛尾SPC↓3

「俺はSP・サモン・スピダーを発動このカードの効果により俺は手札からトロイホースを特殊召喚!!」

レベル4

トロイホース

ATK 1600

「更に俺はトロイホースをリリースして古代の機械巨人をアドバンス召喚!!」

レベル8

古代の機械巨人

ATK 3000

「バカな!何でサテライトのクズが古代の機械巨人なんてレアカードを持つてんだよ!!」

また同じ反応だよ古代の機械巨人を出すと必ず帰ってくる反応だよ、確かにコイツも強いモンスターなのは認めるけどゴヨウ・ガーディアンのほうが鬼畜たる効果が、逆に何でゴヨウが幻クラスに入らないのが不思議でしょうがない。

「更に俺はS p -リミッター解除発動！このカードは自分のS P Cを6取り除く事で発動出来る、更にこのカードが発動した事により俺の機械族は攻撃力は倍になる！」

海斗S P C ↓ 8 ↓ 2

古代の機械巨人

A T K 3 0 0 0 ↓ 6 0 0 0

「攻撃力6 0 0 0！！」

いや、これくらいで驚くなよ俺の時なんか王宮のお触れ、サイバーエンドパワーボンド、リミッター解除のサイバーエンドに団結の力を装備した青眼の究極竜で伏せ無し状態でダイレクトアタックされた記憶がありますからね、これホントの話だよ！！

あれと比べたらこんなのマシだろ！

「俺は古代の機械巨人でダイレクトアタック！アルティメット・パウンド！！」

「バカめ！俺は罠カード発動！！」

しかし牛尾のDホイールから『エラー』と英語で書かれた文字が現れた。

「何故！発動出来ない！」

「古代の機械巨人の効果だ古代の機械巨人は相手のダメージステッブ時まで魔法と罠は発動出来ない！！」

「ぐあああああ！！俺がサテライトのクズにまた負けるなんて！！」

牛尾 4000 ↓ - 2000

勝者 ↓ 海斗

よし決闘に勝ったが二人目って牛尾は遊星に絶対に勝てないよな……
……実力はあるのに負けてばかりで可哀想だな何か。

後はパイプラインを超えるだけだ俺も遊星に合流しないとな。てかもう遊星はジャックと決闘しにいつてるかな。

やばメンテナンスハッチがしまる、それに始まってゴミが流れてきた！

「うおおおお！！！」

俺はDホイールを巧みに操りゴミの波を回避するが牛尾はゴミに巻き込まれていった。

「ぐおおおお！お前とあのガキも捕まえてやるから覚えてやがれ！！」

原作とセリフも違うなやつぱり俺が介入してるから歴史が変わったのか？。それより速く俺も中に入らないとゴミの山に埋もれる！！

「よし！入った！」

何とか入り俺は無事にゴミ波から救われた……………さて後はシティを目指すだけだ遊星、ジャック……………。

俺が外に出るとそこはサテライトでは観られない……綺麗なビル
が並ぶ町並みだ……さて俺も遊星と合流しないとな。

「遊星、ジャック……俺も今、行くぞ」

そして俺はDホイールを走らせる……。

オマケ。

海斗「今回は話しに出たゲーム版のS p二枚について説明するぞ、まず最初の一枚目」

S p - 二重召喚

自分のスピードカウンターが2つ以上存在する場合に発動する事が出来る。このターン自分は通常召喚を二回まで行う事が出来る。

海斗「効果は二重召喚と同じスピードカウンターもそれほど必要がない上にスピードカウンターを削る必要がないからライディング決闘に入れて置いて損はないぞ！続いて二枚目」

S p - リミッター解除

自分のスピードカウンターを6つ取り除いて発動する。このカード発動時に自分フィールド上に存在する全ての表側表示機械族モンスターの攻撃力を倍にする。エンドフェイズ時にこの効果を受けたモンスターカードを破壊する。

海斗「これも効果は同じで機械族の攻撃力を倍にする強力なカードだけどスピードカウンターを6も削るから使い時が難しいうえに直ぐに発動が出来ない、このカードを発動したいなら罠カードアクセル・ゾーンを入れておく事をお勧めするよ普通の決闘同様、強力だ

けど失敗した時、他のS pを使う制限がかかってしまいリスクは高いぞ！」

今回のゲーム版のS p の紹介はここまで、ちなみに参考にしてるのは遊戯王2010のDSゲームです。

第五話　到着ネオドミノシティ！　（前書き）

オリヒロインの一人が登場します。

第五話　到着ネオドミノシティ！

さてネオドミノシティに着いたはいいが……俺、サテライトからシティーに来た事がないから道を知らないんだよな、どうしよう……仕方ないハイウェイの道を進みながら、探すしかないか。

俺は自分のDホイールのアクセルを回して走る……さあてスタジオアムを探しますか。

「しかし……サテライトとは偉い違いだな」

サテライトの住人の俺達とシティーの人間との格差に呆れて見てしまふ俺がそこにいるさてさて……見物してる場合じゃないな変にうるついてたら……。

「そこの不審なDホイール！止まりなさい！」

思ったそばからセキュリティの奴等が来やがった！！ここで捕まったら俺がサテライトからコッチに来たことがバレる早いとこ逃げないとな。

よし回り道になるが町中に逃げるか……しかしまあしつこいな、あのセキュリティ。

「いい加減に止まりなさい！これ以上！逃亡しますと罪が重くなりますよ！」

十分、罪が重いんだよ俺は！サテライトから脱走してるんだ……マーカー付きは避けられないんだよ！。しかし……今まであったセキユリテイの連中と比べたら物腰も優しいし権力を盾にのさばる犬でもないようだ。

何より女性のDホイーラだウエストも細くて胸もデカクて形も良い……簡単に言えばナイスバディーだよあのDホイーラ。

だけど……このまま逃げてもいずれ応援を呼ばれて捕まるのがオチだ土地勘もアッチが上だし……どうする！？。

（ここの道を右に曲がって）

なんだ！いきなり頭から声が聞こえる！なんだ！？。

（いいから私の言つとつりにして捕まりたいの？）

（仕方ない……右だな）

俺は右に道を曲がるるといきなり黒い煙幕が現れた。

「な、なに！」

女性Dホイーラは行きなり煙幕が現れて慌てた様子だ……しかし俺も前が見えない。

（このまま真っ直ぐだよ）

くそ！こうなりやあヤケだ！

俺はDホイールを飛ばす。

すると一人の少女が立っていた年齢からすると16かそれくらいな感じだと思う。

「コッチに隠れて」

「あ、ああ」

俺は言われたとおり町の路地の所に隠れてセキュリティの追跡を逃れた。

「もう大丈夫だよ」

「ああ、助けてくれてありがとうさっきの頭から聞こえた声は君が？」

「そうだよ！」

少女は年甲斐もなくニコリと笑い子供みたいにピョンピョンと跳ねてアピールしていた。

「しかし、何で身知らずの俺をたすけた？」

これは疑問だ俺にジャックを除けばシティーの知り合いなんているはずもない……何よりこの少女は俺は知らない。

「そうだね……サテライトから抜け出して何がやりたいの？真田海斗君」

「どうして俺の名前を!？」

バカな……俺はシティーの連中に名前が覚えられるほど有名じゃない、それじゃあこの少女もセキュリティか!

「簡単だよ私はコレでもトップス出身でしかも裏の顔は情報屋なんだよ、サテライトの情報も私の情報源の一つなんだよ」

信じられないトップス出身でしかも情報屋とは……何より年も俺と大差がないこの子が。

「にやはは、驚いたこの天才少女、女神^{めかみ ゆめ}弓女さんに知らない情報はないのだよ!」

ブイサインを俺に向けて無邪気に笑う弓女さんを見て俺は苦笑いしてしまった。

「じゃあ女神さん「弓女!!」は?」

「女神って呼ばないで!弓女さん!やだよ弓女って読んで!」

頬を膨らませて腕をブンブンとふり怒る弓女に海斗は……。

「わかったよ弓女」

「うんうん、よろしい」

「じゃあ聞くけど何で俺を助けた、それにあの力は？」

「うーんとね……。わかんない」

「は？」

「私も何で助けたか、わかんないんだよね、それにあの力も私自身、よくわからないんだそれと何か海斗君がほっとけなくて助けたいと思ったから」

「それだけ？」

「それだけ」

笑顔で語る弓女に海斗は……どう反応していいかわからなかった。

しかし弓女は満足にやははと笑っていた。

「それより弓女は情報屋なんだろう？」

「そうだよ！」

「なら俺の友、不動遊星がドコにいるのか教えてくれ！」

俺は真剣な表情で弓女に願う……スタジアムなのはわかるがネオドミノシティは初めて何だよ……だから俺は場所を聞きたい。

「知ってるけど行かないほうがいいよ、あそこでキングのジャックと決闘してるし何より治安維持局が監視カメラで監視してるから海斗君の身元がバレて一発で捕まるよ」

「それでも行かなきゃいけないんだ！アソコで俺の友、二人が戦っているんだ！」

「知ってるよジャック・アトラスはサテライト出身なもの、だけど海斗君、むやみに捕まりにいくのはいけないよ」

「知ってたのか……だがそれでも俺は行く！」

俺はDホイールに乗ってエンジンをかける。

「行くの？」

「ああ」

俺はアクセルを回し……出発しようとしたが……。

「ダメ」

「え？」

プスリ

な、何だいきなりめまいが……。

「ダメだよ……海斗君、海斗君にマーカ―は似合わないよ捕まったらダメだよ」

ど、どうして……………俺は遊星とジャックを……………。

そこで海斗の意識は失った。

「ゴメンね海斗君…………でも私もわからないんだ、こんなに他人を引き止めたいと思ったの初めてだから、海斗君を見たら胸がドキドキするのだからごめんなさい」

そこに気を失った海斗に膝枕をしている弓女の二人…………弓女は申し訳ない表情だが、しかし内心はホッとしている様子でもあった。

第六話、情報屋でも乙女なの1（前書き）

今回も決闘はありません、次回に決闘が始まります。

第六話 情報屋でも乙女なの1

「離してアナタ！。。。が！」

「ダメだ！もう間に合わないお前まで死ぬぞ！」

「イヤ！。。。を」

何だ…… ココは…… それとこの二人は誰だ…… 俺は……。

「ん……………夢か」

あの夢は何だったのだろう、だけど自分に関係がある夢に思っ、しかし初めて見る感じではない、まるで親しきものの感じがする。

きつとこのコインとこのデッキ。

「この二つに関係があるのか？」

俺は首にぶら下げている黄色いコインを見てそう思う、昔から……
……と言うよりも俺が赤ん坊の時にカプセルの中に入っていたのだ
コインの裏には名前……俺の名前が刻まれており、多分ゼロリバ
ースの時に俺の両親がカプセルの中に入れてくれたんだろうと俺は
かんがえている。そして二つはいつも俺が扱っているマシンナーズ
と古代の機械のコラボデッキだ、これもカプセルの中に入っていた
のだ俺に何らかの関係があると思い俺はこのデッキに関してはいい
じゃない。

「今さら何を考えてる俺は」

そうだ両親はもういない……だけどコレは俺の両親の残してくれた
ものだと認識しているだから……もう考えるのはよそう、俺は本当
の両親の温もりは知らないが、しかしマーサが育ててくれて……遊
星やジャック、クロウ……皆、俺はかけがえのない仲間が出来たじ
やないか。

遊星………そうだ！！

「遊星を……！」

ムニユ

へ？ムニユ……………俺の右手に柔らかい感触を感じた俺は恐る恐ると右手に視線を向けると……………。

「ん……………ムニヤア」

そこに昨日遭遇した少女……………弓女が海斗の隣で寝ているのだ。

しかも上がパジャマで下は下着だけと何ともエロな格好で……………。

「うわああああああ！！」

俺は突然の事態に焦り素早くベットから離れた……………何故、弓女が俺と一緒に寝ている？

と、言うよりもココはドコだ？確か俺は遊星とジャックの所に行こうとして、それを弓女に止められて意識を失った。

気がついたらココにいた……………よし整理した。

きっと俺はこの子の家にいる、しかしどうしてサテライト住民の俺がトップスのココにいる？

何故だ？弓女に聞いてみよう、だけど弓女はまだ寝ている起こすのはいけないな。

「しかし改めて見ると」

可愛いと思ってしまう、髪型は黄色でツインテールで目元もクリッとして唇も小さく胸は平均だが形は良い身長も少し小さい部類に入るが逆に可愛いと思ってしまうと言うより普通に可愛い。

「ん…………ふわああああ…………あ、海斗君おはよう」

まだ寝ぼけて目をゴシゴシと、しかし本人は自分の格好に疑問に思わないのかと海斗はツツコミを入れたくなる。

と、言うよりもツツコミ入れてる。

「ああ、おはよう」

目のやり場に困っている海斗に弓女はニヤリッと笑って彼に抱きつく。

「お、おい!!」

「にやははどうしたの海斗君？」

絶対にわかってやっているだろう！

俺はそう感じる弓女は俺の反応を楽しんでやがる！。

「弓女、離れろ！」

「えゝ弓女さんはまだ海斗君の肌を感じたいの！」

ブーと頬を膨らませて駄々をこねる、しかしその仕草が可愛いと思っ
てしまい海斗は頬を赤く染める。

「あれあれ？海斗君、顔が赤いよもしかして私に惚れちゃった！」

「バカ！いい加減に離れろ！」

海斗は無理矢理、弓女をどかす、そもそも海斗は女性……同い年に近い女性に抱きつかれた経験がない前世も女友達はいたが恋人未満で終わってただのメル友だったし、この世界に来てサテライトでは女性と付き合う場もなく何より遊星達と一緒にいる機会が多いため決闘かDホイルを作るか機械いじり等の事しかない……つまり女性との経験は海斗はゼロなのだ。

「もう海斗君、顔はイケメンなのに純粹だよな」

「顔は関係ないだろ！」

確かに海斗はイケメンの部類に入るだろう……彼が彼女はいないと答えると一般の女性の反応は「ええ」と言うだろう。

「それより話を戻すが、どうして俺がココにいる？」

「え、簡単だよ私が連れてきたの」

「連れてきたって……おい！」

こんな小柄な少女にどうやって俺を運んできたって言うんだよ。

「じゃあ運んだ証拠ワイルドマン来て！」

『お嬢……一般の方に我ら精霊が見えないのですから』

あれ……気のせいかな……E・HEROのワイルドマンが喋ってる
ソリッドビジョンでもないし。

「なあ弓女、ワイルドマンが喋ってるんだが」

「あ、やっぱり見えるんだ！」

『何とお嬢以外に我ら精霊に見える方は龍可様くらいとっていま
したが』

本当に精霊なんだ……しかも龍可と面識あるのか弓女、しかしこ
こで龍可の事を言うと言問に思われるから黙っておこう。

「じゃあ話すね海斗君を運んできたのはワイルドマンが実体化し
てくれて、それで運んでくれたの」

『昨日はお嬢が迷惑をかけて申し訳ございませんでした』

「ちょっとワイルドマン！迷惑をかけたってどういう意味！」

二人のやり取りに俺は微笑んでしまった、しかし……やはりここに長く留まる事は出来ない。

ココを出よう。

「あれドコにいくの海斗君？」

「弓女……俺、みたいなサテライト住民がいつまでもトップスの中にいる訳にはいかない、かくまってくれたのは嬉しいが長居する事は出来ない。」

俺はその場をさり部屋を出て行こうとしたが弓女が俺の背中に抱きつく。

「ゆ、弓女!？」

「行かないで海斗君」

どうしたんだよ弓女！だけで何か弓女の調子が違う笑顔で賑やかな雰囲気じゃない。

「お願い行かないで海斗君」

「い、いや弓女、俺はこれから仲間を探さなきゃいけないし何よりサテライトの俺がココにいたら弓女や弓女の両親に迷惑をかける事になる」

「そんなの関係ないよ」

一体どうしたんだ弓女、俺はまだ彼女とは知り合って浅いが彼女はこんな事をするのか。

「わかってるのか弓女！サテライトの俺をかくまっている事がバレたら治安維持局に何をされるか！ヘタをしたらマーカーをつけられるんだぞ！」

「だからそんなの関係ないもん!!」

急に怒鳴り声をあげる弓女に俺は驚いてしまった……。

「お、おい弓女」

「海斗君は私の事が嫌いなの!」

「いや嫌いじゃない」

「だったらどうして私から離れようとするの!」

「俺は仲間を助けに行くつもりで、何より弓女に迷惑をかけたくないから」

「私は迷惑と思ってないよ!私は海斗君と一緒にいたいのに!」

まるで駄々をこねる子供そのものの弓女に海斗はどうしたらいいのか戸惑ってしまう。

(こつこつという事はクロウが一番なんだけどな)

彼は今はサテライトにいる仲間の一人を思っ、この場に親友がいればなと考えてしまう。
クロウは駄々をこねる子供の面倒がうまくて一番、サテライトの子供達に好かれていたからな。

「なら決闘だよ海斗君」

「え!？」

何を言っている弓女。

「だから決闘!私が勝ったら海斗君はずっとココにいるの!」

「何故!そうなる!」

「私が決めたの海斗君は弓女と決闘するの!」

ハア……何でこうなるんだ……仕方ない決闘に勝って早めに遊星と合流しよう、もう捕まってるかも知れないがだったら刑務所までいくまでさ。

第七話　情報屋でも乙女なの2

突然、決闘をする事になってしまった俺……何故、こうなった？。

「海斗君！私が勝ったら海斗はずっとココにいるんだよ！」

デュエルディスクをセットして俺に宣言する弓女……言わしてくれ………なんだこれ？。

ハア、今さら騒いでもしかたない。

「「決闘！」」

海斗　4000

弓女　4000

「先ずは私が先行だよドロ！私はE・HEROクレイマンを守備表示で召喚！」

レベル4

E・HERO　クレイマン

DEF 2000

クレイマン……ワイルドマンが精霊だから弓女のデッキがヒーローデッキなのも当然だな。

「カードを一枚セットしてターンエンドだよ！」

弓女

フィールド

E・HEROクレイマン

伏せカード↓一枚

『我が守りで弓女を守る』

え！クレイマンも精霊なのか、だったらひょっとして……………。

「そつだよ海斗君が考えてるとつり弓女のヒーロー達は皆、精霊だよ！」

全員が精霊なのか、しかしクレイマンとワイルドマンを見ている限りヒーローの精霊は真面目なようだ。

「よし俺のターンドロー俺は永続魔法古代の機械城を発動、このカードがフィールド上に存在するアンティーク・ギアと名のつくモンスターは攻撃力を300ポイントあがり、モンスターが通常召喚される度にカウンターが一つ増える。そして俺はグリーン・ガジェットを召喚！」

レベル4

グリーン・ガジェット

ATK 1400

「グリーン・ガジェットが召喚に成功してレッド・ガジェットを手札に加える！そして古代の機械城のカウンターが一つ増える」

古代の機械城 ↓ 1

「更に俺は魔法カード二重召喚を発動、このカードは通常召喚を二回行える俺は場のグリーン・ガジェットをリリースして古代の機械獣をアドバンス召喚！」

レベル6

古代の機械獣

ATK 2000

「更に古代の機械城の効果で古代の機械獣は攻撃力を300上々、そしてカウンターがまた一つのる！」

古代の機械獣

ATK 2000↓2300

カウンター↓2

「うそ！クレイマンの守備力を上回った！それにカウンターが二つも上がった！」

確かにこれで古代の機械城は二体分のリリース要員を蓄える事が出来た何より古代の機械モンスターはバトルフェイズは魔法も罠も発

動が出来ないからな。

「バトル！俺は古代の機械獣でクレイマンを攻撃パウンド・クロー！」

「きゃああー！」

『ぐ、弓女申し訳ございません』

クレイマンが古代の機械獣の攻撃で塵になる……しかしクレイマンが喋ってるから撃破した事に罪悪感が残るな。

「でもここで私は場の罨カードを発動だよヒーロー・シグナル、このカードは自分のモンスターが戦闘で破壊された時、手札かデッキからレベル4以下の『E・HERO』を特殊召喚できるの！私はE・HEROスパークマンを選択、来てスパークマン！」

レベル4

E・HEROスパークマン

ATK 1600

『俺の雷が弓女の敵を倒すぜ!』

何とも熱いヒーローが現れた……そう言えばスパークマンって一時期、恋する乙女の効果で敵についた事があったよな俺、あのシーンみたとき思わず笑っちゃったな。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

古代の機械獣

古代の機械城

伏せカード↓一枚

「私のターンドロー！私は手札から融合を発動、手札のフェザーマ
ンとバーストレディーを手札融合！現れてE・HEROフレイム・
ウィングマン！」

レベル6

E・HEROフレイム・ウィングマン

ATK 2100

いきなり手札融合か！すでに弓女の手札には融合素材のモンスター
がいたんだな。

「更に私はフィールド魔法、スカイスケレイパー発動、このカード
効果はE・HEROの攻撃力より高いモンスターと戦闘した時E・
HEROの攻撃力が1000ポイントアップするんだよ！」

E・HEROフレイムウィングマン

ATK 2100↓3100

やば不味い！一気にライフが削られる！

「私はフレイム・ウィングマンで古代の機械獣を攻撃するの！スカ

イスクレイパーシュート！」

「ぐー！」

海斗 4000 ↓ 3200

「そしてフレイムウイングマンの効果が発動だよフレイムウイングマンは相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるの！」

そうなんだよな8000の世界ならたいした事はないがここは4000なんだよなこの効果はキツイ。

「ぐわああ！」

海斗 3200 ↓ 900

「そしてコレで最後だよ！私はスパークマンで海斗君にダイレクトアタック！スパークフラッシュ！」

スパークマンの電撃が俺に襲いかかり俺に直撃するが……………。

「ここで俺は罠カード発動！ガード・ブロック！このカードは俺の戦闘ダメージをゼロにして俺はカードを一枚ドロウ出きる！」

よし何とか防いだ……コレで何とか次のターンに進める。

やっぱりコレがヒーローデッキの怖さだ単体は弱いけど融合やモンスター効果で逆境を変えるそれがヒーローデッキの強さだ。

「ふふふ、海斗君はもう少しで私と一緒に……。」

「なあ弓女に聞きたい事があるんだ？」

「なに海斗君？」

「どうして俺にそこまでこだわる？俺はサテライト出身で犯罪者だ、そんな俺に何故そこまでこだわるんだ？」

疑問が付きないどうして弓女は俺にこだわりを続ける。

「弓女はね、海斗君と最初からあった時から離したくないと思った

の最初はただの気まぐれだったけど海斗君と話していくうちに何か温かくてそれで私、離れたくないの！離れたくないの！」

弓女は自分の胸を腕に当てて俺に叫ぶ……………弓女から悲しい瞳が俺に写る何があつた弓女？。

『ここからは私が話します』

弓女のフレイムウィングマン……………。

『我らが主、弓女様は昔から頭も良くデュエルの実技や筆記も常に上位に入っていました、高いプレイングや行動力は誰もが弓女様に注目していましたが……………しかし』

フレイムウィングマンは悲しそうな表情になる。

『弓女様の容姿や成績の高さに嫉妬して弓女様は影からのイジメにあい、そこから弓女様は段々と孤立していきました』

よくある能力の高さに嫉妬した人間のイジメか弓女はその犠牲者というわけか。

『そこで弓女様はある家業に手を出しましたそれが情報屋です、弓

女様はそこから相手に知られたくない情報をあつめ自分に影からイジメをした相手に対抗して弓女様はイジメに会わなくなりました』
なるほどトップス出身の弓女が情報屋になつた理由はそこから来たのか。

『そこから弓女様は日常を取り戻しましたが真な信頼関係は消えてしまい弓女様は孤独になつてしまわれたのです』

フレイムウィングマンは最後の言葉に拳を握りしめ弓女はそこから語る。

「そんなある時に海斗君が現れたの私と同じようにカードの精霊が見えて、私の本当の気持ちをわかってくれるの！だから弓女は海斗君と離れたくないの！！」

弓女……絆を仲間が欲しいんだな、だから俺をあそこまで引き留めたんだな。

「弓女！お前の気持ちは理解したなら俺もこの決闘で全力でぶつか
る！！」

「……海斗君」

カードよ……俺の……いや弓女の気持ちに答える為に答えてくれ。

「ドロー!!」

このカードはよし!

「俺は古代の機械城の効果を発動このカードをリリースする事でこ
とで古代の機械巨竜をアドバンス召喚するカードに乗っているカウ
ンター2よって召喚条件は整った俺は古代の機械竜をアドバンス召
喚!!」

レベル8

古代の機械巨竜

ATK 3000

「でもスカイスクレイパーの効果で私のHEROは1000ポイントア
ップするんだよ」

「わかっている更に俺は手札のレッド・ガジェットとマシンナーズ・

フォートレスを墓地に送ってマシンナーズ・フォートレスを墓地から特殊召喚！」

レベル7

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

「更に俺は手札から速攻魔法リミッター解除を発動する、これで俺の機械族は攻撃力は倍になる！」

古代の機械竜

ATK 3000
↓6000

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500
↓5000

「そ、そんな！」

「これでHEROがスカイスクレイパーの効果で攻撃力をあげても俺のモンスター達の攻撃力のほうが上だ！俺は古代の機械竜でフレイムウィングマンを攻撃！そしてマシンナース・フォートレスでスパークマンを攻撃だ！」

「きゃああああー！」

弓女 4000 ↓ - 1300

勝者 ↓ 海斗

ふう何とか勝てたアソコでリミッター解除を引けなかったら俺の負けだったよ……。

「そ、そんな負けちゃった、う……うえええええん！！」

急に弓女が泣き出した、え、えええー！！

「海斗君がいなくなっちゃうよ!!イヤだよ!!」

あ、やべまさか泣き出すとは思わなかったどうしよう……こっぴうのは得意じゃないけど……俺は弓女の体を抱きしめる。

「ふえゝ海斗君？」

「弓女、すまん女性経験がないからわからないから俺はこっする事しか出来ない」

「う、うん／＼いいよ海斗君／＼」

良かった泣き止んで……でもどうしよう遊星を助けに行きたいけど、とても弓女と別れる雰囲気でもない俺はどうしたらいいんだ。

心の底から幸せそうな弓女をほっとけないから……仕方ない。

「弓女、こんな俺でも本当にいいのか？」

「え、海斗君もしかして」

「ああココに一時的だけど住むよ、ただし仲間の情報が入ったらココを出ていくからな」

「うん！それでも良いよ！ありがとう海斗君！弓女うれしい！！」

弓女は俺の体をコレでもかと抱きしめる……はは弓女が、こうして笑ってられるなら、これでいいか、すまんが遊星、お前を探すのは後になりそうだ後でお前の好きなもんおごってやるから、それで許してくれ。

第七話 情報屋でも乙女なの2（後書き）

海斗「確か俺は遊星と一緒に行動する事が多いはずじゃなかったか作者？」

ランサー「いや一時的だよ後から遊星と一緒にいる事が多くなるから」

海斗「本当か？」

ランサー「そくだよ！それでも良いじゃないか可愛い女の子と一緒に一つの屋根の下で暮らせるんだから幸せもん！」

海斗「バカ！いま凄く気にしてるのによ！」

ランサー「はは純粹だなルックスは普通にちよいイケメンなのに」

海斗「顔は関係ないだろ、それに仕方ないだろ！サテライトにいた時から女性経験はないし何より遊星達と行動する事が多かったから女性と触れ合う機会なんてなかったし。」

ランサー「まあ、確かにサテライトの遊星と一緒にいたら女の話は

ないもんな、さて話が長くなると読者も飽きるから今日はここまで、この展開にムカつくと思ったら感想にバシバシと書いてください！」

海斗「おい!!」

八話、デートフラグ？男の嫉妬は怖いが殺られフラグ。（前書き）

ただいまコミケの会場にいます……満員電車のぎゅうぎゅうのおし
ゆくら饅頭の中を脱出して更にただいま熱い中を行列の中で待って
います。

死ぬ……（汗）。

八話、デートフラグ？男の嫉妬は怖いが殺られフラグ。

トップスで暮らすようになって何日か立ったが俺は相変わらず外に出ていない理由は、弓女が外に出る理由がないからだネットで勉強をやっているらしい、この数日でやった事といえば弓女に三食、世話になり決闘するかネットの情報を見るかのドチラかだ。

外に出ないがそもそも俺は外に出られないサテライトから無断でシティに来ている俺はセキュリティに見つかれば問答無用で捕まってしまうからだ、それを考えると弓女の度胸は凄いと思ってしまう。

「リミッター解除を発動！古代の機械巨人でサンダージャイアントを攻撃！」

「うそ！そこで、きゃあああ！」

弓女 500 ↓ - 3600

いつものように弓女と決闘をしている俺……今日も俺の勝ちだ、あれから俺と決闘して戦績は7勝1敗、一回は負けた終盤で古代の機械竜を出したがヒーローシグナルで呼び出されたエアーマンを出されモンスターをサーチそして貪欲な壺で二枚ドロそこでフェザー

マンとバーストレディーと融合してフレイムウィングマンとすでに出ていたフィールド魔法スカイスクレイパーのコンボでやられた…最後のドロ―であそこまでのプレイングが出る事に弓女の手際に俺は驚いていた。

「あう今日も弓女さん負けちゃったよ」

「いやギリギリだった弓女のデュエルはいつも気が抜けない」

これは正直な話だ弓女のヒーロー達のコンボに俺は四苦八苦の毎日だからだ。

「そっか海斗に言ってくれるなら弓女さん嬉しい」

鼻歌を歌ってステップを踏む弓女に俺は微笑む、あれから弓女の悲しい瞳は無くなった弓女の悲しい苦しみがあれば仲間の俺が支えなきゃ弓女のためにも。

『海斗……本当にありがとう』

「ワイルドマン……」

『お嬢が、こんなに笑っているのも海斗のお陰だ私は嬉しい昔の笑顔が絶えないお嬢を取り戻してくれてありがとう』

『我らは感謝している』

『そうだぜ！弓女の笑顔を見れば俺の電撃も元気がくるぜ！』

そこにワイルドマン……フレイムウィングマンにスパークマンの三人が出てきてお礼を言ってくれてるやはり仲間が元気になる事は嬉しいものだ。

「いや俺は仲間として当然の事をしたまでだ」

『仲間ね……果たして弓女はそれだけの感情かしら』

突然バーストレディーが俺の目の前に現れる。

それだけの感情？

「どついう意味だ？」

『この数日間弓女の感情に気づいてないの?』

「感情、友情のことか?」

弓女の過去を聞いて弓女は本当の意味での仲間を求めていた、だから俺は弓女の支えになり友情を深めたいと思っている。

『ハアゝ弓女も苦勞するわね』

「え?」

弓女は何に苦勞するんだ!俺に手伝わせてくれよバーストレディー!
!。

『アンタ自身が気づきなさい』

バーストレディーはそれだけ言って姿を消した、だからなんだよ!!

「皆!」

『これは私、自身言う訳にいきません』

『すまないが私もだ』

『俺も』

ワイルドマン、フレイムウィングマン、スパークマン！

だからなんだよ！

『しかしこれだけは言っておきます海斗』

フレイムウィングマンなんだ………それに二人も。

『『（お嬢）（弓女様）（弓女）を悲しませたら許しません（許さん）！！』』

もの凄い殺気に俺は首を上下にふり頷いた。

それだけしかおこなえなかった。

「あ、そうだ海斗、今日、外に買い物に行かない」

「おい弓女わかってるのかサテライト住民の俺がシティにいったらセキュリティに捕まる可能性が高いんだぞ」

「うん、わかってるよでも大丈夫、弓女さんは平気だよ」

ハア弓女はのほほんとしているが一度言い出したら止まらない俺は諦め弓女と一緒に外に出る。

「で、何故に俺のDホイールで二人乗り」

「良いの良いの」

ただいま俺と弓女はDホイールでハイウェイで走行している……俺のDホイールの形状はDS版の初期に出るDホイールに形だが二人乗りしても問題はないが……弓女の胸が背中当たって凄く恥ずかしいんだけど。

「こんな乗り方してたら真っ先にセキュリティに捕まりそうだな」

「大丈夫だよ弓女さんは捕まらない……………だって海斗がいるもん／＼ボソッ」

「何か言ったか？」

「何でもないよ！さあさあ発進発進！フル加速！」

ん…………仕方ないか早いところハイウェイを抜けて町に行くか。

弓女 Side

ふええ／／／

いま弓女さんはとても幸せですだってDホイルで二人乗りして海斗の背中に抱きついてるからやっぱり海斗の背中、暖かいな弓女さんいつも海斗をからかっていますけど本当は心臓がバクバクなんです。

弓女はようやく同年代の友達が出来ました、そして初恋をしています海斗はまだ私の気持ちに気づいてませんがいつか気づかせてみせ

るのです海斗は仲間の為に自分を犠牲にする事が多いのです彼の会
話とサテライトの情報をみた限りでは彼はそういう性格です。でも
ダメだよ海斗、弓女さん海斗は自分の幸せも考えないとダメだよと
思います弓女の心を開いてくれた初めての異性そして初恋の相手、
だから私は弓女は離れたくないのだから海斗は弓女の夫になっても
らうのだから弓女さん逃がさないからね海斗。

弓女 Side OUT

町に着いたのはいいけど……何をどうすれば良い俺はシティは初め
てだし何より目立つ行動は避けたい。

「じゃあDホイールはその駐輪場に置いていこつか海斗、弓女さ
んが案内してあげる」

「弓女……どうして腕に抱きつく？」

ちなみに今、弓女は海斗の腕に抱きついていて、旗からみればイケ

メンと可愛い子ちゃんのカップルだから余計に目立ち海斗は男性から嫉妬の眼差しをうけて弓女も女性から羨ましい視線を受けていた。

それからショッピングを楽しみ服を買ったり宝石店の宝石を見つめたり、ファーストフードで一息つくなどデートを満喫している。

海斗は久しぶりに懐かしいものを感じていたサテライトにいてからは毎日がスクラップを修理したりDホイールを作ったりなどしてこのように遊ぶ機会がなかったからだ。

「ありがとう弓女、サテライトじゃ先ずは出来なかった」

「そうなんだ弓女さん情報しかサテライトの暮らししか聞いてないから海斗は苦勞してるんだね」

少し町のベンチで休憩して喋ってる海斗と弓女に、そこに三人組の男性が海斗と弓女の目の前に現れた。

「ブヒヒヒアナタは女神さんじゃないですか」

明らかなメタボ体質の男、そこに二人の黒服の男であった。

「誰、アンタ弓女さん知らないよ?」

「ブヒ! 女神さん僕はデュエルアカデミアの豚身ぶたみですよ」

名前も外見もそっくりなこの男に俺は呆れてしまった……弓女も嫌そうにしてるし。

「ブヒヒヒ女神さん僕とデートしませんか」

いきなりデートの誘いかその度胸だけは凄いな。

「は! 私は今、海斗とデートしてるの! 弓女さんは豚とデートする趣味ないの消えて消えないとポークステーキするよ」

そう言う弓女は俺に抱きついた……しかし弓女、俺とお前、デートしてたのか

(アンタ一度死になさい)

いきなりバーストレディーの声が頭に響いた……え、俺が悪いのか?。

「ブヒ！君が女神さんをたぶらかしたのか！」

「何故にそうなる！俺は弓女に何にもしてないぞ！」

しかしこの言葉が引き金となったのか豚身はプルプル顔を震わせ怒鳴りちらす。

「ブヒー！乙女さんを名前で許さん！僕と決闘だ！」

え……決闘かでもどうしよう俺はデッキはあるけどデュエルディスクは今日は持ってきてない、それ以前にハイブリッドだからDホイールに連動してるDホイールは駐輪場に置いてあるから……どうしよ本当に。

「おい！そいつにデュエルディスクを！」

「は！」

どうやらデュエルディスクを持っていたらしい……俺は黒服の人にデュエルディスクを借りて俺は自分のデッキをセットして自動シャッフルがされる。

「決闘!!!」

海斗 4000

豚身 4000

「ブヒ! 先ずは僕の先行ドロー!」

さてアイツのデッキは何デッキだ?。

「僕は切り込み隊長を召喚!」

レベル3

切り込み隊長

ATK 1200

「良いぞやれ!」

「イケメンなんかブツコロセ!!」

何故かギャラリーが出来ている、しかし酷い言われようだな。

「更に僕は切り込み隊長の効果でレベル4以下のモンスターを召喚するブヒ！僕は共闘するランドスターの剣士を特殊召喚！」

レベル3

共闘するランドスターの剣士

ATK 500

なるほどコイツのデッキは戦士ビート、たしかあのランドスターの剣士はチューナーだレベル6……ゴヨウ・ガーディアンか？。

「ブヒヒヒ僕はレベル3の切り込み隊長にレベル3の共闘するランドスターの剣士をチューニング！」

共闘するランドスターの剣士は三つの輪になった。

「シンクロ召喚！大地の騎士ガイアナイト！」

レベル6

大地の騎士ガイアナイト

ATK 2600

え！ガイアナイト……懐かしいあのカードがネタにされた事を思い出すなゴヨウ・ガーディアンが出た事によりあのカードをネットでいろいろと叩かれてたな。

「僕はカードを一枚セットしてターンエンドだブヒヒヒ（このカードは攻撃の無力化だこれで完璧）」

豚身

フィールド

大地の騎士ガイアナイト

伏せカード↓一枚

あの笑い……怪しいな……。

「俺のターンドロー！俺はトロイホースを召喚！」

レベル4

トロイホース

ATK 1600

「更に俺は二重召喚を発動！俺はもう一度通常召喚を行える俺はトロイホースをリリースして古代の機械巨人をアドバンス召喚！」

レベル8

古代の機械巨人

ATK 3000

「ブヒ！古代の機械巨人！」

ザワザワと騒ぎ始めた……「おいあれって……。」「伝説のレアカードだよな」「どうしてあんなガキが」などいろいろと呟いていた。そんなに驚くカードかな？まあ確かにこの世界なら古代の機械巨人はブルーアイズに匹敵はしないが伝説クラスのレアカードに入るかな。

「更に俺はエネミーコントロールを発動！このカードの効果の三つのうち俺は相手モンスターの表情形式を変更するガイアナイトを守備表示に変更！」

大地の騎士ガイアナイト

DEF 800

俺が表示形式を変更したらギャラリーは「なんで守備表示に？」「プレイングミスか」など言っていた。

「ブヒヒヒ何で守備表示にしてんの守備表示にしたらダメージを与えられないよ！」

うわ！なんだこの勝ち誇った表示は。

弓女も周りの反応にあきれていた。

「はあ更に俺は速攻魔法リミッター解除を発動！リミッター解除の効果で俺の機械族の攻撃力は倍になる！」

古代の機械巨人

ATK 3000 ↓ 6000

「ブヒヒヒ！攻撃力をあげても守備表示だから意味がないよブヒヒ！」

その無知な度胸だけは認めてやるだが……その無知が命取りだ。

「俺は古代の機械巨人で攻撃！アルティメット・パウンド！！！」

「ブヒ！僕は罠カードを発動！」

しかし彼のデュエルディスクに『エラー』と現れたのだ。

「無駄だ！古代の機械巨人の前で小細工は通用しない！そして古代の機械巨人は貫通効果もあるんだ！！」

「ブヒヒヒヒヒヒヒヒ！！！」

豚身 4000 ↓ -1400

勝者↓海斗

「ブヒ！そんな僕が負けるなんて！僕が！」

「お前の負けた理由を教えてやるお前は自分の力を過信して自分の力しか信じていなかったカードの仲間の力を信じていなかった……それがお前の負けた理由だ」

豚身は「……ブヒヒヒ……」と言って崩れ落ちてしまった。

「単体でも強力カードはあるだが……それだけだ、単体で弱いカードでも仲間達の絆の力さえあればどんな逆境にも立ち向かえる覚えておけ」

俺はそれだけ伝えその場をさる。

「やっぱり海斗は強い！１ターンキルだよ！」

「たまたまだ……俺の力じゃないデッキが答えてくれた、だから勝てたんだ」

そうだ個人の力だけじゃそれが限界だ今の俺には遊星………そして新たな仲間、弓女が出来たんだ仲間の絆を信じたから俺は勝てたんだ。

「じゃあ勝利したお祝いに弓女のプレゼント………チュ」

「な！？」

弓女がいきなり俺の頬っぺたにキスをした何をやっているんだ弓女！！。

「へへへ海斗！じゃあデートの続きだよ」

弓女はそう言って走り俺はキスをされた頬っぺたを押さえながら弓女を追いかけた。

??? Side

彼の決闘を見ていた夫婦の一组がいた。

「ねえアナタ、さっきのあの子のペンダント」

「もう沙紀^{さき}海斗はもういないんだそれに海斗本人かわからないぞ」

「でもあのペンダントはそれに彼が使っていたデッキは！」

「もう17年も前に諦めはついたらさる沙紀、いくぞ」

彼は否定するけども……いいえ違くないわあの姿にあのペンダント
………それにあの古代の機械巨人……私達の息子……。

そつよ……ねえ海斗。

? ? ?
S i d e
O U T

八話「デートフラグ？男の嫉妬は怖いが殺られフラグ。（後書き）」

海斗「また短い決着だな」

ランサー「いやーすいません長く書くとは思っているんですが」

海斗「だったら仕事しろ」

ランサー「すいません」

第九話〜親友との再開そして女性難は主人公の決まりその1（前書き）

二人目のヒロインが誕生ですが今回も決闘はありません次回決闘です。

第九話　親友との再開そして女性難は主人公の決まりその1

あれから何日か過ぎ俺はついに親友の遊星の居所がわかった弓女の話によると遊星は何とトップスの中にいるらしい……何でもセキユリテイの情報にアクセスしたら遊星が治安維持局に自分のDホイールを取り返しに行った時に逃げている最中にトップスの近くで遊星の居所がわからなくなっただけらしい。

そこで弓女が聞いてみると弓女の数少ない知り合いの龍可と龍亜の家にいるらしい俺は今日、朝早く龍可と龍亜の家に行く事になっていた。

「はいはい！龍可ちゃん龍亜君おはよう！二人のアイドル弓女さんが来たよ♪」

元氣よくドアをあけて二人の少年少女に挨拶をする弓女に途中から入る俺は入る。

「あ、弓女姉ちゃんだ！」

「あ、おはようございます」

二人も弓女に挨拶する二人とも嬉しそうだ。

「ねえ弓女姉ちゃん隣にいる人ダレ？もしかして弓女姉ちゃんの彼氏！」

「コラ龍亜いきなり失礼でしょ！」

「フッフ良いのよ龍可、そうよ何を隠そう弓女さんは彼氏を越えて海斗は私の夫なのですよ！」

は？彼氏？……夫……まてまて！

「おい弓女！なにを言ってた俺は聞いてないぞ！」

「ええ弓女さんはもう海斗は夫になったと思ったよだって屋根の下でくらしてるんだから♪」

だからって弓女の夫って……なぜそうなる！。

「弓女姉ちゃんもう結婚したんだスゲースゲー！」
「いや君、俺は弓女の夫じゃないから」

子供の前で何を言っただよ弓女！龍亜が信じてるじゃないか！。

それから弓女の暴走を止めるのに時間がかかりなかなか本題に入れなかった。

それからして……………。

「そうかそんな事があったのか」

「ああ、直ぐに助けに行けなくてすまなかったな遊星」

あれから遊星にあえて俺はこれまでシティに着いた時に何があった遊星に話していた遊星もセキュリティの追跡を逃れた後、ジャックと決闘した最中に赤き竜が現れ決闘が中断され気を失いセキュリティに捕まりマークーをつけられ刑務所での出来事そしてDホイールの奪還等を聞いた。

原作どうり龍可と龍亜にかくまってもらったようだ。

「いや海斗が囹になってくれたからあのパイプラインを抜けられ俺

が無事にシティにつけた礼を言うのは俺のほうだ」

「よせよ遊星ならセキュリティの相手をして無事にパイプラインを抜けられただろ俺が余計なお節介をしただけかもな」

「海斗すまない」

「良いつて俺達は仲間だろこついつ時こそ仲間が助けるもんだ」

俺と遊星は互いに拳をあてそう誓う仲間を助けるのは当然だ。

「海斗×遊星……………じゅる」

「遊星×海斗」

何を言ってるんだ弓女……………それに龍可？なんか危険な目になってないか。

「これは受けるわ！」

「でも二人とも受けかしら」

「いや海斗は基本は受けだから遊星のヘタレ攻めよ！」

だから何の話をしているんだ二人とも？

「ねえ遊星、海斗、弓女姉ちゃんと龍可なんの話をしてんの？」

「いや俺もわからん遊星は？」

「いや俺も知らない」

結局……女の子の同士の話不思議な感覚で聞いていた俺と遊星と龍亜……結局二人の不思議なトークが終わるのはそれから二時間が過ぎたころであった。

それから龍亜が遊星と決闘して原作どうり龍亜はデIFOーマーを展開したが遊星がカードフリッパーで表示形式を変えてそこをニトロ・ウオーリアーで撃墜して遊星の勝ちで終わった。

それから龍可が今日はココに泊まっていったら言われ俺達は夜までココにいる事を決めた龍可と龍亜が寝付き弓女が寝た事も確認すると俺と遊星はココを出る準備を進めた。

「さて出るか遊星」

「ああ」

俺達は龍可と龍亜のでかくて扱いにくいデュエルディスクを改良して自分のDホイールの所に向かう。

「……もう行くんだ」

「……弓女」

俺達が出ていこうとしたら後ろから弓女の声が聞こえ俺は後ろをむき弓女に呟く。

「ああ弓女、言ったはずだ仲間を見つけたら俺はトップスを離れるって」

「うんわかってるよ弓女さん聞いたもん」

弓女はニコリと笑いそう言った。

「ねえ最後にいい海斗は弓女をどう思ってるの」

「弓女は大事な仲間だ」

そつだ弓女は大事な仲間だ弓女、どうしたんだ？

「そつか仲間なんだ弓女さん安心したよ」

「弓女？」

「弓女さん海斗について行くよ」

「な!？」

俺は驚きが隠せなかったそれは遊星も同じであつた。

「おい俺達についていったらセキュリティに目をつけられるんだぞ
良いのか!」

「海斗の言つとつりだ俺にはマーカーが着いてるセキュリティの包
囲網から逃げる事は難しい巻き添えを食らうぞ」

「良いの！弓女は海斗から離れたくないの弓女は着いていくの！」

ハアゝここで騒がれるのも面倒だ俺が突き放しても弓女は着いてく
るだろう仕方ない。

「弓女、後悔しても知らないぞ」

「海斗！」

「遊星、弓女は頑固なんだよ多分、俺達が突き放しても勝手に着い
てくる、それなら俺達と一緒にいたほうが良い。」

弓女はそれを聞いて嬉しそうに笑顔になる、そしてエレベーターに
乗り下まで降りる俺と遊星はDホールに乗る。

「弓女、後ろに乗れ」

「うん」

弓女を後ろに乗つけて俺はアクセスを回してトップスの町を抜け出す。

シティの町並みに入り走っていたら……………。

「待っていたぜクス野郎！」

前から牛尾が入ってきたのだ、他に女性Dホーラーがいたのだ。

「さあ観念してもらおうか」

「ここで捕まってください投降すればまだ罪は軽いですよ！」

この声……………どっかで聞いたような。

「あ、アナタはこの前あいました不審なDホーラー！」

「あ、アンタか！」

そつだ俺がシティに来たばかりの時に終われたセキュリティの女性

Dホィーラだ……あの時は顔をみてなかったがスタイルはスレンダーな巨乳でルックスも顔は整っており髪型は黒髪のサラサラなロングだ。

弓女とまた別な綺麗な女性であった。

「アナタは牛尾先輩から聞きました！アナタもサテライトから抜け出したんですね」

歳は相手のほうが上だしっかりものようだ……。

「犯罪は許しませんアナタを逮捕しますよ！」

彼女がそう言った瞬間に俺と遊星は逆に走りだす。

「逃がすかよ！」

「待ちなさい！」

そういいかけた瞬間に一台の車が目の前に立っていた。ピエロの男、イエーガーであったイエーガーは何かセキュリティの二人と交渉をしていた。その強引な内容に牛尾が……。

「しかしコイツはセキュリティ保管庫からDホイールを！」

「牛尾君、長官命令には逆らわないほうがよろしいかと思いますが」

「ぐ……………」

原作どうりイエーガーが介入してきた原作どうりここで無事に逃げれる……。

「納得が出来ません！」

女性セキュリティが反論をイエーガーに出す。

「ヒヒヒ何言ってるのですかアナタは身柄はコチラで預かると」

「私達の目的は犯罪者を取り締まることです、勝手に不問にされる行為は納得が出来ません！」

「おいよせミリア！」

「ですが牛尾先輩、私は嫌です犯罪をおかしてる人が不問にされる行為は納得が出来ないんです！」

頑固に反対するミリアさんかな……どうなるんだ？。

「仕方ありませんねこのまま騒がれるのも面倒ですならば決闘で決着をつけてください」

「決闘ですか」

「ええそこの二人乗りをしているDホイーラとスタンディング決闘を行なってください、それで決着をつけてください貴女がその男に勝てばその男の処遇は貴女に任せますが負けたら不問ですわかりましたね」

なんか勝手に話が進んでるような……まあ仕方ないか。

「聞きましたね！アナタと決闘です」

「わかった」

俺はDホイールを降りてDホイールのディスクをフォーメーションアウトしてデュエルディスクを腕にくっつける。

「私の名前はミリア・アリートですアナタの名前は」

「俺は真田 海斗だ海斗で良い」

「それでは海斗さん決闘です！」

自分の名前を教えて俺の名前も聞いて随分と礼儀正しいセキュリティだな。

「海斗！絶対に勝つてよ！」

「お、おう（弓女はどうしてミリアを睨み付けてるんだ）」

海斗はどうして弓女がミリアを睨み付けてる理由がわからなかった、それは……。

（うつうつ……あの女、スタイルがよくて胸がでかくて……それに海斗を名前で呼んで弓女さん気に入らないよ！）

ミリアのスタイルに嫉妬してミリアが海斗の事を名前で呼んだ事に納得がいかないでいた。

そして互いにデュエルディスクにデッキをセットして自動シャッフルされ決闘の準備が始まった。

「「決闘！！」」

原作と違うパターンだが弓女と約束をしたからな絶対に勝つぞ。

第十話、親友との再開そして女性難は主人公の決まりその2（前書き）

遊星が空気です、基本は主人公視点です。

第十話　親友との再開そして女性難は主人公の決まりその2

「私のターン！ドロー」

先ずはミリアが先行であった、この世界はジャンケンやコイントスで先行後攻を決めないんだよな先にやったもん勝ちで……………。

「仮面竜を守備表示で召喚です。」

レベル3

仮面竜

DEF 1100

仮面竜か…………撃破されても新たなモンスターが召喚されるな…………まあ普通なら。

「私はこれでターンエンドです。」

ミリア

フィールド

仮面竜

伏せカード無し

明らかに攻撃を誘ってるのだが俺の攻撃は甘くないぜ。

「俺のターンドロー俺はフィールド魔法歯車町を発動！」

周りが古代の機械の町並みに変わった。

「何ですか、このカードは!?!」

「今にわかる俺は古代の機械獣を召喚！」

レベル6

古代の機械獣

ATK 2000

「そんなどうしてレベル6モンスターがリリース無しで召喚出来るんですかー!!」

「フィールド魔法、齒車町のお陰だ、このカードは『アンティーク・ギア』と名のついたモンスターを召喚する場合にリリース要員を一つ減らせるのさ!」

そう特殊召喚が不可能な古代の機械獣は必ずアドバンス召喚しなくては、いけないがフィールド魔法齒車町なら特殊召喚に入らないから大丈夫なんだよな。

「俺は古代の機械獣で仮面竜を攻撃! パウンド・クロー!」

仮面竜は古代の機械獣の攻撃で塵となる。

「く、でも仮面竜の効果を発動です、このカードが戦闘で破壊された時、攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚出来ます!」

「無駄だ古代の機械獣の効果は破壊したモンスターの効果を無効に出きる仮面竜の効果は不発だ。」

「そんな！」

そう古代の機械獣の効果はキラ・トマトや巨大ネズミや仮面竜等の戦闘破壊された時にモンスターを特殊召喚出きるやつと相性は最悪だ。古代の機械獣は攻撃力こそレベル6にしては低いが効果は使えるからな。

「カードを一枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

古代の機械獣

歯車町

伏せカード↓一枚

「やった先制は海斗だよ！」

「ああ、確かに旨いプレイングだ古代の機械獣の特殊召喚が出来ないリリース要員をこんな形で無くすなどはな」

サンキュー弓女に遊星ほめてくれて。

「私のターンドロ私はアームド・ドラゴンレベル3を召喚です！」

レベル3

アームド・ドラゴンLV3

ATK 1200

「更に私はレベルアップ！を発動です！このカードはフィールド上の『LV』モンスターを墓地に送って記されてるモンスターの召喚条件を無視して特殊召喚が出来ます私はデッキからアームド・ドラゴンLV5を特殊召喚します！」

レベル5

アームド・ドラゴンLV 5

ATK 2400

「行きます！アームド・ドラゴンLV5で古代の機械獣を攻撃です！」

「甘いぜ俺は罠カード！炸裂装甲を発動！このカードで攻撃宣言をした時、相手モンスターを破壊するアームド・ドラゴンLV5を破壊！」

アームド・ドラゴンLV 5は吹き飛ばされて塵になった。

「ぐ、私はカードを一枚セットしてターンエンドです！」

ミリア

フィールド

無し

伏せカード↓一枚

「俺のターン俺は古代の機械兵士を召喚する！」

レベル4

古代の機械兵士

ATK 1300

「俺は古代の機械兵士と古代の機械獣でダイレクトアタック！」

「罨カード！リビングデッドの呼び声を発動します！」

いや教えていいのかそれより古代の機械のモンスターの大半はバトルフェイズの時は魔法と罨カードは発動出来ないぞ。

「そ、そんな発動が出来ません！」

「バカ！古代の機械兵士も古代の機械獣もバトルフェイズは罠カードは発動出来ないんだよ！習っただろ！！」

「はい！先輩すいませんキャア！！」

ミリア 4000 ↓ 700

この女性、本当にセキュリティなのか？なんか……今までみた……何回思ったか知らないがこれまでみたセキュリティの奴等と比べると失敗が多いなリビングデッドも俺がドロースタンバイフェイズに発動すればアームド・ドラゴンLV 5を召喚出来てアームド・ドラゴンLV 7を自分のターンに召喚出来た筈なのに。

「うっ………アナタ本当に犯罪者何ですか？」

「だから何だ？」

何が言いたいんだ？

「カード達の攻撃を受けてわかります、アナタはカード達を大切にしている事がカード達が幸せです！なのに何で犯罪を犯すんですか！

「！」

カード達の気持ちを感じる事が出来るのか？もしかしてミリアも精霊が見えるのか……いや見えるなら弓女のヒーロー達が見えるはずだが、そんな素振りは見えなかった。

「私は許せません！カードの皆さんを犯罪の道具にするアナタ達を！私のターンドロー！私はリビングデッドの呼び声を発動します！戻ってきてアームド・ドラゴンレベル5！」

レベル5

アームド・ドラゴンLV 5

ATK 2400

「更に私はもう一枚のレベルアップ！を発動しますこのカード（以下略）アームド・ドラゴンLV 7を特殊召喚します！」

レベル7

アームド・ドラゴンLV 7

ATK 2800

アームド・ドラゴンLV 7か、まだレベルアップ！を持っていたのか。

「まだです自分フィールドのアームド・ドラゴンLV 7をリリースして私はアームド・ドラゴンLV 10を特殊召喚します！！」

レベル 10

アームド・ドラゴンLV 10

ATK 3000

まさかあの時、既にアームド・ドラゴンLV 10はあったのかよ！！。

「更に私はアームド・ドラゴンLV 10の効果を発動します！アームド・ドラゴンLV 10はカードを一枚墓地に送ったら相手フ

「イールド上に存在しますモンスターを全て破壊できます!!」

しまった俺の古代の機械達がコレで俺のフィールドはがら空きだ。

「コレで海斗さんを守るモンスターさんはいません!アームド・ドラゴンLV 10でダイレクトアタックです!アームドビックパニッシャー!!」

「ぐわああ!!」

海斗 4000↓1000

「どうですか!カード達を犯罪に利用する人はこうなるんですよ!」

ぐ……確かに俺は友を守る為に古代の機械とマシンナーズを利用しただけかも知れないが俺だってカード達の絆を信じている!!。

「ミリアだったかな」

「はいそうです海斗さん!サレンダーしてくれますか!?それより

して下さい！私は犯罪者とはいえカードを大切にすることを傷つけた
くありません！！」

優しいな……傷つけないか……だが……。

「ミリアお前が、カード達を大切にすることを痛いほどわかる、
だがここでサレンダーしたら俺は戦ってくれたカード達や仲間の絆
を否定してしまう俺はデュエリストとして最後まで戦う！」

行くぞ！俺のカード達の絆！！

「俺のターンドロー！俺は速攻魔法サイクロンを発動！このカード
はフィールド上の魔法、罠カードを一枚破壊する事が出来る！俺は
歯車町を破壊する！」

「え、フィールド魔法を破壊ですか！？」

「ふ、歯車町にはもう一つ効果があるこのカードが破壊され墓地に
いった時、手札、デッキ、墓地からアンティーク・ギアと名のつく
モンスターを一体特殊召喚が出来る俺は古代の機械竜をデッキから
特殊召喚する、こい古代の機械巨竜！！」

レベル 8

古代の機械巨竜

ATK 3000

「あ、アームド・ドラゴンと攻撃力が並びました！」

「いくぜ仲間の絆は墓地に行っても同じ仲間を助ける力になる！俺は永続魔法一族の結束を発動する、このカードは自分の墓地に存在するモンスターが一種類の場合、自分フィールドのモンスターの攻撃力が800ポイントアップする！」

古代の機械巨竜

ATK 3000 ↓ 3800

「攻撃力3800！！」

「行くぜ俺は古代の機械巨竜でアームド・ドラゴンLV 10を攻撃！ギアクラッシュ・ダイブ！！」

「キャアアア!!」

ミリア 700 ↓ - 1000

勝者 海斗

「そ、そんな負けてしまいました」

彼女は膝をついて下を向いてしまった。

「うう……犯罪者を捕まえられませんでした……やっぱり私は全然ダメダメです」

「そんなことないぜ」

「……海斗さん？」

俺は彼女の所に近くにいき伝える。

「君はセキュリティしてはカードをクズ扱いしないで最後までカードを大切に戦っていたそれが重要だ、まあ犯罪者の俺が言う言葉じゃないがな」

「カードを大切にする気持ちですか？」

「ああ、君は俺がこれまで戦ってきたセキュリティの奴等と比べたら君のほうが断然に強かった君はカードを大切にしてカードの絆を大切に戦っていた、だからこそ俺も君に負けじとカード達の絆を信じて戦った、君はこれからまだまだ強くなるカードの絆を信じ続けるかぎり」

俺は彼女に手を差しのべる……。

「ふえ／＼海斗さん／＼」

「セキュリティは信用できないが君なら信用できる、また君がセキュリティとして俺を捕まえにくるならまた相手になろう、だが君、個人なら楽しい決闘を約束してくれないか？」

俺は微笑んでミリアそう言う。

「は、はい／＼／」

どうしたミリアの顔が赤いが……気のせいかな？。

「ちえりや!!」

「いて!!」

いきなり弓女が後ろから俺にチョップを食らわした、どうしたんだ弓女？。

「海斗！いくよセキュリティに勝ったから長居は無用だよ早くいくよ!!」

「どうした弓女、怒って？」

「怒ってないの弓女さん怒ってないの!!」

そんな怒鳴ったら説得力がないんだけど……俺は仕方なくDホイールに乗る。

「じゃあ、行くか遊星」

「ああ、そうだないい決闘だったぞ海斗」

「ありがとう」

俺は弓女を乗せて遊星と一緒にこの場を去った。

それより弓女はどうしてあんなに怒ったんだ？。

弓女 S i d e

うつうつ!!

海斗の浮気者なの！未来のお嫁さんが隣にいるのに別の女性を口説

くなんて弓女さん許せないの!!

でも海斗は自覚無しで口説くから余計に質が悪いの!あのミリアって言う牛乳女!絶対に海斗に惚れたよ絶対に……もう弓女さんに新たなライバルが出現なのです!

弓女さん!ファイト一発なのです!!

弓女 Side OUT

ミリア Side

ふええ///

何か海斗さんの手を握って表情を見たら胸がドキドキします!!

最初はサテライトを脱出してカードを利用する私が嫌いな犯罪者と思いましたが決闘をしていくうちにわかりました彼はそんな人間ではありません彼はカードを大切にしてカードの絆を信じている素晴らしいデュエリストです!。

決闘には負けましたが海斗さんに大切な事を学びましたカードの絆を大切にして信じ続けることです!!

私は今まで出会いました殿方は弱いカードを大切にしない嫌な
ばかりでセキュリティに入っても変わりはありませんでした……殿
方には幻滅した部分はありましたが海斗さんは別でしたカードを大
切にする思いとカードを信じて戦う姿勢に私は惚れてしまいました
／／／

本当はセキュリティの私は彼を捕まえなければなりませんが……で
すが惚れてしまったのですから私は決めました彼の心を捕まえます
！！

彼の心を捕まえて私の心を伝えてみせます！！

ミリア！初めての恋愛が始まりました！！。

ミリア Side OUT

第十話　親友との再開そして女性難は主人公の決まりその2（後書き）

ランサー「よ、人気者！美女二人も虜にするなんて！」

海斗「いやあれは違うだろ俺はミリアに約束しただけだ」

ランサー「はあ、鈍感だな自分の事にかんすると」

海斗「俺は自分の事は良い仲間が幸せになるなら俺はいくらでも力をかすぞ！」

ランサー「弓女とミリアが苦労しそうだな」

海斗「何か言ったか？」

ランサー「何でもねーよ！それではまたな！！」

第十一話　新たな親友の再開、宣戦布告。（前書き）

決闘はありませんが……ついにジャックの登場です。

第十一話　新たな親友の再開、宣戦布告

俺と遊星はトップスをたち雑賀の事務所に住まわせてもらい俺と遊星はDホイールの調整に明け暮れているが、基本は遊星に任せつきりだ俺もDホイールに関する事はわかるが基礎フレーム等の最低限の知識しかないからだ。そもそもこのDホイールも原型は俺が組み立てたが内部構造はつまりOSは遊星にやってもらい俺はあまり役にたつてない。

今も俺は遊星がDホイールの調整を見ているだけで俺は点検をやるだけだ。

「お客さんだ！」

雑賀が耳をふさぎそう怒鳴ると遊星はDホイールのエンジンを切る。

「ヤッホー矢薙の爺さんだよ！」

「よお元気だったか」

「……………氷室」

遊星の前に老人と屈強な男性が現れた……そう遊星が収容所での知り合いの矢薙と氷室であった。

「遊星、コイツらは？」

俺は一応、知っているが遊星に誰か聞く。

「俺が収容所にいた時、一緒に戦ってくれた仲間だ」

仲間と聞いて氷室は照れくさそうにして矢薙は年甲斐もなく嬉しそうはしゃぐ。

「そうか仲間か俺は遊星と一緒にサテライトからきた海斗だよしく」

「ああ遊星からお前の事は聞いてる決闘、強いんだって俺は氷室だよろしくな海斗」

「ワシも！聞いているぞ古代の機械とマシンナーズのデッキなんだっ

て強いつてきいたぞい海斗のあんちゃん」

氷室と矢薙と互いに自己紹介をする、しかし遊星、俺が強いか照れるななんか。

「マシナーズと古代の機械デッキか、真田 進さなだしんを思い出すな」

「真田 進？」

氷室が語り出す……誰だ？真田 進とは……？。

「氷室？真田 進は誰の事だ？」

「そうか知らないか俺も昔まだプロリーグに入る前の話だお前と同じで古代の機械とマシナーズを巧みに操り連戦連勝をしたプロ決闘者がいてな」

驚いたなまさか俺と同じデッキでプロリーグで戦っていた決闘者がいるとはな。

「そいつはチャンピオンに挑戦する前までいったが突然、プロをやめたんだ」

「どうしてだ？」

「さあな、連戦連勝して無敗のままチャンピオン挑戦権まで行った決闘者がどうして突然プロをやめたのか理由はわかってないが、その後の真相を知るものはいない。」

わからないか何故、やめたんだ……真田 進の話聞いて何故か胸がもやもやする……どうしてだ！

「どうした海斗！」

「遊星、何でもない」

ちよつと気になっただけだ……気にする必要はない。

それから遊星は氷室と決闘するため雑賀の収容所に出て広場で決闘をする事になった。

「アンタらにも見せてやりたかったね収容所で氷室ちゃんとやった時もアンちゃんがワシのデッキで気持ちよく勝ってくれちゃって

さ」

「氷室が言ってたぞトンでもデッキって言うんだって」

「違う！違う！秘宝デッキ！」

あの……デッキが俺もあのデッキを上手く回せる自信がないしな遊星は本当によくあんなとんでもない秘宝デッキを回せてたよな。

「爺さん悪いけどちょっと見せてくれないか？」

「おお！海斗のアンちゃんも見たいか良いぞ！ホレホレ」

俺は矢薙からデッキを受け取り、デッキの中身を確認した時に……。

「何だ！このデッキ！！」

俺は思わず声をあげてしまった、そうあまりにも高レベルなデッキの組み合わせに俺は声を高くあげてしまった。

「どおじゃ驚いたかのアッチのアンちゃんはコレで氷室ちゃんに勝ったんじゃぞ！」

「ああ、驚くよ別の意味で」

つつかよくこれで手札事故を起こさないで氷室のデッキに勝てたと俺は驚くしかない。

実際にどんなデッキは原作を見てわかっていたつもりだが実際に見るとこのデッキはレベルが高すぎる。

「本当だね弓女さんも驚いてしょうがないよ」

「うわ！弓女！いついたんだ！？」

「さっきだよ海斗達が出ていくのが見えたから着いてきた」

「……………そうか」

いきなり俺の目の前に現れて俺は心臓が飛び出そうになった弓女は本当に神出鬼没だな。

「全く、不思議な男だよな遊星もお前も」

「なんだ雑賀？」

「いや、あの女神がこんなにも他の奴に積極的に強力する事は先ずない、お前はそれをやっている遊星もそうだがお前も不思議な男だな」

「そうか俺は遊星を助けたいからここまで来たんだ、そう言う氷室も矢薙の爺さん……そしてアンタもだろ雑賀」

「そうだな俺もその一人だな」

不思議な男か……確かに遊星は人を引き付け絆を作る何かを秘めている雑賀も氷室も矢薙の爺さんも……そしてラリー達も遊星の何かに引かれて俺達は強力しているのかもな。

それから雑賀は弓女とは面識があるらしく弓女は雑賀に情報の提供をしており互いに理がある場合だけ情報の交換をしているらしい、それが俺が弓女と知り合う前の弓女で、こんなに弓女に慕われていた俺を見て雑賀は驚いていたな最初は……。

「「決闘!!」」

お、どうやら遊星と氷室の決闘が始まるみたいだな、そう思った矢

先に白いDホイールが遊星と氷室の間に割って入ってきた。

「ジャック……」

「キング！」

ジャックの突然の乱入に雑賀と矢薙の爺さんは啞然として遊星は友との再開に何かを考え氷室は自分が地下の賭博決闘にまで落ちたきっかけの人物が現れた驚くばかりであった。

「まさかまた会えるとは……キング」

氷室の問いにジャックは答えず眼中に無いと言わんばかりに氷室を無視した。

氷室はジャックの行動に怒るが遊星が首を横にふり氷室を止める。

「……なんのようだ？」

ジャックは何かを取り出して、一枚のシンクロカード……そう遊星のエースカード、スターダスト・ドラゴンを出したのだ。

「久しぶりだな……ジャック」

「ほう……貴様は海斗、貴様もシティに来ていたのか」

「遊星に何のようできた？」

「なにスターダストを返しにきたただスターダストを持った遊星を潰してこそ意味があるからな」

「潰すか……お前は友を捨ててキングになった、その苦しみは尋常ではない事はわかるが……」。

「潰すか……ハリボテのキングで遊星を倒す事は出来ないぜジャック」

「なんだと!!」

「そうだ……今のお前は一人で戦っている一人で戦うお前に遊星は倒せない。」

「この俺がハリボテのキングだと！海斗！！」

「そつだお前は、ハリボテのキングだ、お前は遊星に勝てない」

「ぐ、キングである俺様をこれ以上侮辱するなら貴様をここで叩きのめしてやるぞー！！」

ジャックはデュエルディスクを構えるが……俺は更においうちをかける。

「ジャック……お前は遊星に嫉妬してるんじゃないのか？」

「黙れ！！」

「いや言わしてもらっつお前は「黙らんか！！」……ジャック」

ジャックは遊星にスターダストを渡すと直ぐに自分のDホイールに乗る。

「海斗！！フォーチュンカップで遊星を倒した時は次は貴様だ！」

ジャックはそう言いその場をさった……………ジャック……………いつまで
孤独でいるきなんだ。

それから雑賀達があつまり、ホッと一息を着いた……………さてここから
が大変だな遊星……………俺はちゃんと見守ってるぜ……………フォーチュン
カップを。

ヒロイン紹介1

女神 めかみゆめ
弓女

年齢 16

身長 150

体重……秘密なの♪。

オリヒロインの一人でありトップス出身であるが裏の顔はネオドミノシテイのあらゆる情報を握っている情報屋であり情報の信用性は高く雑賀もよく利用しておりセキュリティや治安維持局等の裏の出来事の情報も握っておりジャックがサテライト出身なのも既に入手している。

情報屋になった理由は元々はデュエルアカデミアでは優秀な成績を納めており誰からも注目を浴びる輝かしいものであったが弓女の成績を妬みイジメにあっつてしまいイジメた連中に仕返すため情報をあつめ知られたくない事をばらし、そこから自分の身を守るのが情報と認識してそこから情報屋となったアカデミアでは自分の日常を取り戻したが同年から真の友人が出来ることはなかった。しかし

海斗とに出会い自分の気持ちを本気で理解してもらえかつての明るい性格に戻った。

性格は無邪気で子供っぽく純粋な少女そのものであるが少々ヤンデレ気質があるため危険な部分もあるが基本は純粋で明るい少女である。

デッキはE・HEROデッキであり5D・sの世界では珍しく融合が主な戦力となっている。

ミリア・アリート

年齢 21

身長 165

体重……ダメですよ！

セキュリティのDホイーラであり正義感が強い犯罪者を捕まえるためなら自分の危険もかえりみず捕まえる傾向があるため先輩Dホイ

ーラの牛尾も手をやくセキュリティである。セキュリティの人間には珍しく犯罪者でなければサテライト出身であつても差別はせず基本は誰にでも優しい純粋な女性。

カードを大切にしており不要なカードは一枚もないの信念がありカードが大切に扱われてる事を精霊が見えないが決闘で理解が出来るほどカードの気持ちには敏感な部分がある。現在はカードを大切に
して全力で挑む海斗に惚れて初めて恋愛をしている事を語っている。

性格は真面目で融通が聞かない石頭でありおつちよこちよいな部分がある決闘センスも少し爪が甘く、それほど強くない。

第十二話　黒薔薇の魔女に金齒あらわる

俺達は今、ダイヤモンドエリアに来ていた、当たりの人を見ればマーカー着きでいっぱいであつた町並みの雰囲気も少しサテライトに似ている為か居心地はそれなりに良かった。

雑賀がと弓女がサテライトに行く交渉をするためココにいる。お、雑賀と弓女が帰ってきた。

「遊星、海斗、サテライトに潜りこめるように話をつけてきた今夜たつ」

「ふふふ、弓女さん達の交渉術はどう海斗！」

雑賀と違い子供っぽくぴょんぴょん跳ねる弓女に俺は呆れて俺は弓女の頭を優しく撫でた。

「さすが何でも屋、出来ない事はないもんだな」

「わけがありが集まるこの町だから出来ることさ」

「あと弓女さんの情報もね！」

わけありか……一度マーカーをつけられると社会から追放されたようなものだからな実際にサテライトもマーカー着きとマーカー無しではサテライト住人同士でも扱いに差が出てしまうからな。

「まあ確かに、ここならワシらも目立たないからな」

「マーカー着きでシティにも行けないサテライトにも落ちたくない、そんな奴等が肩を背負って生きていく町か……」

確かにマーカー着きだけでシティの人間は俺達を見る目が冷たいからな。

「サテライトの事は俺に任せてお前はフォーチュンカップで暴れてこい」

「そうだぜ遊星、俺は見てる事しか出来ないが出来る限りはバックアップしてやるぜ」

雑賀は肩を叩いて遊星にそう言い俺も遊星の背中を押す言葉を言った。

ん……子供がここにいる、しかも一人は龍亞じゃないか。

「おい遊星、あれ龍亞だよな？」

「ああ、そうだな」

「本当だね龍亞君だ」

俺達は龍亞に気づき龍亞の所に向かった。

「遊星と海斗も来てたんだ！」

「どうしてこんな所にいる？子供が来るようなところじゃないぞ龍可はどうした？」

「留守番してる」

なんとも早い再開だな龍亞との………それよりメガネをかけてる龍亞と同じ年と思われる少年はびびってるな。

「なんだい僕たちは？」

「みんな遊星の友達なの？」

龍亞………本当に誰にでも関係なしにせつするよなマーカーが着いてる遊星達にも関係なく。

「やれやれ龍亞は、本当に誰にでも仲良くなるよな」

「それが龍亞君の良い所なの海斗、弓女さんもそんな龍亞君が大好き」

はは………そうか弓女の数少ない知り合いだもんな龍亞と龍可は………

そう考えていた時に突然、遊星が腕を押さえて膝をついた。

「おい！遊星！」

「遊星、大丈夫!？」

突然、膝を着き倒れる遊星を皆が心配する。

「あの時と同じだ」

「あの時？」

「赤い龍が現れた時」

遊星がいかけた時に突然、地面を揺るがすような音が周りに聞こえた、その事態にダイヤモンドエリアの住民は騒ぎだした。

「うわあああ!!」

「魔女だ!!」

「魔女？」

「本当に出たんだ!?! ドコドコ!?!」

龍亞……気楽だな、そんなことより周りは大騒ぎだ。

そして次は突風が吹き始めた。

「これは黒薔薇の魔女だよ海斗！」

「黒薔薇の魔女！？」

そうかアキがココに来ている原作どおり、しかしこの時点のアキはまだ心を閉ざしている状態だな。

「女神の言うとりだ！ココにいたら巻き添えを食らうぞ！」

雑賀がそういった瞬間に地面からイバラが現れて当たり一面を破壊の限りを尽くしていた。

「「「うわあああ！！」」」

「キャアアア！！」

俺達も巻き添えをくらい吹き飛ばされ俺はバランスを保ち弓女を抱き弓女を助けた。

「弓女！大丈夫か！？」

「う、うん弓女さん平気だよ／＼」

どうした弓女？

俺は仰向けの弓女を抱いているだけだぞ？

そんな事を考えている海斗だが海斗は弓女を他人から見ればお姫様抱っこをしている状態なのだ。

「ドラゴン？……う！」

遊星はまた腕が痛み服を巡ると赤いアザが現れた。

「アンちゃん」

「おい、こんなのあったか？」

「これがシグナーの証だよ龍のアザなんだよ」

シグナーの証しか……俺はイレギュラーだが遊星やジャック、そして皆のような特別な力がないからたいした助けも出来ないんだよな。

俺はそんな自分が少し嫌であった。

「どうしたの海斗？」

「いや何でもない」

俺は弓女に心配がないようにそう伝えた。

次の瞬間、当たりが光出した、そして煙で認識は不十分だがブラックローズ・ドラゴンと思われる影があった。

遊星は腕を押さえながら魔女の所に駆けつける。

「……魔女」

「あれが魔女」

仮面をつけているが間違いなくアキであった。

「黒薔薇の魔女、本当にいたんだな」

「おつたまげだ」

確かに雰囲気からしてただ者じゃない、これがサイコデュエリスト。

「……お前も」

「お前も？」

魔女は遊星のアザを見て呟きそして……。

「忌むべき印だ！！」

魔女がデュエルディスクに魔法カードをセットした瞬間に突然、暴風が俺達を襲った。

暴風が止むと魔女は居なくなっていた。

「……いない」

「今のなんだ？ソリッドビジョンなのに何で魔法カードのパワーでワシら吹っ飛ばされた!？」

「本当に……本当にいたよ……。」

「消されなくて良かった……。」

矢薙の爺さんは魔女の力に驚き龍亞達は魔女の力に怯えて涙目になっていた。

確かにあの雰囲気は尋常じゃなかった遊星、本当によくあんなプレッシャーに打ち勝てたな。

「みっくけーたぞ！サテライトのクス！」

突然、魔女が吹き飛ばしたがれきの山から一人の男……もとより金歯のセキュリティだった。

「なんだアンタか」

「貴様を捕まえに来たぞ！」

は？何を言っているだ、この男？。

「何で俺を、俺は確かあんたの上の人間に不問にされたぜ」

「黙れ！貴様に負けたお陰で僕は、セキュリティでの立場は弱くなり僕のトップス出身としての誇りを傷つけた！！」

逆恨みか……情けないな。

「う、アイツ」

「何でいるんだよ！」

弓女と龍亞が嫌そうな表情になっていたどうした？。

「どうした弓女、龍亞？」

「アイツねトップス出身っただけで威張ってて父親が海馬コーポレーションの部長だからって、それもふくめて威張ってる最悪なやつよ」

「そつだよ、トップスの皆にも嫌われてるし！」

なるほど確かに嫌われてるのがわかるよな、性格も考えも最悪だからなコイツ。

「うるさい！僕はトップス出身なんだトップス出身がサテライトのクズやシティの身分が低レベルの奴等を見下して何が悪い！！」

聞いていてだんだんムカついてきたな。

「とにかく僕は君を逮捕する！これは僕の決めた事だ！」

「おい」

「なんだねクズ」

「俺と決闘しろよ」

俺は自分のデッキを見せて金歯にそう言った。

「良いだろう僕は君に決闘に勝って汚名を返上してやる！」

金歯も自分のデッキをセットして決闘の準備に入る。

俺は弓女のデュエルディスクを借りて決闘に入る。

「「決闘！！」」

海斗 4000

金歯 4000

「僕の先行ドロー！僕はサファイアドラゴンを召喚！」

レベル4

サファイアドラゴン

ATK 1900

「更に僕は二重召喚を発動、これにより僕は通常召喚を行える僕はサファイアドラゴンをリリースして現れる！ストロング・ウィンド・ドラゴン！！」

レベル 6

ストロング・ウィンド・ドラゴン

ATK 2400

「ストロング・ウィンド・ドラゴンの効果を発動、このカードはドラゴン族をリリースした場合このカードの攻撃力はドラゴン族モンスターへの攻撃力の半分アップする！」

ストロング・ウィンド・ドラゴン

ATK 2400 ↓ 3350

「僕はカードを一枚セットしてターンエンド」

金歯

フィールド

ストロング・ウィンド・ドラゴン

伏せカード↓一枚。

「俺のターンドロ―！俺はイエロー・ガジェットを召喚、このカードの効果で俺はグリーン・ガジェットを手札に加える」

レベル4

イエロー・ガジェット

ATK 1200

「そんなザコを召喚して僕のストロング・ウィンド・ドラゴンにはかなわないよ！」

少し黙れ決闘は攻撃力だけじゃ勝てないぜ。」

「更に俺は魔法カード強制転移を発動、このカードの効果で互いに自分フィールドに存在するモンスターを一体選択してモンスターを入れかえる」

「なに僕のストロング・ウィンド・ドラゴンが！」

俺のイエロー・ガジェットが金歯のフィールドに現れストロング・ウィンド・ドラゴンは俺のフィールドに現れた。

「ストロング・ウィンド・ドラゴンでイエロー・ガジェットを攻撃、ストロング・ハリケーン！」

「ぐー！」

金歯 4000 ↓ 1950

「俺はカードを二枚セットしてターンエンド」

海斗

フィールド

ストロング・ウィンド・ドラゴン

伏せカード↓二枚

「くそ！僕のターンドロ！僕はカードを一枚捨て死者への手向けを発動、ストロング・ウィンド・ドラゴンを破壊する！」

ストロング・ウィンド・ドラゴンは地面から現れた包帯に巻き付かれ塵になった。

「更に僕は古のルールを発動！手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚出来る現れろ！真紅眼の黒竜！」

レベル7

真紅眼の黒竜

ATK 2400

「真紅眼の黒竜！」

「凄い！伝説のレアカードだ！！」

氷室達は驚く、そんなに凄いのかな真紅眼の黒竜？

前世で使ってる決闘者ってあんまり見なかったから俺の周りって流行にのるやつばかりでシンクロモンスターやエクシーズばかり使うやつらばかりだったからな。だからあんまり見なかった。

「ふふふ、僕はサテライトのクズにダイレクトアタック！いけ黒炎弾！！」

真紅眼の黒竜の黒炎弾が俺に襲いかかる

「この瞬間、罨カード、くず鉄のかかしを発動このカードの効果で相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にでき再びセット出来る」

くず鉄のかかしは遊星だけじゃないぜ。

「ふん僕は、カードを一枚セットしてターンエンドだ」

金歯

フィールド

真紅眼の黒竜

伏せカード↓二枚

「俺のターンドロ」

ここは防ぐしかないか。

「俺はフィールド魔法、歯車街を発動する」

フィールド魔法をセットすると古代の機械の町並みが出現した。

「俺は古代の機械獣を守備表示で召喚、フィールド魔法、歯車街の

効果でリリース要員は一つ減る」

レベル6

DEF 2000

「甘いなクズこの瞬間、罠カード発動！落とし穴！」

俺の古代の機械獣は突然現れた穴に吸い込まれるように落ちた。

「俺はコレでターンエンドだ」

海斗

フィールド

無し

伏せカード↓二枚

「僕のターンドロ―！きたきた僕のエースカードが！」

エース一体何がくるんだ？

「僕は真紅眼の黒竜をリリースする、このカードをリリースした時に現れる最強モンスターが現れる！」

最強モンスターってアイツか。

「現れる！真紅眼の闇竜！」

レベル9

真紅眼の闇竜

ATK 2400

「このカードの効果は真紅眼の黒竜をリリースする事により手札から特殊召喚できる！更に僕は永続罠カードリビングデッドの呼び声を発動して墓地から真紅眼の黒竜を召喚する蘇れ！真紅眼の黒竜！」

レベル7

真紅眼の黒竜

ATK 2400

「真紅眼の闇竜の効果を発動する、このカードは自分の墓地に存在するドラゴン族一体につき攻撃力が300ポイントアップする、僕の墓地にいるドラゴン族は一体だが上級モンスターなのには変わりはない！」

真紅眼の闇竜

ATK 2400 ↓ 2700

「僕は真紅眼の黒竜でサテライトのクズをダイレクトアタック!!」

「この瞬間に罠カード発動くず鉄のかかし、このカードの効果で一度だけ攻撃を無効に出きる、そして再びセットする」

「わかってるよ君のクズの戦術は更に僕は真紅眼の闇竜でダイレクトアタック、ダークネス・ギガフレイム!!」

「ぐわあああ!!」

海斗 4000 ↓ 1300

「どうだクズ!今度こそ僕の勝ちだ君が僕に恥をかかせたらこうなったんだよ!!」

勝手に勝つ気ているなよまだまだ俺は負けたつもりじゃないぜ。

「海斗、大丈夫かな?」

「おい、アンちゃん」

「心配いらない海斗は、これくらいのピンチで屈する決闘者じゃない。い。」

龍亞、心配するな、それにサンキューな遊星、そのとおりだ俺はまだまだやれるぜ。

「俺のターン!」

来たぜ俺の逆転の道が！

「俺は速攻魔法、サイクロンを発動する！」

「なに、僕のリビングデッドを破壊するつもりか！」

「いや俺が破壊するのは歯車街だ！」

突風に巻き込まれ歯車街は崩れはじめた。

「何をやってる自分のモンスターをリリース要員を一つ減らせる大事なフィールド魔法を破壊して！」

甘い金歯。

「このカードが破壊された瞬間に俺は歯車街の効果発動！このカードが破壊され墓地にいった時、俺は手札、墓地、デッキから『アンティーク・ギア』と名のついたモンスターを特殊召喚が出来る！俺はデッキから古代の機械巨竜を特殊召喚する、こい古代の機械巨竜！」

レベル8

古代の機械巨竜

ATK 3000

「な、またそのモンスターか！」

そういえばサテライトでライティング決闘をした時にコイツに止めをさされたからな。

「更に俺は速攻魔法！リミッター解除を発動して俺の機械族は攻撃力は倍になる！」

古代の機械巨竜

ATK 3000 ↓ 6000

「攻撃力6000！いやだ、負けたくないやめろ！」

「これで最後だ！古代の機械巨竜で真紅眼の闇竜を攻撃！ギアクラッシュ・ダイブ！」

「そんなあああああ!!」

金齒 1950 ↓ - 1350

「やった海斗が勝った!」

「スゲーぞアンちゃん!」

「流石だな遊星が認めた決闘者だな」

決闘に勝って氷室、矢薙に龍亞にもみくちゃにされた、ははなんか嬉しいな。

「くそ君を逮捕する!」

「ちょっと決闘に負けたくせになに言っているのよ!」

弓女が金齒に文句を言う。

「黙れ！トップス出身の僕は何をやっても許されるんだ！それに僕はセキュリティだぞ！僕に逆らったら君も逮捕だ！」

なんだよ、コイツまるで権力を振りかざす最低な塊みたいだな、まさかココまで酷いとはな。

「ヒヒヒ、そこまです」

突然、不気味な笑い声が聞こえた、イエーガーであった。

「君の発言は全て、聞かせてもらいましたよ」

「あ、あああ」

イエーガーの顔をみて表情が青くなった……まあ無理もないか自分の上司が目の前にいて、あんな発言を聞かれたんだからな。

「君の発言に行動はセキュリティには相応しくありませんね、君のこれまでのセキュリティでの地位は剥奪させていただきます」

金齒はそれを聞いて膝をついてしまった。

「申し訳ございません、それでは」

イエーガーはそれだけ言つてその場をさり金齒は遅れてきたセキュリティに捕まり連れていかれた。

「良かったね海斗、弓女さん安心」

「まあな、流石にあの発言には俺も殴りそうになった」

「そうだね弓女さん、もしあれ以上あの金齒が海斗にやったら○×

□……そして○×」

注意↓恐ろしい事を言っているので言葉に出せません。

俺達は弓女がああ金齒にやる行為について恐ろしくなってしまった……この後、遊星達と弓女を絶対に敵にしないようにと心の中でそう決めたのだ。

そういえばあのセキュリティの名前……なんだっけ？。

第十三話　開催フォーチュンカップ、そして現れる最悪な転生者。

俺達は今、フォーチュンカップの会場にいる、そこに遊星や氷室に矢薙の爺さんに龍可、龍亞に天兵に俺と弓女がいる。

「どお遊星、龍可にそっくりでしょ」

「さすが双子、全然わかんないよ」

いや……そうか（汗）

化粧しないで髪型だけ変えれば良かったと思うんだけど。

「でしょ！でしょ！」

龍可ははしゃぐ龍亞に足を蹴る。

「私、そんなんじゃない」

「まあまあ龍可ちゃん、弓女さん可愛いと思うよ」

いや……だから髪型だけ変えたほうがいいって化粧はいらないよ。

「もう弓女さんまで」

「拗ねるなよ龍可」

俺は頬を膨らませる龍可をなだめる……はは、だけどこれから始まるんだなフォーチュンカップが……。

ピキーン!!

ん……なんだ気配がする殺気？。

いや違う殺気とは別の何かだ……なんだ？。

俺は後ろを向くと一人の男が立っていた。

「誰だお前は？」

「貴様にようはない不動遊星、俺と決闘しろ」

いきなり現れた一人の男、長身で銀髪でキザな表情をしていた。

「俺と決闘？」

「さて遊星、コイツの話に乗るなもう開会式が始まるだろ」

俺は遊星の前にたち割り込んできた銀髪の男の前にたつ。

「お前……どういっつもりだ勝手に現れて遊星に決闘を申し込んで」

「貴様に関係はない、俺は遊星を倒して、この物語の主演になるんだよ」

物語の主演にだと……まさかコイツ。

「遊星、コイツの相手は俺がやるお前はフォーチュンカップでやることがあるだろ」

「しかし、良いの海斗？」

「言っただろ、このバカは俺に任せろ」

俺は遊星にそう言い俺は視線を銀髪に向ける。

「聞いているとおりだ遊星はフォーチュンカップで忙しいんだ遊星に話があるなら俺に言いな」

「ち、まあいい貴様にもようがあつたからな」

「俺にも？」

確信は持てないが……コイツ、俺と同じ転生者か？。

「弓女も氷室達と先に行つてくれ俺は後からいく」

「え、やだ弓女さん！海斗についていく！-」

「弓女！これは大事な話があるついてくるな！」

俺は真剣な表情で弓女にそう言った。

「う、うんゴメン海斗」

「いや、すまん言い過ぎだ、弓女すまない」

「うっん、じゃあ会場の客席でまってるから」

弓女はそう言っただけで俺から離れて遊星と龍亞は開会式に氷室達は客席に向かった。

「さあ、お前は誰だ？何故、俺や遊星にようがある？」

コイツはサテライトでもあった事がない……しかしコイツの放つ殺気とも別な気配はなんだ？。

「教えてやるよ俺の名前は、銀隼人ぎんはやと貴様と同じ転生者だ!!」

「なに!?!」

コイツが転生者！？

まさか俺、以外にもいたのか……いや巫女の話で天界のミスで死なせた人間は転生者になるか天界で静かに暮らすかのどちらかと聞いたからな他にいても不思議じゃない。

多分、コイツは俺と同じように5D・sの世界に来たんだな。

「その転生者が俺と遊星になんのようにだ？」

「は！？決まってるんだろ！原作主人公を倒して俺がこの世界の主役になるんだよ！！」

ち、巫女に聞いた最悪な転生者にまさかあうとはな。

「お前！自分がやろうとしている意味がわかってるのか！！」

「はぁ！知るか！俺は原作主人公を倒し原作ブレイクを起こして女キアラを俺の奴隷にして俺は自分のハーレムを作るんだよ！！」

聞いていて最悪な転生者だな。

自分の欲望に忠実って訳かよ。

「お前も転生者ならわかるはずだ！これから起こる冥界のダークシグナーや未来からの襲撃者イリアステル！お前も転生者なら少しはこの世界を平和にしたいと思わないのかよ！！」

「思わねーな！俺はハーレムさえ作れればどうでも良いんだよ原作を破壊してもどうせ原作キャラがどうにかしてくれるしな！！」

コイツは許さねえ！！

自分の欲望に忠実で他の皆が困ろうが関係ない考えのコイツが！！。

「他にも転生者は俺だけで十分だ！お前を倒して俺がこの世界の主役になる、それにお前の隣にいた女、かなり良い女だったな原作ブレイク記念に俺の女奴隷1号にしてやるよ！！」

「ふざけるな！弓女は俺の仲間の一人だ、そんなことさせてたまるか！！」

もう我慢できない！

俺と同じ転生者なら少しは仲良く出来ると思ったがコイツとは仲良くするつもりはない!!。

「へ！俺と決闘しな原作ブレイク記念にお前を相手にウォーミングアップだ！」

「俺はお前の考えを否定する！俺はお前を倒す!!」

俺達は別の部屋に移動しそこは決闘場がありそこで俺達は互いのデュエルデイスク腕に装着してデッキをセットしてデッキは自動シャッフルがされる。

「「決闘!!」」

海斗 4000

銀 4000

「先行は俺が貰うドロー！俺はマシンナース・スナイパーを召喚！」

レベル4

マシンナース・スナイパー

ATK 1800

「カードを一枚セットしてターンエンド」

海斗

フィールド

マシンナーズ・スナイパー

伏せカード↓一枚

「俺のターンドロ―！俺はバイス・ドラゴンを特殊召喚召喚！」

レベル5

バイス・ドラゴン

ATK 2000

「このカードは自分フィールド上にモンスターが存在せず相手フィールドにモンスターがいる場合特殊召喚できる、ただし攻撃力は半減するが。」

バイス・ドラゴン

ATK 2000 ↓ 1000

バイス・ドラゴン……ここでシンクロ召喚をするつもりだな。

「更に俺はチューナーモンスター、ダーク・リゾネータを通常召喚する」

レベル3

ダーク・リゾネータ

ATK 1300

まるでジャックの決闘を見ているみたいだな……こいつのデッキはジャンクと同じパワーデッキか。

「更に俺は手札から魔法カード、サンダーボルトを発動！」

なに！禁止カードだろそれは！

雷が俺のマシンナース・スナイパーを襲い俺のスナイパーは消えた。

「お前！禁止カードだろそれは！」

「はん勝てれば良いんだよ！」

手段を選ばないやつみたいだな。

「行くぜ俺はレベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネ
ータをチューニング！」

5 + 3 = 8

「王者の鼓動、今、ここに列をなす天地鳴動の力を見るがいい！」

「このシンクロ調!？」

おいまさかこれは……。

「シンクロ召喚！我が魂！レッド・デーモンズドラゴン！」

レベル8

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

「なんでお前がレッド・デーモンズを！」

この世界に一枚しかないレアカードのはずだぞ何故、レッド・デーモンズが！？

しかしジャンクのレッド・デーモンズと違い色違いのレッド・デーモンズであり色は赤ではなく紫色のレッド・デーモンズであった。

「コピーしたんだよ！苦労したぜコイツのコピーカードは値段が半端ないからな」

禁止カードだけじゃなき俺の親友のカードをコピーまでして……もうコイツは決闘者と呼べない！！。

「行かせ俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンでダイレクトアタック！アブソリュート・パワーフォース！！」

レッド・デーモンズが俺に殴りにかかってきた。

「俺は罠カード発動！くず鉄のかかし、このカードの効果で戦闘を一回無効に出き再びセット出来る！」

かかしが現れレッド・デーモンズの攻撃を防いだ。

「ち、運がいい野郎だ俺はカードを二枚セットしてターンエンドだ。」

銀

フィールド

レッド・デーモンズ・ドラゴン。

伏せカード↓二枚

「俺のターンドロ―！俺は古代の機械兵士を守備表示で召喚する」

レベル4

古代の機械兵士

DEF 1300

「俺は更にカードを一枚セットしてターンエンドだ。」

海斗

フィールド

古代の機械兵士

伏せカード↓二枚

レッド・デーモンズの効果で守備モンスターは一層されるがここは守備に徹するしかない。

「はん！レッド・デーモンズの効果を知ってるのに守備表示かよ俺のターンドロー！俺は未来融合・フューチャー・フュージョンを発動、このカード効果で融合モンスターは2ターン後に俺のフィールド

ドに融合召喚される俺が選択するモンスターは『青眼の究極竜』だ
！」

今度は社長の嫁かよ！！。

「まさか、そのカードも」

「察しがいいなコイツもコピーカードだぜ！」

やっぱりな青眼の白龍は世界に四枚しかないレアカードだ……そんなカードを、この世界で持つてる事態がおかしい。

「そこまでして勝ちたいのかよ！」

「うるせえ！俺が原作キャラに勝つためには禁止カードしかないんだよ！！！」

つまりコイツは自分の力に自信がないのか。情けないな自分のデッキを信用してない証拠だ。

因みに俺の遊星、ジャック、クロウの勝率は五分五分だからな。

「行くぜさらに俺は罨カード、スピリットフュージョンを発動、このカードの効果で1000ライフ払って墓地から融合召喚する」

銀 4000 ↓ 3000

「融合召喚！現れる『青龍の究極竜』！！」

レベル12

青龍の究極竜

ATK 4500

しかし許せない！

俺の友人のカードをコピーする拳句に過去とはいえ、この世界で偉大な決闘者のカードをコピーするなんて！！。

「更に俺は手札の融合を発動！手札のデーモンの召喚と真紅眼の黒竜を手札融合！現れるブラック・デーモンズ・ドラゴン！！」

レベル9

ブラック・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3200

大型モンスターが三体かよ……。

「いくぜ！俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンで攻撃だ、アブソリ
ユート・パワーフォース！！」

く、くる！

「俺は罠カード、くず鉄のかかしを発動してモンスター一体の攻撃
を無効にして再びセットする！」

かかしが表れ再び俺を守ってくれたくず鉄のかかし……便利だよな
くず鉄。

「わかってるんだよ更に俺はブラック・デーモンズ・ドラゴンで攻

撃だ、メテオ・フレア！！」

今度はブラック・デーモンズのメテオ・フレア。

「更に俺は罨カード発動ドレイン・シールド、このカードの効果で攻撃したモンスターは攻撃は無効され、その攻撃力分ライフを回復する。」

海斗 4000 ↓ 7200

「だがまだ俺はもう一体いるぜ！俺は青眼の究極竜で攻撃！アルティメット・バースト！！」

「ぐー！！」

嫁……もとより青眼の究極竜のエネルギー弾が古代の機械兵士に直撃して塵になった。

「更に手札から融合解除を発動して俺はブラック・デーモンズ・ドラゴンの融合を解いて、デーモンの召喚に真紅眼の黒竜を特殊召喚だぜ！」

レベル6

デーモンの召喚

ATK 2500

レベル7

真紅眼の黒竜

ATK 2400

「バトルフェイズ中の融合解除は攻撃は出きるぜ！俺はデーモンの召喚と真紅眼の黒竜で攻撃！デーモン、魔降雷！真紅眼、黒炎弾！」

「ぐわあああー！」

海斗 7200 ↓ 2300

デーモンの召喚の雷に真紅眼の黒竜の黒炎弾をまともに食らった。

「更に俺は天よりの宝札を発動して互いのプレイヤーはカードが六枚になるようにドローできるぜ俺は手札がゼロだからカードを六枚ドローするぜ」

「俺は三枚ドローする」

宝札はアニメ効果なのか……しかしこのカード効果、禁止カードに指定されてもおかしくないか。

「カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

銀

フィールド

青眼の究極竜

レッド・デーモンズ・ドラゴン

デーモンの召喚

真紅眼の黒竜

伏せカード↓二枚

「おい、サレンダーしたらどうなんだ？（それに俺の伏せカードはミラフォが二枚に手札はサンダーボルトが二枚だ俺の勝利は確定だぜ）」

「断る俺はお前が許せない！」

「何がだよ」

「禁止カードを使い俺の友人のカードをコピーし、そして偉大なる決闘者のカードまでコピーして決闘者の誇りを汚すお前を俺は絶対に許さない！！」

「は、勝負は勝てば良いんだよ！そんな偉そうな言葉は俺に勝つてからいいな、まあ無理だけどな！！」

ヘラヘラ笑って俺を見下す銀……残念だが、こんな展開は昔から経験してるぜ！。

「俺のターン、ドロー！」

きたぜ！俺の切り札を呼ぶ鍵が！

「おい銀！お前は俺を完全に怒らせた見せてやる俺のデッキの真の切り札を！！」

まさかコイツを召喚するのは遊星、ジャック、クロウなど仲間の皆にしか見せてない代物だ。

「俺は魔法カード、パワーボンドを発動する！俺の手札にある古代の機械巨人を三体を手札融合、現れる！古代の機械究極巨人！！」

レベル10

古代の機械究極巨人

ATK 4400

「な、攻撃力4400！（いや安心しろまだ俺の青眼の究極竜のほうが上だ）」

銀……安心して悪いがパワーボンドの効果을忘れてないか……。

「更に俺はパワーボンドの効果発動！このカードの効果で俺の機械族の攻撃力は倍になる！！」

古代の機械究極巨人

ATK 4400 ↓ 8800

「な、俺のモンスターの攻撃力を上回った！！」

「まだまだ！俺の怒りは、この程度で収まった覚えはないぜ！速攻魔法リミッター解除を発動だ！！」

古代の機械究極巨人

ATK 8800 ↓ 17600

「お、おい嘘だろ！！」

「！」

「わ、悪い俺が悪かった!!」

この怒りは、もう収まらないぜ!!

「ヒヒヒ、そこまでにしてもらえませんか？」

この薄気味悪い笑い声は……イエーガーであった。

「何かようか？」

「長官が貴方にようがあるのです来てもらいませんかヒヒヒ」

ゴドヴィンが俺に？ 一体に俺になんのようが？。

そう考えていた隙に銀が逃げ出した。

「あ、待ちやがれ!!」

クソ！逃げられたか!!。

「ご安心をあゝの男は近いうちに捕まりますよコピーカードは重罪ですから彼はそう遠くないうちにヒヒヒ」

本気で薄気味悪い笑い声だが、仕方ないゴドウィンの誘いだ、絶対に重要な話があるに違いない、ここは正直についていこう。

それにしてもアイツ……見つけしだい絶対にぶっ飛ばす!!!!!!。

第十三話　開催フォーチュンカップ、そして現れる最悪な転生者（後書き）

海斗「なんか気分が悪いぜ」

ランサー「まあ禁止カードを悪びれなく使ったからね」

海斗「それならまだ許せる！だがコピーカードは許せない！！」

ランサー「でも、それを言ったらGXの転生者はどうなる、コピーカードじゃないけどシンクロで友人のカード使ってるぜ」

海斗「GXは本気で自分のカードを使っているから、何も思わないしかし……あいつが使ったコピーカードは決闘者の魂を汚しているんだ！！」

ランサー「なるほど海斗が許せないのはコピーカードなのか」

海斗「そつだ！決闘者にとってカードは魂だ！それを汚すコピーカードは俺は許せない！！」

ランサー「それでは今日はこれで」

第十四話 遂に現れる元凶の男に最悪な転生者の末路。 (前書き)

少しライダーネタあり後書きにネタもあります。

第十四話　遂に現れる元凶の男に最悪な転生者の末路。

俺は銀との決闘の後にイエーガーに呼ばれゴドウィンが俺にようがあるらしいが何故、俺にようがある？。

俺はシグナーのような特別な力なんか、ないぞ……まあ特技があるとするれば遊星と同じように修理が得意なくらいだし最近、気付いたことで精霊が見えることかな。

「それでは、お入りください」

俺は扉があき部屋に入ると、ゴドウィンが立っていた。

「よく、来てくれましたね」

「そんな事はいいい、何故、俺にようがある」

俺は自分の意見を率直にゴドウィンに言った。

「ふむ、仲良くお茶ともいきませんね」

「当たり前だ、お前と一緒に飲めるか」

「では率直に言いましょう、フォーチュンカップに参加してもらえませんか？」

「は！？」

何を言っているだ！俺がフォーチュンカップに参加しろだと！！。

「さて！もうフォーチュンカップは始まっているだろ！飛び入りで参加なんか出きるわけないだろ！！」

「ええ、アナタの言うとおりです、しかし私はあえて君に参加してほしいのです」

どうして俺、なんかを参加させる？

フォーチュンカップを開催した理由は、シグナーの力を覚醒させるためだろ。俺にシグナーの力がある訳がない。

「どうして俺を参加させたいんだ？」

「君も参加させろとキングの要望です」

なにジャックが？。

「どうしてキングが俺に、アッチはキングで俺はサテライトの決闘者だぜ」

「これは私も詳しくは聞いていません、しかしキングが君も出場をさせろと」

ジャックのやつどういっつもりだ。

アイツは遊星だけにターゲットを絞っていたはずだぞ、どうして俺なんか……いやゴドウィンの事だ嘘を言っている可能性もある俺を参加させてシグナーの力を覚醒させるための道具にすることも考えられるな。

「いいぜ、その誘いに乗ってやるよ」

「ありがとうございます」

「だけど俺は、アンタを信用した訳じゃないぜ」

「わかっています、それでは明日のスペシャルゲストとして参加してください」

明日か原作の話だと準決勝は遊星とボマーにアキとサディストの試合だな。

まあ良い、ここはあえて誘いにのったほうが動きやすいコイツの目的を知ってるからな。

俺は部屋を出た。理由はあまり長く居たくないのもあるが他に銀を探し出す事だもう遠くへ行ったかも知れないけどアイツの目的は遊星に接触して決闘に勝つ事でもあるまだココにいるはずだ。

待っている絶対に見つけだしてやる!!。

銀 Side

クソ！俺の完璧な勝ちデッキが負けちまうなんて!!

コピーカードと禁止カードで埋め尽くした俺のデッキが負けた！今度は何のデッキでいくか。

エクゾディアの三積みデッキで行くか、それともサンダーボルトを中心にしたバーンで埋め尽くしたデッキでいくか……そんな事より先ずは原作主人公の遊星を倒して俺が主役になり俺の圧倒的な力で女性キャラを無理矢理、奴隷して俺のハーレム計画が崩れた。

これもあの俺と同じ転生者の野郎のせいだ！！

「クソ！原作主人公を倒す前に、アイツを倒してやる！！」

そうじゃないと俺の気が収まらね！！

今度こそ俺の禁止デッキで倒してやるぜ！！。

「そこまでだ」

「だ、誰だテメーは！！」

だ、誰だコイツは、この薄気味悪い黒染めの、コートを着た野郎は！！。

??? Side

「おい、何のようだシジイ！」

「お、スマンの実は遊戯王の世界で転生者がマズイ事をしての」

「またかよ!!！」

俺の名前はダーク……天界とは別の世界の地獄の使いだ転生者が面倒なこと、つまり最低限のルールも守らないで自分勝手に振る舞うバカを裁き地獄に送るのが俺の仕事だ。

最近はバカな転生者が増えて俺の仕事が増える一方なんだよな、この前もインフィニット・ストラトスの世界でハーレムを作ろうとして原作キャラを奴隷しようとしたバカを地獄に送ったばかりだつてのに休む暇がないぜ畜生!!。

「で、どの時代だよ」

「うむ5D・sの時代じゃ」

「おいジジイ、その時代なら、アンタが気に入ってる転生者がいたよな確か」

あの時、珍しくジジイの機嫌がすこぶるよくて、あつた時は何があったって俺は驚いたぜ最近の転生者に珍しくハーレムを作る原作主人公を倒して主役になるだの考えず自分勝手に動いたら世界を壊すなんて考えて別世界の平和を考えていたらしいからな。

そして世界の平和は別世界の人間がやる事だと考えて一時は天界で静かに暮らそうって考えていたらしいだがジジイが後押しして転生者になつたって聞いたがな。

「そうじゃな海斗は、どうしてるかの」

「へえ、海斗って言うのかその転生者」

あのジジイが心を許す転生者か……今回の仕事が終わったら機会があれば会いに言ってみるか。

「じゃあ行ってくるぜ、ジジイ」

さて、早いとこ仕事を終わらせにいくか。

ダーク Side OUT

「さて銀 隼人 お前は転生者のルールを破り過ぎたお前を地獄に送るぜ」

「お、俺が何をしたって言うんだよ!!」

ハァー自分勝手に振る舞っていたくせによく言っぜ。

「お前は禁止カードを使い、そしてコピーカードを購入、更に美人の女性と思ったらレイプなどしてる他にも犯罪はたくさんあるが明らかにお前は転生者としてやり過ぎた」

俺はデュエルディスクを着けてそして強制始動をした。

「お、おい、どうなってやがる!?!」

「お前はもう逃げられないぜ……さあお前の罪を数えろ」

さて早いとこ片付けるかコイツのデッキはパワーデッキなのは調べ
てあるがな。

海斗 S i d e

俺は銀を探す為に会場の廊下を歩いているが見つからないやはりも
う会場に出てしまったのか？。

いや、絶対にまだいる筈だ遊星に狙いを定めているならまだ会場の中
に……そう考えていた時に会場の予備に使われる決闘場に人影が
見えた……あ、あれは銀！

やっと見つけたぜ！！

だが銀は誰かと決闘をするつもりらしい誰だあの黒染めコートの男
は雰囲気尋常じゃないのが、よくわかる。

誰だ一体？。

海斗 S i d e O U T

「決闘!!」

ダーク 4000

銀 4000

「俺のターンドロ―!俺はコレでターン終了だ」

ダーク

フィールド

無し

伏せカード↓無し

「デメー!俺を舐めてやがるのか!伏せカードも無しで無防備じゃねーかよ!!」

「うるせえーな早くこいよ」

確かに無防備だ、だけど手札事故には見えない、あの自信は……アイツにはあのカードが手札にあるのか？

だけどアイツに伝えないと。

「そいつのデッキは禁止制限のカードが大量に入ってる気をつけるよー！」

「な、テメーは！なんでココがわかりやがったー！」

そうだ伝えなくちゃ、アイツのデッキは禁止カードが大量だ下手をしたら1ターンキルされる可能性がある。

「ありがとよ、だけど禁止カードを入れる輩に俺は負けないぜ」

あの自信はドコから来るんだ、俺もたまたま銀が手札補助カードを使ってくれたお陰で勝てたようなものだからな。

「ち、俺の力を舐めるなよ！俺は手札から魔法カード、古のルールを発動だぜ、このカード効果で手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚するぜ現れる青眼の白龍ー！！」

レベル 8

青眼の白龍

ATK 3000

社長の嫁がコイツみたいな最悪な転生者が使ってるの知ったら……
社長、あんた青眼の白龍でトリプルバーストストリームだろうな。

「食らいやがれ！青眼の白龍で攻撃だ滅びのバーストストリーム！
」

青眼の白龍の口から白い破壊光線……もとよりバーストストリーム
が放たれた、伏せカードもないダークは当然のように直撃した。

「ぐー！」

ダーク 4000 ↓ 1000

「だとは、どうだ！俺の青眼の白龍の力はよ！！」

お前のじゃないだろ社長だ社長のだろうが。青眼の白龍が可哀想だぜ。

「ふ、俺のフィールドにカードがない時、直接攻撃された時に、このカードが特殊召喚される現れる冥府の使者ゴーズ！」

レベル 7

冥府の使者ゴーズ

ATK 2700

「更にゴーズの効果発動する、この方法で召喚された場合、冥府の使者カイエンが特殊召喚される現れるカイエン！」

レベル 7

冥府の使者カイエン

ATK ?

「な、攻撃力も守備力が決まってない!？」

「お前、ゴーズの効果も知らないのかカイエンの攻撃力は直接攻撃されたとき攻撃力、守備力はその合計の数値なんだよ、よってカイエンの攻撃力と守備力は3000だ!!」

冥府の使者カイエン

ATK ? ↓3000

DEF ? ↓3000

「な、青眼の白龍と同じ!クソ俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ!!」

銀

フィールド

青眼の白龍

伏せカード↓一枚

「（さあ攻撃して来いよ俺の伏せカードはミラフォだぜ）」

あの笑みは、間違いなく攻撃に反応する罠カードだな。

「俺のターンドロ―！さて銀、これがお前のラストターンだケリをつけるぜ」

「やれるもんならやってみやがれよ！！（そうだ伏せカードはミラフォだから平気だぜ！）」

「俺は手札から魔法カード、ハリケーンを発動、これで全ての伏せカードは戻る！」

「くそ！」

物凄い竜巻が当たりに吹きはじめ伏せカードが吹き飛ばされた……
相変わらずスゲーなソリッドビジョンは……演出が。

「更に俺は魔法カード、フォースを発動する、このカードの効果によりお前の青眼の攻撃力は半分になるぜ」

青眼の白龍

ATK 3000 ↓ 1500

青眼がなんか小さくなった、なんか弱々しくなったな青眼、社長が
みたらどんな反応するんだろう……まあ5D'sの世界だから社長
に合わないけどな。

「青眼の攻撃力の半分はゴーズに入るぜ」

冥府の使者ゴーズ

ATK 2700 ↓ 4200

「攻撃力4200!!」

「行くぜ先ずはゴーズで青眼を攻撃」

「があ」

銀 4000 ↓ 1300

「更にカイエンでダイレクトアタック！」

カイエンが銀に止めを刺しにいくがカイエン……お前、本当に天使族？

「ぎゃあああ！俺のデッキが負けるなんて……！」

銀 1300 ↓ - 1700

決闘は決着がついたようだ……さてコイツをささっとつちめてやるぜ……え、なんだコレは！？。

俺の目の前……もとより銀の後ろに突然、ドクロの扉が現れた、その扉はBLEACHに出てくる地獄門にそっくりだった。

「お、おいなんだよこの扉は！」

俺は叫ばれずにいらなかった、そこに黒染めコートの男は……。

「海斗、転生者のお前に自己紹介をしておくぜ俺はダーク、地獄の使いだ……罪を作りすぎた転生者を裁くものとして受け取ってくれ」

転生者を裁くものだって、つまりアイツは裁かれるのか。

「あれは何なんだよダーク!？」

「あれは地獄扉……地獄に送る扉だ、お前、転生者は天界のミスで転生者になり第二の人生を送る事をジジイから聞いたな」

ジジイ……。神様の事が、ああそれは聞いた天界のミスで死なせた人間は転生者なるか天界で静かに暮らすかを。やり過ぎたら何かやるとまではいったが

「ああ聞いた、だけどそれだけだ」

嘘は言っていない。

「ち、ジジイ気に入った転生者には説明が不十分だぜ……なら説明してやる転生者はやっちゃいけない事がある、それは罪を作る事

だ」

罪を作る……確かにこの銀は原作ブレイクなどやり過ぎた面々はあったが地獄にまで送る行為なのか？。

「転生者がこの世界の警察組織で捕まる程度の犯罪なら地獄の使いの俺が動く事はしなないぜ、だがコイツはその範囲を超えた、だから俺が動いた訳だ」

遊戯王の世界……つまりセキュリティでも手に追えない犯罪者だからダークは動いた訳か。

「お前も転生者なら気をつけなコイツみたいに犯罪のレベルを越えた末路は……おっと始まるぜ」

ドクロの扉は開かれ突然、無数の骸骨が銀に向かっていく。

「うわああああ……離せ離せ……！」

逃げる銀だが抵抗虚しく骸骨たちに捕まり銀は扉の奥に引き釣り込まれる。

「言っておくぜ銀 隼人……地獄に落ちた転生者に待っているのは永遠の苦痛だ」

「俺が悪かった、だから助けてくれえええええええええ！」

銀の叫びは虚しく扉に引きずりこまれ扉の中に入り扉は閉まり地獄扉は消えた。

俺は恐怖に怯える銀をそのまま見ている事しか出来なかった。

「さてと、ようやく仕事も終わつたし帰るか」

「おいダーク」

俺はダークを呼び止めた。

「どうした海斗？」

「俺もいつか地獄に行くのか？」

「それはお前、しだいだ」

「ならダーク、俺がこの世界で秩序が乱す存在、世界を崩落する存在とわかったら真っ先に地獄に送ってくれ！！」

海斗の真剣な表情と言動にダークは啞然とした。

「この世界の転生者になった俺が言えた義理じゃないが、俺みたいなイレギュラーが別世界に來ると世界のバランスを崩す事に繋がるだから俺は自分の存在が原因で世界が崩落する事実がわかったら俺を地獄に送ってくれ！！」

これは本当の願いだ俺は自分の力を評価しすぎかも知れないが大抵はイレギュラーな人間がいる事は世界の平穩を崩してしまう、だからその事実がわかったら俺は消えたほうが良い。

「なるほど……ジジイがお前を気に入った訳がわかった気がするぜ、だけどな海斗」

「なんだダーク？」

「はつきり言わして貰うぜ、この世界は既にお前は他人じゃない立派なこの世界の住人だ、だからこの世界でイレギュラーな事件が始まってもお前のせいじゃない、わかってると思うがこの世界はアニメじゃない存在している時点で既にこの世界は地球とは別世界、つまり平行世界なんだよ、お前は既にこの世界の住人だぜ」

そうか……俺は今まで嘘を自分についていたんだなイレギュラーな自分はあまり介入しないで最低限の助けをすればいいと……だけどそれは出来なかった遊星みたいに仲間を助けられずにいらなかった俺は……決めたぜ俺は。

「ダーク、ありがとう吹っ切れたぜ、決めた！俺はこの世界で正直に生きるぜ！」

そうだ自分の心を縛らず助けたいと思ったら助け原作ブレイクなど恐れず助けられるものなら何でもやる俺はそう決めた。

「そうか俺もお前が気に入ったぜ、たまに仕事の合間を見つけてお前に会いに来るぜ、じゃあな」

そう言ってダークは目の前で消えた。ダークの事で心が吹っ切れた

気がする。

「さて戻るか」

俺はフォーチュンカップの対戦を見るためスタジアムの客席に向かう。

客席についた頃に弓女達から遅いと言われ怒られてしまい決闘の結果は原作どりの組み合わせとなった。

さて、ここから俺が介入する、どうなるかは明日の決闘しだいだ。

第十四話　遂に現れる元凶の男に最悪な転生者の末路。（後書き）

海斗「社長の嫁が汚されたな」

ランサー「はい……そうですね」

海斗「お前、本当に歴代キャラの愛用してる物を汚すよな」

ランサー「何でか知らないけど、すいません」

海斗「だけど遅いよ」

ランサー「へ？」

社長「貴様……！我が僕！青眼の白龍を汚すとはいいい度胸だな……！」

ランサー「なんで社長がいるの……！」

海斗「手紙があるから読むぜ、歴代キャラの大切な僕を汚す行為を繰り返す作者に鉄槌を下せ……ダークより……だとよ」

ランサー「ええええええ!!」

社長「現れる!青眼の白龍!!」

社長の後ろに青目の白龍が三体……しかもめっさ怒っていた。

ブルーアイズその1『よくも俺達を海馬様以外にあんなクズやろうに使わせやがったな(と鳴き声で言ってる)』

ブルーアイズその2『海馬様!コイツの処刑の許可を!!(と言っている)』

ブルーアイズその3『処刑だ処刑だあ!(以下略)』

社長「貴様達もそう思つかやれ俺が許す!(何故か通じる)」

ランサー「助けて海斗!俺、死ぬって!!(涙)」

第十五話、特別ゲストに試練の二連戦、前編（前書き）

海斗の新デッキです。

そしてオリジナル要素を

第十五話　特別ゲストに試練の二連戦、前編

フォーチュンカップ二日目、遂に始まる原作介入、俺がフォーチュンカップで特別ゲスト、として参加する事によりココから原作どうりに動かないかも知れないが…… けどやるしかない俺はもう後に引かないって決めたんだ。

「大丈夫なのか海斗？」

「ああ遊星、大丈夫だ」

控え室で俺に声をかけてくれる遊星。

「しかし、ゴドウインの誘いに乗るきか、絶対に何かを企んでいる筈だ」

「遊星、確かに俺はゴドウインが何を考えて俺を推薦したかは知らないゴドウインがジャックの推薦で俺を参加させたのも嘘かも知れない、だけど俺は逃げないと決めたんだ俺が何をすべきか、この大会で見つける為に」

そつだゴドウィンがシグナーの覚醒を目的とわかっているが……だけれど俺が介入した事により原作、いや本来ある歴史から大きく外れた筈だ、だから俺は大会に出て自分の役割を探すため大会に出場するんだ。

「だから遊星、お前と当たっても俺は容赦しないぜ」

「ああ、もし戦う事になったら全力で戦おう」

俺達は握手をしてそう誓った。

さてそろそろ試合が始まる頃だ、いよいよだな。

『いよいよ大会二日目！泣いても笑っても今日の決闘でキングの挑戦者が決定する！準決勝と、言いたい所だが、スペシャルゲストを紹介するぞお！あのキングが推薦した決闘者が出場する！！』

MCのアナウンスに会場が騒ぎだした、そうキングに推薦された決

闘者が大会に出場する、それを聞いただけでも誰が出場するかと観客はワクワクして騒ぎ出していた。

『さて今日のスペシャルゲスト！あのキングのまさかの推薦！その決闘者を紹介だ！！』

スタンディング決闘場から一人の男が現れた……そう海斗であった。

『サテライトの希望の兵士！真田 海斗おおおお！！』

希望の兵士か……まあ、兵士なのも会ってるか俺のデッキは基本は兵器のカテゴリーだから……しかし希望の兵士か古代の機械を使うから絶望の間違った気がするの俺だけか？。

しかし俺の登場で歓声からブーイングの嵐だった。

「サテライト野郎が大会に出てくるじゃねえ！！」

「そつだそつだ！キングの推薦も嘘に決まってるんだろ！！」

「大会を汚しに来るな！出ていきやがれ！！」

凄いブーイングだな、まあサテライト住民は基本、シティの奴等に嫌われてるから仕方ないか。

『皆さんお静かに確かに行きなり彼が選ばれて不満に思う方もいらっしゃるでしょうが、しかし彼は真にキングに選ばれた決闘者です』

ゴドウインの言葉に会場の観客は静かになった。

流石に治安維持局に逆らうバカはいないようだ。

『先ず、他の出場者と平等にするため彼には私が用意した決闘者、二人と戦ってもらいます』

ゴドウインが言い終わるとスタンディング決闘場、から二人の決闘者が現れた、だが俺のその決闘者は俺の知っている人物だった。

『先ず、最初の一人は！名誉挽回に近いこのフォーチュンカップに参加した！元セキュリティ、チエイサーズ隊員！！金山 かねやま 官！！』

そうあのセキュリティの金齒だ……まさかコイツを参加させるなんてゴドウイン、やってくれるな。

『そして二人目は！セキュリティの期待の新人女性Dホーラー！！
ミリア・アリート！！』

そして再戦を誓った決闘者の一人のミリアであった。

「おいサテライトのクズ！俺は貴様に復讐を誓いに戻ってきたぞ！
覚悟しろ！！」

口調がいつもの傲慢の口調じゃない荒々しい……しかもあの目、そうとう俺に恨みがあるらしいな。

『先ずは最初の一戦はスタンディング決闘！サテライトの希望の兵士、真田 海斗 対 名誉挽回を狙う元セキュリティ、チエイサーズ隊員、金山 官との対戦だ！』

会場が盛り上がる、しかも俺の味方は殆どゼロだ、まあ良いかブーイングは俺に関係ない、ただ今は俺はコイツと戦って勝つ事だ。

「「決闘！！」」

海斗 4000

金山 4000

「まずは俺から行くぜドロー！」

さて俺のサブデッキを使うか、金山に悪いが俺は自分で作ったデッキで戦う。

今まで俺はあのデッキで戦ってた俺は自分の力を試せない、あのデッキは他人から譲り受けたデッキだからな。この試合に向けて試しに使ってみるか。

「俺はモンスターをセットしてカードを一枚伏せてターンエンドだ」

海斗

フィールド

セットモンスター

伏せカード↓一枚

「俺のターンドロー！サテライトのクス野郎！見せてやるぜ俺の新しい新デッキを俺の復讐心が宿った俺のデッキの力をな！！」

やっぱり覇気が今までと違うコイツ。

「俺は魔法カード古のルールを発動するぜ、このカードの効果により俺はデーモンの召喚を特殊召喚するぜ！」

レベル6

デーモンの召喚

ATK 2500

「デーモンの召喚をリリースして俺は偉大魔獣 ガーゼットをアドバンス召喚！」

レベル6

偉大魔獣 ガーゼット

ATK 0

「コイツの効果はアドバンス召喚したモンスターの元々の攻撃力の倍アップするぜ、デーモンの召喚の攻撃力は2500！よってガーゼットの攻撃力は5000だ！」

偉大 魔獣 ガーゼット

ATK 0 ↓ 5000

「そして俺は魔法カード二重召喚を発動してもう一度通常召喚を行うぜ俺はゴブリンエリート部隊を召喚！」

レベル4

ゴブリンエリート部隊

ATK 2200

「更に俺は魔法カード死者蘇生を発動して墓地に存在するデーモンの召喚を墓地から特殊召喚だ現れる！デーモンの召喚！」

レベル6

デーモンの召喚

ATK 2500

「な、何と！金山 官！たった1ターンで攻撃力2000以上のモンスターを三体も揃えたぞ！まさにその光景は復讐に燃え悪魔と契約した決闘者そのものだ！！」

確かに手札を全て失って揃えたコイツの戦術、以前のあいつなら考えられない戦術だな。

以前のアイツなら保険を考えて安全な決闘をしていたはずだ。

「サテライトのクズ、俺はお前に負けてからセキュリティではスランプが続いて俺の立場は下がる一方だった、そして止めはチェイサーズを解任された事だ！……それから俺はわかった以前のようにはトックス出身というプライドが俺の決闘の邪魔をしていた事に、そして俺は誓ったトックスの地位を捨て俺はお前に復讐してこの決闘に勝って俺は以前の地位を登り詰めパワー悪魔族デッキで頂点にたつことにな！」

俺に指を指してそう宣言する確かに以前のような誇りは無くなった今のアイツにあるのは俺に対する復讐だけだ。

「行くぜ！俺はデーモンの召喚で攻撃するぜ魔下雷！！」

デーモンの召喚の雷が俺のセットモンスターに落ちる。

「残念だが俺の守備モンスターはシールドウィングだシールドウィングは二回まで戦闘では破壊されない」

レベル2

シールドウィング

DEF 900

「なに！デッキを変えたのか！！」

金山は驚いているようだ。

「仕方ない俺はゴブリンエリート部隊でシールドウィングを攻撃だ！！」

ゴブリン達が一斉にシールドウィングに襲いかかってきた。

「俺は罠カード発動攻撃の無力化！このカード効果によりモンスター、一体の攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する」

「ち、なら俺はコレでターンエンドだ!」

金山

フィールド

偉大 魔獣 ガーゼット

デーモンの召喚

ゴブリンエリート部隊

伏せカード↓無し

「俺のターンドロー!」

手札が悪い、今の俺にゴブリンすら倒せないココは守るしかない。

「俺はモンスターをセットして更にカードを一枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

セットモンスター

シールドウイング

伏せカード↓一枚

「せいぜい壁モンスターを増やしてな俺のターンドロ―！俺は命削りの宝札を発動してカードを五枚になるようにドロ―する！」

ここで引いたのか強力な手札補充カードを。

「俺はゴブリンエリート部隊をリリースして現れな冥界の魔王 ハ・デス」

レベル6

冥界の魔王 ハ・デス

ATK 2450

「更に俺は二枚目の二重召喚を発動するぜ俺はデーモン・ソルジャ

ーを召喚」

デーモン・ソルジャー

レベル4

ATK 1900

「そして俺は装備魔法、デーモンの斧をデーモン・ソルジャーに装備だ！」

デーモン・ソルジャー

ATK 1900↓2900

「更に俺は魔法カード、ブラックコアを発動してお前のシールドウィングを除外するぜ消えな！」

シールドウィングは黒い球体に飲み込まれ消えた、やっぱり消されたかシールドウィング。

「行くぜ、デーモン・ソルジャーでセットモンスターを攻撃だ！」

デーモンの斧を力、いっばいに上げて俺のセットモンスターに向かってくる。

そして俺のセットモンスターはザ・カリキュレーターだった。

レベル2

ザ・カリキュレーター

DEF 0

「は、やられ専門のザコかよ！」

何度でも言いやがれ、コレが俺のモンスターの切り札になるんだからな。

「行けえー！俺の悪魔族軍団！サテライトのクズに一斉攻撃しろ！」

残りの悪魔族達が俺に向かってくる。

「この瞬間、俺は手札のバトルフェーダーを特殊召喚する、このカードが手札から特殊召喚した時、相手のバトルフェイズを強制的に終了させる！」

レベル1

バトルフェーダー

DEF 0

「ち、俺はコレでターンエンドだ！」

金山

フィールド

偉大魔獣ガーゼット

デーモンの召喚

冥界の魔王　ハ・デス

デーモン・ソルジャー、装備↓デーモンの斧。

伏せカード↓無し

『金山　官のパワー悪魔デッキに防戦一方のゲスト決闘者、真田海斗！彼に逆転はあるのか！？それとも官のパワーの前に潰されてしまうのか！！』

今の俺の手札に逆転のカードは無い、あのカードさえ引ければ俺に逆転は出来る。カードよ俺に答えてくれ！。

ジャック　Side

どうした何故！いつものマシンナーズと古代の機械のデッキを使わ

ない！

アイツのデッキならあんなモンスターともなら簡単に一層出来るはずだ、何故使わない海斗！！

俺をハリボテキングと言った貴様がココで負ける事はこのジャック・アトラスが許さん！貴様は遊星と同じく俺が貴様を叩き潰す。

そんなザコなど早く蹴散らせ！！。

ジャック Side OUT

俺のドローでこの決闘の勝敗が決まる、行くぜ！

「ドロー！！」

このカードは！。

「俺は手札から、魔法カード、手札抹殺を発動する、互いのプレイヤーは自分の手札を全て墓地に送って墓地に送ったカード分デッキからカードをドローする、俺は三枚ドロー！」

来たぜこの場を逆転するカードが！

「金山、お前は以前と比べたら決闘者らしくなった、だが復讐に燃えなければ楽しい決闘が出来たけどな」

「うるさい！俺はもうこの決闘に勝ってお前の復讐だけすめば良いんだよ！セキユリティの地位回復なんざ俺には二の次だ！！」

そつだ理由はどうであれ、相手を見下さず全力で向かうお前の決闘に俺も心から燃えるぜ！！。

「行くぞコレが今、俺が出きる全力だ俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

レベル3

ジャンク・シンクロン

ATK 1300

「ジャンク・シンクロンの効果、発動だ、このカードは墓地に眠るレベル2以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する俺はぜ・

カリキュレーターを特殊召喚するぜ」

レベル2

ザ・カリキュレーター

DEF 0

「更に俺は天よりの宝札を発動して互いのプレイヤーはカードが六枚になるようにドロ―する俺は四枚、手札に加える」

「俺も四枚加えるぜ」

これで手札補充は終わったぜ。

「手札から魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動するぜ手札からモンスターを一体墓地に送ってレベル1モンスターを特殊召喚する！」

「今更、レベル1モンスターを召喚して何になるんだよ！」

「それを今、見せてやるぜ俺はデッキから、ものマネ幻想師を召喚するぜ！」

レベル1

ものマネ幻想師

ATK 0

「このカードの効果は相手モンスターの元々の攻撃力分、アップするぜ俺はデーモンの召喚の攻撃力をコピーするぜ」

レベル1

ものマネ幻想師

ATK 0 ↓ 2500

ものマネ幻想師の鏡にデーモンの召喚が写し出された。

「行くぜコレが俺の逆転のジョーカーだ！俺はレベル2ザ・カリキユレーターにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 3 = 5

「集いし仲間の思いを拳に宿し強大な敵を粉碎せよ！シンクロ召喚

「仲間の絆、ジャンク・ウォリアー！」

レベル5

ジャンク・ウォリアー

ATK 2300

「更に俺は永続罫、エンジェル・リフトを発動、このカードは自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスターを墓地から特殊召喚できる復活しろザ・カリキュレーター！！」

レベル2

ザ・カリキュレーター

ATK 0

「さてコレで俺の逆転の切り札は全部、揃ったぜ」

「攻撃力2300のモンスターで何が出来るとだよ！」

「先ずはザ・カリキュレーターの効果を発動だ、このカードは自分フィールドに存在するモンスターのレベル一つにつき攻撃力が300倍になるんだ!」

1 + 1 + 2 + 5 = 9

|| 2700

ザ・カリキュレーター

ATK 0 ↓ 2700

「それでも俺のパワー悪魔モンスター軍団にはかなわないぜ!」

「いやコレで逆転するんだよ、ジャンク・ウォリアーの効果発動、このカードは自分フィールドにいるレベル2以下のモンスターの攻撃力分、アップするぜ! パワーオブ・フェローズ!!」

ジャンク・ウォリアー

ATK 2300 ↓ 7500

「な、攻撃力7500!!」

どうだ単体は弱いカード達かも知れないが、カード達の絆を会わせればどんな強大な敵にも叶うんだ!!。

「行くぜ更に俺は手札から速攻魔法、禁じられた聖杯を発動してガーゼットの攻撃力を400上げて効果を無効する!!」

偉大 魔獣 ガーゼット

ATK 5000↓400

ガーゼットが弱々しく縮んでいく。

「俺のガーゼットが!!」

「行くぜ金山!これで最後だ!ジャンク・ウォリアーで偉大 魔獣 ガーゼットを攻撃!スクラップ・フィスト!!」

ジャンク・ウォリアーは背中ของブースターを稼働させてガーゼットに突っ込んでガーゼットに拳を命中させた。

「ぐわあああああ!!」

金山 4000 ↓ - 3500

『き、決まったああああ！！真田 海斗 最初はパワーに押されながらも最後は見事なコンボで大逆転だ！！』

MCの勝利宣言をかけてくれたが一部の客からブーイングが突然始まった、それは金山に向けてのものだった。

「デケー口叩いてながら何、負けてんだよ！！」

「それでもセキュリティの一員なのかよ！！」

「サテライト野郎に負けるくらいならセキュリティなんてやめちまえよ！！」

最初こそ金山を応援していた観客達、俺に負けて手のひらを返すように金山の暴言を吐いていた。

『え、あの……コレは……』

MCもまさか決闘が終わってこのような展開になるとは思っておら

ず、おどおどしていた。

「お前達それ以上！コイツを侮辱するな！！金山は立派に最後まで戦った！決闘をしてないお前達が金山に暴言を吐く権利は一切ないんだよ！！」

俺の怒気に観客は静まり帰ってしまった。

「気に入らないならココで俺が決闘してやるよ、文句があるなら俺が決闘してやるからかって来いよ！！」

この提案に乗る決闘者は誰もいなく海斗は更なる苛立ちを覚えた。

「暴言を吐く事しか出来ない最低な臆病者が、金山に暴言を吐いてんじゃないねえ！！暴言を吐くならせめてここまで来て決闘してから言いやがれコラアアア！！！！」

普段の彼を知るものならビックリするだろう、実際にここまで怒る姿に観客席にいる弓女達はビックリしていた。

「か、海斗って怒るとあんなに怖いんだ」

「アイツの怒りここまで響くな」

「当然だよ！海斗が怒って当たり前だよ！！」

彼の怒気に龍可、氷室は驚き龍亞は当然っと言った感じに納得していた。

「海斗……なんか可哀想」

『やはりお嬢もそう感じますか』

『確かにね海斗、怒ってるけど悲しそうな目をしてるわ』

弓女と弓女の精霊であるワイルドマンとバーストレディは海斗の気持ちに気づきそう呟く。

（だって、あんなに楽しそうに決闘してたのに、これじゃあ悲しくなっちゃうよ）

弓女は海斗の気持ちを察してそう考える。

海斗の怒気に観客は黙っているばかりで海斗は更に怒りを表す。

「どうした言い返せないのかよ！！言い返してみろ」「やめろ！！」
金山……」

海斗が観客に対して怒りを暴言を吐こうとした時に金山が止める。

「俺は負けたんだ…… 負けた俺が客から暴言を吐かれるのも当然だ」

「何を言っでやがる！理由はどうであれお前は俺をクズ呼ばわりしても全力で向かってきた、暑く燃える決闘をしたお前が暴言を吐かれる理由になつてない！」

そうだ確かに認められる理由じゃない、だけど全力全開で向かってきた金山の決闘は燃えたんだ。

それを観客は……………。

「良いんだよ海斗」

「あれ…………… お前」

初めて俺の名前を……………。

「よくよく考えれば俺はセキュリティにいた時から親父の威厳を借りて威張ってセキュリティの地位を上げて自分で何もしないで甘えてばかりの最低な坊っちゃんだった、俺の扱いはコレが当然だ」

そう言い残し金山……………いや官はその場を後にした。

「海斗、お前の決闘で俺は学んだぜ決闘は身分は関係なく全力で挑めば楽しいってな……………ありがと気づかせてくれてよ」

「ああ官！今度も全力全開な決闘をしようぜ！！」

俺はそれを伝えた……………次も楽しい決闘をするために！

第十六話、特別ゲストに試練の二連戦、後編。(前書き)

久々のライティング決闘ですゲーム版のSpも登場です。

第十六話　特別ゲストに試練の二連戦、後編。

金山との決闘が終わり次はいよいよライティング決闘に行こうされた。

『さて次はいよいよライティング決闘だ試練の決闘も次で最後！その二人目の刺客の紹介だ！セキュリティの期待の新人Dホイーラ、ミリア・アリート！！』

サーキットから現れたセキュリティチェイサーズ専用のDホイールが現れた。

ミリアが現れた途端に会場は歓声があがった。

『そして忘れてはいけない！このフォーチュンカップでただ一人のゲスト決闘者！サテライトの希望の兵士！真田　海斗！！』

海斗もサーキットからDホイールで表れスタートのコースに着いてミリアの隣に現れる。

「海斗さん、このように再戦が出来て私、嬉しいです！」

「ああ、俺もお前となら楽しいライティング決闘が出来そうだ」

二人は再戦の約束が果たせて嬉しそうに呟く。

『それでは決闘モードセットオン！！』

MCの合図で俺達のDホイールにオートパイロットが発動して周りはスピードワールドに支配された。

『それではライティング決闘！アクセラレーション！！』

俺達は互いのDホイール発進させてライティング決闘が始まった。

「「決闘！！」」

海斗 4000

ミリア 4000

「先ずは私の先行ドロ―！私はガード・オブ・フレムベルを守備表示で召喚します！」

レベル1

ガード・オブ・フレムベル

DEF 2000

「カードを二枚セットしてターンエンドです」

ミリア

フィールド

ガード・オブ・フレムベル

伏せカード↓二枚

SPC ↓ 1

「俺のターンドロ―！」

海斗 S P C ↓ 1

ミリア S P C ↓ 1

「俺はS p ーオーバー・ブーストを発動！このカード効果により俺はS P Cを4増やせる、だがエンドフェイズにS P Cは1になる」

海斗 S P C ↓ 1 ↓ 4

「更にS p ーサモン・スピードを発動して俺は手札からトロイホースを特殊召喚」

レベル 4

トロイホース

A T K 1 6 0 0

「トロイホースをリリースして古代の機械巨竜をアドバンス召喚！」

レベル 8

古代の機械巨竜

ATK 3000

「い、いきなりエースモンスター！」

「行くぜ俺は古代の機械巨竜でガード・オブ・フレムベルに攻撃、ギアクラッシュ・ダイブ！」

古代の機械竜がガード・オブ・フレムベルに突進して押し潰した。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

古代の機械巨竜

伏せカード↓一枚

S P C ↓ 4

「このエンドフェイスに俺の S P C は 1 になる」

海斗 S P C ↓ 4 ↓ 1

「私のターンドロー！」

海斗 S P C ↓ 2

ミリア S P C ↓ 2

「私は永続罨、エンジェルリフトを発動して墓地に眠るガード・オブ・フレムベルを特殊召喚します！」

レベル 1

ガード・オブ・フレムベル

DEF 2000

「更に私は神竜 ラグナロクを召喚します」

レベル 4

神竜 ラグナロク

ATK 1500

「私はレベル4神竜ラグナロクにレベル1ガード・オブ・フレムベルをチューニング！」

4 + 1 = 5

「偽善の光を破壊する最強の闇の破壊者よここに降臨せよ！シンク口召喚！A・O・J カタストル！」

レベル 5

A・O・J カタストル

ATK 2200

「私はA・O・Jカタストルで古代の機械巨竜を攻撃します」

観客は何故、攻撃力が低いカタストルで攻撃するのか疑問に思っていたがコレで俺の巨竜はやられた。

「カタストルの効果を発動します！カタストルは闇属性以外のモンスターと戦闘する場合、ダメージ計算を行わずに破壊する事が出来ます！」

そうなんだよ俺のモンスターは地属性で構築されてるデツキだからカタストルの餌食にされてしまう。

「ぐ！」

俺の古代の機械巨竜はカタストルに攻撃され塵となった。

「私はコレでターンエンドです」

ミリア

フィールド

A・O・Jカタストル

伏せカード↓一枚

S P C ↓ 2

「俺のターン！」

海斗 S P C ↓ 3

ミリア S P C ↓ 3

「俺はS p エンジェル・バトンを発動！カードを二枚ドロ―して一枚を墓地に送る、俺はレッド・ガジェットを召喚」

レベル 4

レッド・ガジェット

A T K 1 3 0 0

「レッド・ガジエットの効果でデッキからイエロー・ガジエットを手札に加える、更に俺は手札のイエロー・ガジエットとマシンナーズ・フォートレスを墓地に送ってマシンナーズ・フォートレスを墓地から特殊召喚する！」

レベル7

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500

「マシンナーズ・フォートレスで俺はカタストルを攻撃する」

「私はこの瞬間に罠カード発動、攻撃の無力化このカード効果によりモンスターの攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させます」

「なら俺はターンエンド」

海斗

フィールド

レッド・ガジエット

マシナーズ・フォートレス

伏せカード↓一枚

S P C ↓ 3

「私のターンドロー」

海斗 S P C ↓ 4

ミリア S P C ↓ 4

「私はサファイア・ドラゴンを召喚します」

レベル 4

サファイア・ドラゴン

A T K 1 9 0 0

「バトル！サファイア・ドラゴンでレッド・ガジェットを攻撃しま

す！」

「ぐ！」

海斗 4000 ↓ 3400

レッド・ガジェットは塵となって消えた。

「更に私はカタストルでマシンナース・フォートレスを攻撃します！」

「この瞬間に罠カード発動！くず鉄のかかし、このカードは相手モンスターへの攻撃を一度だけ無効に出来、再びセットされる。」

かかしが表れカタストルの進行を阻止した。

「私はカードを一枚セットしてターンエンドです」

ミリア

フィールド

A・O・Jカタストル

サファイア・ドラゴン

伏せカード↓一枚

SPC↓4

「俺のターンドロー！」

海斗 SPC↓5

ミリア SPC↓5

さてどうするかなミリアのフィールドにはカタストルがいるアイツを残して置いたら俺がいくらモンスターを召喚しても絶対にやられる、早めに潰したい所だが、ミリアの伏せカードが気になるココはマシンナースで追撃するべきかな、いやココは……失敗した時は痛手になるがやりますか!!。

「俺はスピーエンジェル・バトンを発動するカードを二枚ドロし

て一枚墓地に送る、そして更にS p 二重召喚を発動して通常召喚を二回行える」

ゲーム版のS pをこの世界で使える事は俺は嬉しいぜ。

「俺はグリーン・ガジェットを召喚する」

レベル4

グリーン・ガジェット

ATK 1400

「グリーン・ガジェットの効果でレッド・ガジェットを手札に加える、更に俺はグリーン・ガジェットとマシンナーズ・フォートレスをリリースして古代の機械巨人をアドバンス召喚！」

レベル8

古代の機械巨人

ATK 3000

『な、なんと！歴戦の決闘者でも、なかなか見ることが出来ない伝説のレアカード古代の機械巨人が召喚された！我々は伝説を見ているぞー！』

観客もザワザワと騒ぎだした、だからさ驚くことなのかな古代の機械巨人。

確かにこの世界ならかなりのレアカードだけども。

「行くぞ古代の機械巨人でカタストルを攻撃！アルティメット・パウンドー！」

「きゃあー！」

ミリア 4000 ↓ 3200

「カードを一枚セットしてターンエンド」

海斗

フィールド

古代の機械巨人

伏せカード↓二枚

S P C ↓ 5

「私のターンドロー！」

海斗 S P C ↓ 6

ミリア S P C ↓ 6

「私はS p ーエンジェル・バトンを発動、カードを二枚ドローして一枚を墓地に送り、更にS p ーシフト・ダウンを発動してS P Cを6減らして二枚をドロー！」

ミリア S P C ↓ 6 ↓ 0

いきなりドロー補充カードを二枚使った不味いな。

「いきますよ！海斗さん私はレベル4、レベル4、レベル3を墓地

に送ってモンタージュ・ドラゴンを特殊召喚です!!」

レベル8

モンタージュ・ドラゴン

ATK ????

「モンタージュ・ドラゴンの効果発動です!モンタージュ・ドラゴンは墓地に送ったモンスターのレベル1につき300ポイントアップします、墓地に送ったモンスターの合計レベルは11よって攻撃力は3300です!」

モンタージュ・ドラゴン

ATK ????
↓3300

「更に罠カード発動、砂塵の大竜巻で海斗さんの伏せカードを破壊します!」

竜巻が俺のくす鉄のかかしを破壊した、まあくす鉄のかかしは基本は存在がわかれば直ぐに除去するからな。

「これで海斗さんの防ぐ手だてはありません！モンスタージュ・ドラゴンで古代の機械巨人を攻撃！パワー・カラージュ！！」

「ぐわああ！！」

海斗 3400 ↓ 3100

「サファイアドラゴンで海斗さんにダイレクトアタックです！」

「俺は永続罫、リビングデッドの呼び声を発動して俺は古代の機械巨竜を特殊召喚する、現れる古代の機械巨竜！！」

レベル 8

古代の機械巨竜

ATK 3000

「私は攻撃を中断してターンエンドです」

ミリア

フィールド

モンスター・ジュ・ドラゴン

サファイアドラゴン

伏せカード↓無し

『両者の全くの互角の攻防に目が離せない両者のエースは既に出ている、しかし海斗のほう若干不利だどうなるのか!!』

確かに俺のドローで決着はつかないまでも戦局がこのドローで変わる、カードよ俺を導いてくれ。

「俺のターン！」

海斗 S P C ↓ 7

ミリア S P C ↓ 1

このカードは来た！俺の勝利のカードが。

「ミリア！」

「はい！」

「この決闘、楽しいぜ！」

「はい私もです！」

「だけどこの決闘、俺の勝ちだ！俺はレッド・ガジェットを召喚！」

レベル 4

レッド・ガジェット

A T K 1 2 0 0

「レッド・ガジェットの効果でイエロー・ガジェットを手札に加えて更に俺はS p リミッター解除を発動するぜ！」

コレが俺の勝利のカードだ！。

「このカードは自分のSPCを6減らす事で発動する事が出来る、このカードは自分のフィールドにいる機械族の攻撃力を倍に出来る！」

海斗 S P C ↓ 1

古代の機械巨竜

ATK 3000 ↓ 6000

レッド・ガジェット

ATK 1200 ↓ 2400

「な！」

「俺は古代の機械巨竜でモンタージュ・ドラゴンを攻撃だギアクラ
ツシュ・ダイブ！」

「ぐ！」

ミリア 3200 ↓ 500

「更にレッド・ガジェットでサファイアドラゴンを攻撃だ」

「きゃあああ！！」

ミリア 500 ↓ 0

勝者 海斗

「決まった！互角の攻防戦に楔を打ち込んで勝利を決めたのは真田
海斗だ！」

観客は互角の攻防を繰り広げた両者に歓声を上げたのであった。

「楽しかったぜミリア」

「はい私も楽しかったです、ですが次は負けませんよ！」

ミリア手をグツと握りしめ海斗にそう伝える。

「ああ、楽しいみ待ってるぜ今度もな！」

「はい！」

俺とミリアは互いに握手して次にまた決闘をしようと約束した……。

弓女 Side

「……………。(ooooooooooooooooooooo)」

何だろうあの牛乳女が海斗の手を握ったら弓女さんの体から黒いものが体中から出てくるよ!!」

「ゆ、弓女姉ちゃんどうしたの!?!」

「お、おい嬢ちゃんどうした」

「龍亞君……………どうしたのかな、かな?(黒)」

「な、何でもありません!」

どうしたの弓女さん普通だよ……………何で怖がるの……………なんでなんでなんでなんでなんで?

「よし弓女さん決めた!」

「何を決めたの?」

「決まってるじゃない龍可ちゃん、海斗に近づく牛乳を殺っちゃうの」

「ダメよ！」

「絶対にやらないでよ弓女姉ちゃん!!」

大丈夫だよ龍可ちゃん龍亞君、弓女さん証拠のこさないもん♪。

弓女 Side OUT

ミリアSide

ゾクっ!!

な、何ですか!?!この寒気は!?!?

「どうしたミリア、顔色がわるいぞ」

「な、何でもありません海斗さん!!」

うう海斗さんに握手してもらってドキドキしてたはずなのに何でい

きなり寒気がミリア何か悪い事でもしたんでしょうか！！

「とりあえず医務室にいくか俺が同行するよ」

「あ、ありがとうございます／＼」

わふ、寒気の正体はわかりませんが……ミリアは幸せです海斗さんが私の手を握ってくれてミリア！最高に幸せです！！。

これで少しはミリアも一歩リードです、これで弓女さんに少しは追いついたはずですよ！！。

ミリア Side OUT

お気に入り登録数100件記念、偽ジャック表れる。（前書き）

ヒートソウルさんの偽ジャックが登場しますヒートソウルさんの許可はもらっています。

やっぱりゲスト出演は難しかったです書くたびにゲストのセリフは間違っていないか間違っていないか乗せて良いのかと思って書きました。

それではどうぞー!!。

話の流れは遊星がパラドックスを倒した次の日のあたりです。

お気に入り登録数100件記念、偽ジャック表れる。

遊星がパラドックスとの戦いを終えて一日がたった時であった。

俺達は遊星が世界を救ってくれた事を感謝して平和な日常を過ごしていたが突然、平穩が崩れ始めた。

「やっぱり遊星は凄えよなどうだったんだよ！歴代の決闘者王は！」

「全く貴様は羨ましい限りだな」

今、俺は遊星、ジャック、クロウと歩いてパラドックスと戦い歴代主人公と協力して戦った話で持ちきりであった時に事件が起きた。

「遊星！大変だー！」

龍亞と龍可が走り出して俺達の所に走ってくる。

「あ、ジャックー！」

「どうした龍亞、それに龍可も」

「ジャックがアンティールで決闘して相手のカードを奪ってるの

よ！」

「なに!!！」

「おいおいジャックなら今日は俺達と一緒に行動してたぜ!!！」

クロウは当然のように龍亞と龍可にそう言う、そしてジャックも驚いている様子であった確かに今日は俺達四人は一緒に行動していたじゃあ一体誰が？。

「それで禁止カードも使ってるの」

「なんだと!!！」

禁止カードをマジかよ、禁止カードを使うなんて俺がコレまで戦った最低な奴等を思い出すな。

ジャックなんか手を強く握りしめ、かなり怒っていた……………まあ無理もないなジャックは以前に偽物事件で痛い思いをしているからな。

「俺を語るだけでは飽き足らず禁止カードまで使うとは、このジャック・アトラスは偽物を絶対に許さん!!！」

「とりあえず龍亞、龍可、偽物の場所を教えてくれないか」

「うん、このまま進んだ広場にいるよアキ姉ちゃんと弓女姉ちゃんとミリア姉ちゃんもいるから速くきて！」

遊星は龍亞と龍可に偽物の場所を聞いた。それにアキに弓女とミリアまでいるのか。

「偽物野郎を倒しに行くぜ！！」

「当たり前だ、この俺を語る輩に制裁を与えるのは当然だ！！」

「そうだな行くぞ！！」

クロウとジャックは意気込み俺もそれに賛成して俺達は龍亞と龍可の案内で偽物の所へ向かった。

広場に向かうと……………。

「俺はレッドデーモンズでダイレクトアタック！アブソリュート・パワーフォース！！」

「きゃあああ!!」

弓女 1000 ↓ - 2000

弓女が決闘していたが俺達の所に吹き飛ばされて俺は弓女の所へいく。

「おい大丈夫か弓女!!」

「海斗………弓女さん負けちゃった」

「酷い傷だ安静にしてろ!それよりコレは一体!?!」

俺達が当たりを見渡すと、そこに弓女と同じようにアキとミリアも倒れており他にも数々の決闘者が倒れていた。

「ようやくご登場か」

「貴様！この俺を語るとは良い度胸だな！！」

「それはコツチのセリフだ！貴様のおかげで俺の野望は果たせないで終わったんだからな！！」

「どういう事だ？」

ジャックは疑問に思ってしまった、あの偽物はジャックに恨みでもあるようだがジャックは偽物に面識がないらしい。

「しらばつくれんなよ！俺が十代を倒して俺の野望が果たせそうになった時に現れて邪魔をしゃがって！！」

「ふざけるな俺は貴様と面識などない！！」

ジャックは当然のように否定するが偽物は憎しみがこもった目でジャックを睨む、そんな時に……………。

「それは簡単だ、そいつは平行世界のジャックに倒されたんだからな」

そこにダークが現れた、しかしダークの隣にいるのは十代！？。

「十代さん！どうしてこの時代に！？」

「いや遊星、コイツは平行世界の十代だお前が知っている十代とは違う」

ダークは遊星の知っている十代と違う事を指摘した確かに俺が知っている十代と比べて冷静な雰囲気漂っている。

「それよりも平行世界の俺とは、どういう事だ説明しろ！」

「そつだ話に着いていけないぜ」

ジャックとクロウはダークに説明を求めた、ダークは俺達に説明した、あの偽物ジャックは平行世界での十代に惨敗して再戦を禁止カードを使い勝利したが平行世界から現れたジャックにより倒され、その残り火の魂がこの世界に流れてしまい偽物は流れついてしまったのだ。

「それで平行世界の十代にアイツの情報を聞いて俺は十代と一緒に

「この世界に来た訳だ」

「……………すまない」

『十代は悪くないよ』

『クリッ！』

『そつだ十代は悪くないぜ！』

『はいそつです』

そこに精霊が現れユベルにハネクリボーはわかるとしてターボ・シンクロンにエフェクトヴェラー！！。

「それでお前は、この世界で、どうするつもりだ？」

「決まっている！前の世界で果たせなかった野望を果たすだけだ！」

『ハーレムだよね』

『クリッ』

『ハーレムだけだな』

『ハーレムですよね』

「……………ハーレムだな」

十代達の言葉に俺は偽物を見て呆れたハーレムを作る……………この偽ジャックも最悪な転生者なのかよ。

「そんな事より偽物の制裁はこの俺がやる！」

「上等だ！コッチは貴様に恨みもあるからな！！」

二人が激突する瞬間に俺がジャック（本物）を止める。

「何んだ！海斗！？」

「ジャック、すまないが俺にやらせてくれ！」

「海斗！偽物の制裁はこの俺がやると」

「頼むジャック！仲間の魂のデッキを汚し、弓女、ミリア、アキと仲間を傷つけたアイツを俺は許さないんだ！！」

ジャックお前が倒したいだろうが本当に頼む弓女達を傷つけたアイツを俺は許せないんだ！！

「そこまで言うなら貴様に譲ってやる」

「すまないジャック」

「だが偽物なんかには負けたら許さんからな」

ジャックありがとう、これで条件は整った。

「聞いてのとうりだお前の相手は俺だ」

「アイツを倒すウォーミングアップにちょうど良いこい！」

俺と偽物は互いにデュエルディスクをセットしてデッキをセットする。

「……気を付けろよ知っているかも知れないがそいつのデッキは禁止カードで埋まっているかな」

「テメー余計な事を言うんじゃないやねえ！」

十代のアドバイスに偽物が反論するが……まあ禁止カードで戦うのも慣れた感じだな。

「決闘！！」

海斗 4000

偽物 4000

「先ずは俺のターンドロ！俺はマシンナース・ソルジャーを召喚」

レベル4

マシンナース・ソルジャー

ATK 1600

「マシンナース・ソルジャーの効果発動！このカードが召喚に成功したとき自分のフィールドに、このカード以外にモンスターがいな
い場合に手札からマシンナースと名のつくモンスターを手札から特
殊召喚できる俺はマシンナース・フォートレスを召喚！」

レベル7

マシンナース・フォートレス

ATK 2500

「カードを一枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

マシンナーズ・ソルジャー

マシンナーズ・フォートレス

伏せカード↓一枚

「俺のターンドロー！俺はバイス・ドラゴンを特殊召喚する」

レベル5

バイス・ドラゴン

ATK 2000

「このカードは相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる！ただしこの効果で特殊召喚した場合、攻撃力と守備力は半分になる」

バイス・ドラゴン

ATK 2000 ↓ 1000

知ってるよジャックのデッキではよくレッド・デーモンスのシンクロ素材になってるし。

「更に手札から魔法カード、サンダーボルトを発動する！！」

やっぱりサンダーボルトか禁止カードを使っつて聞いたから、このカードを使うことは予測できたな。

俺のモンスターゾーンに雷が落ちて俺のモンスターは全滅してしまった。

「テメー禁止カードじゃねーか！！」

「勝てればいいんだよ！！」

クロウが文句を言うが偽物は当然のような物言だった。

「俺はダーク・リゾネーターを召喚する」

レベル3

ダーク・リゾネーター

ATK 1300

『畜生！ようやく解放されたと思ったら、またコイツに使われるのかよー！』

ダーク・リゾネーターが精霊なのか、だけど偽物は精霊に気づいてない。

しかし、もの凄く嫌そうな表情になってる。

「俺はレベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！」

5 + 3 = 8

「王者の鼓動、今ココに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！！」

『だからシンクロ素材にな리たく、うわぁー!!』

悲鳴をあげながら三つの輪になるダーク・リゾネーター………可哀想だな。

「シンクロ召喚!我が魂!レッド・デーモンズ・ドラゴン!」

レベル8

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

現れたかレッド・デーモンズ。

「魔法カード二重召喚を発動して俺はツイン・ブレイカーを召喚!」

レベル4

ツイン・ブレイカー

ATK 1600

「俺はツイン・ブレイカーでダイレクトアタック！ツインアサルト
！！」

「ぐ！」

海斗 4000 ↓ 2400

なんだ痛みが走ってくるコレは闇のゲームじゃないはずだ。

「俺はコレでターンエンドだ！」

レッドデーモンズで攻撃すると思ったが俺の伏せカードを読まれた
のか？

「ふん、貴様の伏せカードは知っているドレインシールドだろ！」

「なに!?!」

どうして俺の伏せカードを知っているんだ!?

「俺のデュエルディスクは相手の伏せカードがわかるんだよ!更に相手に実際のダメージも与える!」

そうかダメージを受けた時に実際に痛みを感じたのはそれが原因か、それにしても相手の伏せカードがわかるってそこまでして勝ちたいのかよ!!。

「俺のターン!」

伏せカードが読まれてるのか次のターンアイツは俺の伏せカードを破壊するはずだ………なら。

「俺はレッドガジェットを召喚」

レベル4

レッド・ガジェット

ATK 1300

「レッド・ガジェットが召喚に成功して俺はイエロー・ガジェットの手札に加える。」

よしココで。

「俺は手札の古代の機械巨人を墓地に送ってマシンナース・フォートレスを特殊召喚する！」

レベル7

マシンナース・フォートレス

ATK 2500

「そんなモンスターでは俺のレッド・デーモンズの攻撃力に及ばない！」

誰がお前のレッド・デーモンズだよレッド・デーモンズが可哀想に思えてきたぜ。

「それはどうかな俺は永続魔法一族の結束を発動！このカードは自分の墓地に存在するモンスターの種族が一種類の場合、表側表示で存在するその種族の攻撃力は800ポイントアップする！」

「なんだと！！」

マシンナーズ・フォートレス

ATK 2500 ↓ 3300

レッド・ガジェット

ATK 1300 ↓ 2100

「これで俺のモンスターの攻撃力はお前のモンスターを上回ったぜ！マシナーズ・フォートレスでレッド・デーモンを攻撃！！」

「ぐー！」

偽物 4000 ↓ 3700

「更にレッド・ガジェットでツイン・ブレイカーを攻撃！」

「ぐわああー！」

偽物 3700 ↓ 3300

「俺は魔法カード非常食を発動して俺は罨カードのドレインシールドを墓地に送って1000ポイントライフを回復する」

海斗 2400 ↓ 3400

「俺はこれでターンエンドだ」

海斗

フィールド

マシンナーズ・フォートレス

レッド・ガジェット

一族の結束

伏せカード↓無し

「あれどうして、ドレインシールドを墓地に送ったの？」

「相手モンスターの攻撃も防げてライフも回復できるのに」

龍可と龍亞は疑問に思っていたが、そこに十代が説明する。

「……………あれは海斗が偽物のデッキは禁止カードで埋まっている事を知っている何より伏せカードを知られている状態では使用が難しいと判断して非常食でライフ回復に専念したんだ」

「なるほど、アイツのデッキが禁止カードで埋まっている事を知っている海斗だからこそ非常食でライフを回復したわけか」

十代の説明にジャックは頷く。

「悪いがお前の戦術はわかってるぜ以前も俺はお前と同じような禁止カードで埋まってるデッキと戦った事があつたからな、それで俺は禁止カードに対抗する術をあれから考えていたからな」

「うるせえ！いくら戦術がわかっていても俺のデッキには勝てねーよ！俺のターン！俺は魔法カード天よりの宝札を発動して俺は互いのプレイヤーはカードを六枚になるようにドローする」

何回思ったか知らないがこの効果で禁止カードに指定されないのかな宝札……………。

「更に俺は魔法カードサンダーボルトを発動してお前のモンスターを全滅させる」

やっぱり使ってきたか、俺のモンスターは雷に直撃してモンスターを破壊される。

「更に俺は死者蘇生を発動！蘇れレッド・デーモンズ・ドラゴン！
」

レベル8

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK 3000

「俺は魔法カードハーピィの羽根帚を発動してお前の伏せカードを破壊する！」

やっぱりな羽根帚も使ってきたか俺の予想は当たっていたか非常食を使わなかったら俺は負けていた。

「いくぞレッド・デーモンズの攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！！」

「ぐわあああ！！」

海斗 3400↓400

「おいもうサレンダーしたらどうなんだ」

「誰がサレンダーなんかするかよ！お前は俺の仲間を傷つけた、だから俺はお前を許さない！！」

やるぞこのドローで俺の運命が決まる。

「俺のターン！！」

来たありがとうカード達。

「俺は魔法カードパワーボンドを発動！このカードの効果により俺は手札の古代の機械巨人と古代の機械巨竜と古代の機械獣を手札融合！！」

三体の古代の機械モンスターが現れ次元に飲み込まれる。

「融合召喚！古代の機械究極巨人！！」

レベル10

古代の機械究極巨人

ATK 4400

「攻撃力4400!!」

まだだパワーボンドの効果を忘れてないか。

「更にパワーボンドの効果を発動だ、パワーボンドの効果により古代の機械究極巨人は攻撃力が倍になる!」

古代の機械究極巨人

ATK 4400↓8800

「な、なんだと!!」

「行くぞ古代の機械究極巨人で攻撃!アルティメット・パーフェク

トパウンド!!」

「うわぁー……!! また俺が負けるのかぁぁー……!!」

偽物 3300 ↓ - 3500

偽物は突然燃え出した。

「な、何だ!？」

「どうなってんだ!!」

俺達は偽物が燃え出した事に驚いたが、ダークは俺達に説明する。

「話したと思うがアイツは平行世界のジャックに倒されて、その残り火の魂がこの世界に来たと言ったよな」

「ああ」

「つまりだ、もう残りカスのアイツはそもそも長いことココに留ま
れなかった訳だ決闘で負けた事により、それはいつそう早まったわ
けだ」

ダークの説明が終わる頃には偽物の体の半分以上は燃えて偽物は…
……。

「おのれ！十代、ジャック、海斗！いつか復讐してやるから覚悟し
ておけ！！」

偽物はそう言い残して偽物は消えて最後に残ったのはアイツのカー
ドであった。

俺はやつのカードの束を集め、そこにダーク・リゾネーターのカード
を発見して俺はダーク・リゾネーターを手に取ったするとダーク・
リゾネーターが現れた。

『ありがとうようやくアイツの手から脱出する事が出来たぜ』

ダーク・リゾネーターは俺に感謝してくれた、そこに十代が……
…。

「……………すぐに助けられなくてゴメンな」

『大丈夫だったか』

『心配しましたよ』

そこに十代は謝りターボ・シンクロとエフェクトヴェーラーが現れた。

「良かったなダーク・リゾネーター」

『ああ、これもお前のおかげだぜありがとよ!』

ダーク・リゾネーターは嬉しそうに飛び回った、よほどアイツの手から離れたかったようだな。

「……………すまないな本当は俺がやるべきだったはずが」

「いや俺は仲間の仇をつてたから、それでいいよ」

俺は十代にそう言う………それにしてもコレで偽物事件は解決が良かった良かった。

「さて十代を元の世界に返さなきゃいけないから俺達はそろそろいくぜ」

ダークはそう言って十代も帰る準備を始めた、そうだ十代に渡すものがある。

「十代」

「なんだ？」

「コレ、忘れ物だ」

俺は十代にダーク・リゾネータを渡した。

「お前の精霊達の仲間だろ」

「ありがとう」

「良いつて、それより今度、この世界に来たら決闘する約束をしてくれないか？」

「わかった今度きたら決闘しよう」

そう言つてダークと十代は消えた。

コレで事件解決と思つたが……………。

「そう言えば、この惨状ジャックがやつた事になるよな、どう説明したらいいんだ？」

「……………あ!？」

俺の一言で周りは気づき騒がしくなった。

「何を言つ！俺の偽物がやつた事だ俺は無実だ!!」

「でも偽物は消えたよな」

「じゃあ、ジャックが犯人かな」

あたり一体が騒がしくなり、結局セキュリティに一時的に捕まってしまったジャックだが俺達の訴えのおかげでジャックは釈放されたが、このあとジャックが凄く不機嫌になったのは言うまでもない。

第十七話 希望の兵士 対 黒薔薇の魔女（前書き）

久しぶりの投稿ですいません。

それでは海斗 対 アキですどうぞー!!。

第十七話　希望の兵士 対 黒薔薇の魔女

俺はミリアとのライディング決闘が次の対戦相手の決闘をモニターで見ている、俺の次の対戦相手になったのは……………。

『……………やれ』

『うわああああああ！！』

虎堂　1700↓0

アキの逆鱗に触れて、倒された決闘プロファイラー……………だが同情はしない、人の過去を餌に体より痛い、心の傷を傷つけたアイツに俺は同情する気はないからだ。

「彼女のカードをどう読んだ？」

「拒絶と怒りと……………だが、まだ何か潜んでいる」

遊星は、アキとの決闘を見て拒絶と怒りと言ったが、他にもある、

そうアキの表情を見ると拒絶と怒り以外にも悲しみもある。

「遊星、俺は次の決闘の準備をしてくる」

「ああ、気をつけろよ海斗」

「ありがとう遊星」

この大会で俺は自分が何者なのか、そして遊星達と同じように自分の使命がなんなのか俺は、それを知るために俺は参加するだから俺は逃げ出す訳にはいかないんだ。

「次の決闘が危険なのは、わかっている、だが俺は逃げ出す訳にはいかない十六夜のためにも」

俺は出来れば彼女を救ってやりたい、俺には遊星のようなシグナーみたいな力はないかもしれない、だが苦しんでいる彼女を俺は、ほっとけない。

そして俺はデッキの最終チェックをしながら廊下を歩く。

「……………海斗」

「弓女か、どうした？」

「ねえ、次の決闘でるの？」

「ああ、出るよ」

弓女は心配してる表情で俺を見ていて、弓女のいつもの表情じゃない、弓女がいきなり俺に抱きついた。

「お、おい!!」

「海斗！お願い次の決闘、棄権して！」

いつもの弓女と様子が違う、一体どうしたんだ!？。

「弓女わかるよ！十六夜アキの気持ちがでも、それ以上に海斗に傷ついてほしくないの!!」

「……………だが弓女」

「十六夜の気持ちは弓女もわかるよ！だって弓女とアキはおんなじだもん！」

そうだな、アキはサイコ決闘者として、周りから拒絶され弓女もアキとは共通点は違うが他人より優れ他人はない力で周りに嫉妬され孤立してしまったからな。

二人の共通点は違うが、孤立してしまい一人になってしまった事は二人とも一緒だ、しかしだからこそ俺は……。

「弓女、俺はだからこそ引くわけには、いかないんだ弓女と同じように孤独になってほしくないんだ」

「それでも弓女は嫌！海斗が傷つく姿は見たくない！お願い海斗だから！！」

「弓女！！」

「……………海斗」

俺は弓女を強く抱きしめ、弓女の頭を優しく撫でた。

「安心しろ、俺は大丈夫だ、だから安心してくれ」

「か、海斗／＼／」

弓女は顔を赤くしながら落ち着いたようであった。

まあ顔が赤くなったのは知らないが……………。

「それじゃあ行ってくるよ」

「うん、無事に帰って来てね」

「ああ」

俺はそう弓女に言ってスタンディング決闘場に向かった。

そして始まる準決勝が……………。

『イエーイ！準決勝の始まりだ！！この戦いに勝利したものが既に決勝戦にコマを進めた、不動 遊星と対決だ！決勝にコマを進める決勝者は誰か！？先ずは一人目選手を紹介だ！黒薔薇の魔女！十六夜 アキイイイ！』

スタンディング決闘場にスモークが噴射され、そのスモークが晴れると、アキの姿が現れた

アキの姿が現れると観客席からブーイングの嵐が現れた。

「魔女を倒せ！！」

「魔女を生け贄に！！」

しかしアキは動じず、前を見ていて。そしてアキの前にスモークが噴射されアキの対戦者が現れる。

『そして、サテライトの希望の兵士！真田 海斗おお！！』

俺はスタンディング決闘場に立つ、俺にブーイングの嵐はなく………。

「魔女を倒せサテライト野郎!!」

「応援してやるぞ!!」

どうやらアキに制裁を加えてほしくて俺に応援してるようだな。

お前達の言葉の一つ一つがアキを傷つけてる事が、わからないのか。

『フォーチュンカップ準決勝スタート!!』

ついに始まった準決勝……。

『『決闘!!』』

海斗 4000

アキ 4000

「私のターン、ドロー、イービル・ゾーンを召喚」

レベル1

イービル・ゾーン

ATK 100

「イービル・ゾーンの効果を発動、このカードをリリースする事で、相手に300ポイントのダメージを与える」

イービル・ゾーンが爆発して、トゲが襲いかかる。

「ぐー！」

海斗 4000 ↓ 3700

「更にイービル・ゾーンをデッキから2体まで特殊召喚」

イービル・ゾーンが2体現れたか、しかし改めてくらったが痛いな想像以上に……。

「カードを一枚伏せてターンを終了。」

アキ

フィールド

イービル・ゾーン

イービル・ゾーン

伏せカード↓一枚

イービル・ゾーンの効果は、召喚した時、リリースしてデッキから2体まで特殊召喚できてシンクロ素材、アドバンス召喚の布石に出来るが、攻撃も受けやすい……伏せカードが気になるが、今の俺の手札だが……ココは臆せず攻める。

「俺のターンドロ―！俺は古代の機械兵士を召喚する！」

レベル4

古代の機械兵士

ATK 1300

「俺は古代の機械兵士でイービル・ゾーンを攻撃!」

古代の機械兵士の銃口がイービル・ゾーンを捕らえる。

「そして古代の機械兵士の効果を発動する、このカードが攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで魔法、罨カードは発動出来ない。」

そして古代の機械兵士が弾丸を発射してイービル・ゾーンに命中してイービル・ゾーンを塵となった。

「く!」

アキ 4000 ↓ 2800

「カードを二枚セットしてターンエンドだ」

海斗

フィールド

古代の機械兵士

伏せカード↓二枚

「私のターン、ドロ、イービル・ゾーンをリリースしてローズ・
テンタクルスをアドバンス召喚！」

レベル5

ローズ・テンタクルス

ATK 2200

ローズ・テンタクルス……まるでイカみたいなモンスターだな。

「さらに永続罨発動、アイヴィ・シャックル」

なに！たしかアイヴィ・シャックルは、アニメでは永続魔法だった

はずたる！

確かに間違っではないけど……やはり俺達、転生者が、きた事によりイレギュラーな事が起こり始めているのか。

「相手、フィールドに存在する全てのモンスターを私のターンの間、植物族にする事が出来る。」

不味い、ローズ・テンタクルスは相手、フィールドに植物族がいるとき追加攻撃の効果がある俺の古代の機械兵士を植物族に変更される。

「お前の古代の機械兵士を機械族から植物族に変更する」

古代の機械兵士

機械族↓植物族

「ローズ・テンタクルスのモンスター効果、バトルフェイズ開始時に相手フィールド上にいる植物族モンスター、一体につき攻撃回数を増やす事が出来る。よってローズ・テンタクルスの攻撃は二回出来る事になる。」

そのとうりだアイヴィ・シャックルとローズ・テンタクルスの相性は最高だからな。

「ローズ・テンタクルスで古代の機械兵士を攻撃！ソーン・ウィツプ！」

ローズ・テンタクルスの攻撃で古代の機械兵士が塵となり、攻撃の暴風が会場を襲う。

「この瞬間、罨カード発動！ガード・ブロック、このカードは戦闘ダメージ計算時に発動したとき、その戦闘によって発生した戦闘ダメージはゼロとなり、デッキからカードを一枚ドロー出来る。」

暴風は収まったがテンタクルスの攻撃はまだ残っている。

「現在、古代の機械兵士は植物族、ローズ・テンタクルスは植物族を破壊した時、300ポイントのダメージを与える」

「く！」

海斗 3700 ↓ 3400

アキが笑った……破壊を楽しんでいるが……だが、その瞳は悲しんでいた。

「ローズ・テンタクルスでダイレクトアタック！」

「罨カード発動！くず鉄のかかし、このカードは相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にして再びセットする事が出来る。」

かかしが現れローズ・テンタクルスの攻撃を防いだ。

「ターンを終了する」

アキ

フィールド

ローズ・テンタクルス

アイヴィ・シャックル（永続罨）

伏せカード↓無し

「俺のターンドロ―！俺はフィールド魔法、歯車街を発動」

フィールドの当たりが古代の町並みに変わっていく。

「更に俺は速攻魔法サイクロンを発動してフィールド魔法、歯車街を破壊する！」

観客席から、なにフィールド魔法を破壊してんだよとの野次が飛んできたが気にしないどころ。

「歯車街の効果を発動！このカードが破壊され墓地にいった時、アンテーク・ギアと名のついたモンスターをデッキ、手札、墓地から一体を特殊召喚する事が出来る。現れる古代の機械巨竜！！」

レベル8

古代の機械巨竜

ATK 3000

『な、なんと！リリース無しで攻撃力3000の上級モンスターを召喚された流石は決勝戦をかけて争う決闘！何が起こるか分からない！』

MCの実況を聞いて少しは呆れたが、サテライトにいた時から結構、上級モンスターを召喚しても直ぐに遊星に逆転された事が、たくさんあるんだが後はクロウのBFにも……話がそれた今は決闘に集中だ！！。

「俺は古代の機械巨竜でローズ・テンタクルスを攻撃、いけギアクラッシュ・ダイブ！！」

古代の機械巨竜はローズ・テンタクルスに突撃したローズ・テンタクルスは塵となった。

「……………」

アキ 2800↓2000

「いいぞ倒せ！」

「黒薔薇の魔女を倒せ！！」

アキが劣勢になった瞬間に観客席からアキの野次が酷くなった……。

「俺はコレでターンエンドだ」

海斗

フィールド

古代の機械巨竜

伏せカード↓一枚

「私のターン、ドロ、夜薔薇の騎士を召喚」

レベル3

夜薔薇の騎士

ATK 1000

「夜薔薇の騎士の効果を発動、このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスターを特殊召喚出来る。現れるロード・ポイズン。」

レベル4

ロード・ポイズン

ATK 1500

くるブラック・ローズ・ドラゴンが!!。

「レベル4のロード・ポイズンにレベル3の夜薔薇の騎士をチューニング」

4+3=7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よひらけ」

夜薔薇の騎士が三つの輪になりロード・ポイズンは、そこをくぐり星となる。

「シンクロ召喚、現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

レベル7

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400

ブラック・ローズ・ドラゴンが出現した事により周りは暴風が吹き荒れ、会場全体に吹き荒れた。

「きゃあああ！！」

「魔女め！！」

「魔女の巢に帰れ！！」

会場の客はアキを避難するが、だがアキは笑っていた。

まるで楽しんでいるように…………。

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動、自分の墓地に存在する植物族を一体を除外して相手フィールドのモンスターの攻撃力を、このターンのエンドフェイズ時まで攻撃力をゼロにする、イービル・ゾーンを除外」

イービル・ゾーンが表れブラック・ローズ・ドラゴンは噛み砕く。

「ローズ・リストラクション！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの茨が古代の機械巨竜に巻き付く。

古代の機械巨竜

ATK 3000↓0

俺の古代の機械巨竜が…………。

「速攻魔法サイクロンを発動、お前の伏せカードを破壊する」

突風が吹き荒れ、俺のくず鉄のかかしが失われた。

しかし突風の力で俺は吹き飛ばされそうだ。

「更に私は、装備魔法、増悪の棘をブラック・ローズ・ドラゴンに装備、このカードはブラック・ローズ・ドラゴン、または植物族モンスターのみ装備が可能、このカードを装備したモンスターは攻撃力が600ポイントアップする」

ブラック・ローズ・ドラゴンにの茨に棘が現れた。

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400 ↓ 3000

「私はブラック・ローズ・ドラゴンで古代の機械巨竜を攻撃！ヘイド・ローズ・ウィップー！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの茨が古代の機械巨竜に命中した。

「更に増悪の棘の効果を発動、この装備カードは相手モンスターを破壊する事は出来ない。そして相手モンスターの攻撃力、守備力を600ポイントダウンさせる」

古代の機械巨竜の破片が俺に降り注ぎ、そしてブラック・ローズ・ドラゴンの棘が俺に襲いかかる。

「ぐわあああ!!!!」

海斗 3400↓400

や、やばいブラック・ローズ・ドラゴンの棘が体を貫通した……だが俺は……まだ。

俺は倒れてしまった。

弓女 Side

そ、そんな嘘！

海斗が倒れた……約束したよね弓女と約束したよね無事に帰ってくるって……お願い海斗、目を覚まして海斗が居なくなったら弓女は一人ぼっちになっちゃうよ、だからお願い……。

「いや、いやああああ！！」

「弓女姉ちゃん！！」

「弓女さん！」

ごめん、龍亞君、龍可ちゃん、もうだめ見てられない、お願い海斗！！もうサレンダーして海斗が居なくなったら弓女はもう……弓女は！！

『落ち着きなさい！！』

……バーストレディー

『アイツは弓女に約束したんでしょう、帰ってくるって』

『だったらアイツが帰ってくる事を信じろよ!!』

……スパークマン。

『信じましょう海斗殿が帰ってくる事を』

『そのとうりだ』

皆……。

「大丈夫、弓女さん海斗は大丈夫だから」

龍可ちゃん……ごめんね弓女はもう一人ぼっちじゃないんだよね。
だからお願い海斗、無事に帰ってきて私達の絆を作ってくれたんだ
から海斗。

弓女 Side OUT

海斗 Side

はあ………ヤバイな血が止まらない、長期戦で決闘をしてたら間違
いなく死ぬな………。

だけど逃げ出す訳にはいかないよな、だからよデツキの皆、少しは
俺のワガママにもう少し付き合ってくれよ!!。

「おおおお!!!!」

俺は氣力を振り絞り立ち上がった。

俺の姿にアキは驚いている様子であった。

「あなた、死ぬのが怖くないの？」

「さあな………でもな俺は逃げ出す訳にはいかないのさ」

そうだ俺はジャックの馬鹿を目を覚ませ、遊星との決勝戦で戦うこ
と………そして何より弓女と無事に帰ってくる約束だ、こんな状況
で俺が無事なのは疑わしいが弓女との約束を破るわけには、いかな
いよな!!

「十六夜アキ、お前は悲しんでる」

「な、何を言っているの！」

「お前は破壊を楽しんでいるように見えるが、それはお前の本性じゃない、お前はその破壊行動の裏に自分の力に苦しみ傷ついている」

「アナタに何がわかるの、普通の人間であるアナタに！」

確かに俺は精霊を確認する以外は普通の人間かも知れない……………だけどそれでも！！

「確かに俺は君みたいな力はない、だけどこの決闘で俺は君の気持ちに答えよう」

カード達よ俺の思いに答えろ！！

アキのためにも！！

「ドロー……！」

このカードは……………。

「いくぜ俺は魔法カード、天よりの方札を発動、このカードで互いのプレイヤーは手札が六枚に、なるようにドロースる」

よし来たぞ。

「十六夜アキ！これが今の俺の全力だ行くぞ！俺は魔法カード、パワーボンドを発動、このカードで俺は手札の古代の機械巨人と古代の機械兵士、フィールドの古代の機械巨竜を融合！！」

現れる俺のエースカードよ！！

「現れる融合召喚！古代の機械究極巨人」

レベル10

古代の機械究極巨人

ATK 4400

「な！！」

「君の気持ちを全てを理解する事は俺には出来ないが、だけど共に

痛みを分かち合う事は出来るはずだ!!」

「わからない、どうしてアナタは、私が怖くないの」

「ふ、苦しんでいる人を助けたいと思うのが俺の癖みたいなものさ
俺は君が怖くないさ」

さてこの決闘に決着をつけるぜ!!。

「更にパワーボンドの効果を発動!このカードは機械族の融合に成功した時、融合モンスターの攻撃力を倍にする!!」

古代の機械究極巨人

ATK 4400 ↓ 8800

「いくぜコレが俺の全力だ!古代の機械究極巨人で攻撃!アルティメット・パーフェクトパウンド!!」

ブラック・ローズ・ドラゴンに古代の機械究極巨人の攻撃が命中して爆発した。

アキ 2000 ↓ - 3800

『き、決まった！決勝戦にコマを進めたのはサテライトの希望の兵士、真田 海斗だ！！』

勝利した……………やったぜ……………。

ドサー！！

海斗は突然、倒れた。

『う、コレはどういたしましょう長官！』

『仕方ありません、彼は決勝戦にコマを進めましたが現状の彼に決勝戦は戦えません、十六夜アキを決勝戦に進めてください』

こうして海斗が決勝戦の進出が不可能となりアキが自動的に決勝進

許さない!!。

海斗を傷つけたやつは、例え政府の高官だろうがマフィアのボスでも……………。

あの十六夜……………いや黒薔薇の魔女、絶対に許さないの弓女の大切な人を傷つけた罰を絶対に受けさせるの。

弓女 S i d e O U T

遊星 S i d e

海斗……………お前は気づいていたんだな、十六夜が苦しんでいる事にそして彼女を救おうとした。

だから会えてお前は避けず十六夜の全ての攻撃を受けて傷つきながらもお前は決闘に挑んだ。

「大丈夫なのか遊星。」

「大丈夫だ氷室、俺は海斗の分まで戦う」

そうだ命がけで彼女の心を救おうとした海斗のためにも、ラリー達の為にそしてジャックとの決着をつけるためにも俺は立ち止まる訳にはいかないんだ。

遊星 Side OUT

??? Side

へえ………転生者が勝ったか、けどアイツは死んだな、まあアキの攻撃をモロに食らったんだからな、バカなやつだよサイコ決闘者に真っ正面から向かうなんて自殺行為に等しいぜ………まあそのぶん俺の野望も果たせそうだけだな。

俺の野望が近づいたわけだ転生者みたいなイレギュラーが勝手に死んでくれて俺にとってはラッキーだからな。

さてフォーチュンカップが終わりダークシグナーが動いた時が俺の野望のスタートだ。

?
?
?
?

S
i
d
e

O
U
T

第十八話 新たな試練。(前書き)

ぐだぐだです！。海斗が目を覚まします。

タイトルはあんまり関係ない。

第十八話　新たなる試練。

ココは……どこなんだ…俺は一体？。

「コレが俺の息子なのか」

「ええ、私達の息子よあなた」

俺は若い二人の男女に抱き締められ暖かい温もりを感じた、その温もりは懐かしい物を感じた。

「雪、実はな俺、プロをやめようと思っている」

「どうして、あんなにチャンピオンになるって張り切っていたのに」

「海斗が産まれる前から俺は君にチャンピオンになりたいと言う俺のワガママに長く付き合ってくれた、だがもうおしまいだ息子と静かに二人で暮らそう」

「それで良いの？」

「ああ、悔いはない世間は認めないかも知れないが何より俺達の子、海斗と一緒に過ごせれば俺はそれだけで満足だ！」

親子か……父は金髪で無邪気な表情で子供っぽく、母親は赤髪でロングヘアーで優しい表情で穏やかな人柄であった……。

優しい家庭だな。

そんな幸せな家庭の日常だが……破局が訪れた。

二人は幸せそうにしていたが……。

「離してアナタ海斗が……！」

「ダメだ！もう間に合わない！お前まで死ぬぞ……！」

「いや、海斗がー!」

俺は突然の大地震により揺りかごと一緒に海に飲み込まれた……
まて俺はこの光景を知っている。

海に流され俺は……。

「おや、なんだいどうして赤ん坊がこんな所にいるんだい？」

あれはマーサ!…… マーサじゃないか…… そうだこの光景は俺
が転生した最初の光景だ!!

「可哀想だね、私が面倒を見てやるよ」

そうして俺は揺りかごと事、マーサに拾われマーサハウスで育ったん
だ。

そこから俺はいろんな出会いをしたんだ遊星、ジャック、クロウ……
そしてサテライトの仲間の皆。

そうだ、この光景は俺がサテライトでの昔の出来事だ、どうして俺
は……。

「どうじゃお主の過去をみて」

神様！どうしてココに……………。

「それはのう、お主をココに呼び出したのはワシじゃ」
どうして俺を……………。

「十六夜と言う女性に殺されかけ意識をうしない、その意識を連れて来たのじゃ、実はな重大な事をお主に話す。」

重大なこと……………。

「あの世界は、既にお主が知っている世界とは似てるようで似てない世界に変わり始めた」

似てるようで似てない世界？。

「お主達、転生者が介入した事によりあの世界は既に、アニメの世界ではない……………いやそもそも存在しておるから平行世界の地球と
思ってもらいたい」

似てるようで似てない理由……確かに俺という存在があり遊星達も実際に存在するからな。

「だから似てるようで似てない世界なのじゃ、あの世界の流れは物語のとうり進んでいるが、その物語にイレギュラーであるお主達、転生者の存在が既に似てるようで似てない世界になったのじゃ、ほんのわずかだが本来ある物語とは、あの世界は違う」

そうだなダークも同じことを言っていたな。

「本来は転生者であるお主に、この事を話すのは禁句なのじゃが、お主は今まで見てきた転生者とは何か違う感じがしたからの……だからお主の可能性にかけてみたくなったのじゃ海斗よ」

俺の可能性……？。

「ワシはコレまで数多くの転生者を見てきた、じゃがほとんどの輩はアニメの世界、漫画の世界と勘違いし自分が主役と勘違いして、我が物顔で世界に介入して破滅の道に進む事が多かった、中にはお主のように世界を救いたいと思ひ無茶をするものもおったがな」

だったらどうして俺を……。

「お主は最初にワシに言ったの、世界の歴史はその世界の住人が作るものだ」と

ああ確かに俺はそう思っている。

「だからお主の可能性にかけたのじゃ、お主なら、あの世界を正しき道に進ませる事が出来ると」

ただ単に俺がめんどくさがりなだけだと思っぜ。

「ワシはそうとは思わん、一人の力では人間は弱いが大勢の人間が力を会わせれば強大な力となり、世界を光輝く事もあれば闇に落ちる事もあるがお主は、人の絆を繋ぐ力がある、その力でお主の世界を救える力になるとワシは思っておる」

人の絆を繋ぐ力……。

「だが気をつけるのじゃ海斗、お主の他に転生者は、あの世界にいるが他の輩はお主と考えは違う下手をすれば世界を破滅に追いやる輩かも知れね、じゃが神であるワシは世界の介入は許されん、気をつけるのじゃ」

俺はそれを聞いて……………目の前が暗くなった。

「ココは、知らないで「大丈夫ですか海斗さん！」……………言わしてくれよ」

目を覚ますと俺は病院にいた……………。

俺の隣にいたのはミリアであつた。

「ミリア……………俺はどうなったんだ、それとフォーチュンカップは」

「説明しますよ海斗さん、海斗さんは十六夜アキさんとの決闘に勝ちましたが、海斗さんは倒れてしまい決勝戦を戦うことが不可能になりアキさんが決勝戦に進みました」

そっか、俺は決闘に勝ったが途中で倒れたんだな……………これ遊星との約束と弓女の約束も守れなかったな……………。

そんな事より……………。

「それより、なんでセキュリティのお前がココにいるんだ？」

「えっと……それは……その／＼／」

顔を赤くしてモジモジしているミリアに俺は首を傾げた……どうしたんだ？。

「それで今、フォーチュンカップはどこまで進んでいるんだ」

「もう、終わりました遊星さんが、キングであるジャック・アトラスを倒して遊星さんがニューキングになりましたが遊星さんは行方をくらませて現在、遊星さんの居場所がわかりません。」

「……そうか」

遊星は、ジャックとのけりをつけたんだな……そうだ！今は時間がどれだけ立っているかは知らないが早く……アルカディア・ムーヴメントに……！！！！

「か、海斗さんどうしたんですか……！！」

「遊星達を探しに行ってくる」

「む、無茶ですよ！！あの決闘で海斗さんの体は重症で歩くのだったまならないんですよ！！」

「それでもだ、何か嫌な予感がするんだ」

早く行動をしないと、アキや龍可や龍亞が危険な目にあってしまう……今がどの辺りまで話が進んでいるか、わからないが体が不自由だろうがコレから起こる事態を知っていたら黙って見過ごせないぜ。

「……………」

俺は膝をついた……くそココまで体が動かないのかよ。

「だからやめてください！今の状態で体を動かすのは無茶もいいところですよ！！」

「それでも俺は、親友の所にいかなきゃいけないんだ！」

例えこの体がぶっ壊れようが構わない、それで仲間が助かるなら俺は……………。

俺は無理矢理体を立たせ病室を後にしようとしたが……………。

「どこにいくつもりだ？」

そこには二人の男女……それは俺が夢でみた二人の男女であった。

「そんな体で、どうするつもりだ真田 海斗」

「アナタには関係ない、悪いがどいてくれ」

俺は病室を出ようとしたが二人に止められた。

「どういつつもりだ？」

「そんな体で、動いてはダメよ」

「関係ない、俺はやらなきゃいけない事があるんだ」

そつだ、コレから起こる事を知つてゐる俺だから、やらなきゃいけないんだ!!。

しかし二人は無理矢理、俺をベッドに寝かされた。

「は、離せ!!」

「病室なんだ静かにしろ」

「いいから離せ俺はやらなきゃいけない事が……」

「いい加減にしろ!!」

俺は金髪の人に怒鳴られ、黙つてしまった。

「お前が何をやるかは勝手だが重症患者で出歩くななんて無茶はやめるんだ、お前の無茶が原因で悲しむ人もいるだぞ、みろ」

俺は金髪の方はミリアに指を指すとミリアが泣いてゐた。

「女の子を泣かすなんて男の子すること」

俺は何も言えず……ただ二人の言葉を聞くだけだった。

「ヒック……か、海斗さんは……ヒック、少しは自分の心配をしてください……わ、私はあの決闘をみて私は……」

涙を流して語るミリアを見て……俺はどうしていいか、わからなかった。

「休むのも仕事のうちだ、今はしっかりと休みな」

「そうよ無茶は男の子の特権だけど、今は休みなさい」

「すみません、あの二人の名前は……」

夢で二人の素顔は見たが、はっきりと確認したい、もしかしたらこの二人が、この世界の親なのかと……。

「俺は真田 進だ」

「私は真田 雪よ」

真田 進に真田 雪…………俺と同じ真田…………まさかと思うが

いや下手な介入はやめよう…………俺は二人に…………。

「ありがとうございます」

俺はそれだけいい再び眠りについた。

真田 Side

「ねえアナタ、やっぱり、この子は…………。」

「俺達の息子だな」

フォーチュンカップで、コイツの決闘を見たがやはり見間違いじゃなかった…………あのデッキは俺がプロ時代に使っていたデッキだ。海斗が産まれた時に揺りかごと一緒にいれた俺のデッキだ。そして産まれた記念にかつた首飾りのコインが何よりの証拠だ

何より海斗の顔つきは俺達二人にそっくりだ。

しかし、どうする今更……。

いまさら親だと教えてやるのか……俺と雪にそんな資格はない、17年も行方がわからない親にいきなり、親の顔も知らない海斗にいまさら俺達が親と言うのは……。

「雪、帰ろう俺達にあの子に親だという資格はない」

「そうね……ごめんなさい海斗」

そつだコレで最後だ俺達に親の資格はない……海斗も今のままが幸せだ。

強く生きろよ海斗。

真田 Side OUT

決闘はありません、強引な進めかたです、それでも良いかたはよんでください。

話も短いです。

病室で俺は目を覚ますと外はすっかり夜であつた。

起きるとミリアも寝ていた。

「むにゃ……………海斗さん……………」

俺の看病をずつとしていてくれたんだなミリア……………セキュリティの仕事もあるのに悪い事をしたな、だけど悪いな俺はまた君を困らせるかも知れない。

俺はベッドをそつと出て俺の私服の赤のＴシャツと黒のチノパンのラフスタイルになり病室を後にする。

看病してくれて悪いなミリアだが俺には、やるべき事があるんだ……………。

とりあえず病院を出た俺は龍亞と龍可に連絡を取ってみる。

しかしいくら連絡をいれても出ない……………もう、アルカディウムーブメントに捕まったのか龍可と龍亞は……………だったら決まったなア

ルカディアムーブメントに潜入だ。

まだ体は本調子じゃないな……………まだアキのブラック・ローズ・ドラゴンにやられた傷口が痛む、歩くのも辛い、やはり俺は見過ごせない。

「しかし、参ったな俺のDホイールはドコにあるんだ？」

そう、俺はアキとの決闘で倒れて病院に運び込まれたんだよな、俺のDホイールの居場所がわからない……………困ったな、Dホイールがないとシティの現在地もわからないし、アルカディアムーブメントの場所もわからない、

俺はシティの地理に詳しくないからな。

とりあえずまずは駐車場を見てみよう……………とりあえず探すこと五分……………見つかった俺は思わず……………。

「……………こんな簡単に見つかるとはな」

まあ……………とりあえず俺のDホイールが見つかったら良しとするか、さてマップを確認してアルカディアムーブメントを探るか俺はマッ

プでアルカディアムーブメントを発見して、エンジンをかける。

「……………待っている龍可、龍亞」

俺はヘルメットを被りDホイールを走らせた。

俺はシティのハイウェイを走ると俺の頭に声が響いた。

『海斗……………海斗、聞こえるかしら？』

「その声は、バーストレディー、どこにいるんだ！」

『私はアナタに念話で話してるわ私達はアルカディアムーブメントにいるわ』

まさか精霊が念話が出来るとはな……………しかしアルカディアムーブメント、弓女も捕まったのか。

『いえ逆よ、早くアルカディアムーブメントに来て私達では弓女を止められないわ！…！』

「おい、弓女がどうしたんだ！一体なにがあっただんだ！」

『お願い……と……め……て……弓……女は……』

そこで念話が切れた……くそ一体、弓は何をしようとしてるんだ
！！

頼む弓女……早まる行為はやめろよ無事でいてくれ！！。

弓女 Side

海斗を意識不明……許さないの。

絶対に！！

十六夜アキ……弓女の大切な人の命を奪おうとした罪を絶対に償
わせるの！！。

私はアルカディアムーブメントに潜入したの…………十六夜アキはドコにいるのー!。

「ディヴァイン、ディヴァイン…………ディヴァインドコにいるの？
ディヴァイン」

見つけた…………海斗の仇の黒薔薇の魔女ー!。

「悪いけど、貴女をディヴァインの元へは行かせるわけには、
ないわ」

「貴女は…………ミステイ」

どうして…………どうして、モデルのミステイがいるの？

まって確かミステイの弟は、アルカディアムーブメントに殺されたんだよね…………。

私と…………同じ理由で来たの？。

だけど……悪いけど弓女の邪魔はさせないの。

「ミステイ……悪いけど、その魔女は私の獲物なの」

もう隠れる必要はないの………だってやっと見つけたの海斗を傷つけた張本人が………。

「貴女は誰？」

「私は知ってるの十六夜アキ………いえ黒薔薇の魔女」

魔女は知らないけど私は知ってるの………アカデミアの時から………。

「知らないの、アカデミアで一緒のクラスの女神弓女さんだよ」

「女神………もしかしてあの………」

「ようやく思い出してくれて、嬉しいの」

そうだよ……………弓女と十六夜は似た者同士なの……………でもだから許さないの！！

大切な人を傷つけた事がどれだけ許さないか教えてあげるの。

「弓女さんは、貴女が許さないの、私の大切な人を傷つけた貴女が」
「傷つけた何を言っているの？」

「まだわからないの？……………フォーチュンカップの準決勝で戦った
真田 海斗の事なの！！」

そうなの！！弓女は絶対に許さないの海斗は私の光なの、闇に落ちた私を否定しないで全力で受け止めてくれる優しくて暖かい光なの……………その光を隠す影は絶対に潰すの！！

「だから悪いけどミステイ、もし邪魔するなら先に貴女をやっつけるの」

「貴女……………その顔は恋する人を傷つけられその相手に復讐する顔ね、良いわ私は邪魔をしないわ」

「ありがとうなの…………十六夜アキ、貴女を潰すの!!」

「私を潰す…………いいわ受けてたつわ」

弓女は決闘ディスクをセットして、デッキをセットするの。

『弓女!海斗がこんな事をして喜ぶと思っているの!!!』

黙れなの…………私は絶対に黒薔薇の魔女を許す事ができないの!!!
!!!!!!!!!!!!!!。

「「決闘!!!」」

弓女 4000

アキ 4000

始まったの…………さあ海斗を傷つけた魔女の制裁の決闘が始まったの!!!。

弓女 Side OUT

アキ Side

……真田 海斗……不動 遊星と同じ私に恐れず戦った数少ない決闘者……。

女神……アナタは私と同じで周りから否定されていたわね、それでいつも私と同じ一人、そんなアナタにとって海斗は一人の悲しみから救ってくれた光なのね、デイヴァインが私を救ってくれたように。

そんなアナタは、海斗を傷つけた私が許さない。

「決闘!!」

良いわ……私とアナタは似た者同士……受けてたつわ、私も今の場所を無くしたくない、ココは私の返るべき場所、だから似た者同士である、アナタでも容赦はしない。

アキ Side OUT

第二十話 潜入アルカディアムーブメント……………弓女 対 アキ 光を求める戦

新キャラが登場します……………そして弓女が……………（汗）。

それではどうぞー!!。

アルカディアムーブメントについた…………俺はDホイールで入口のドアを突き破りアルカディアムーブメントの本部に入る待っている弓女!!。

俺は本部の中に入ると階段をDホイールに爆走する…………次々と階段をDホイールで上り俺は廊下に出る…………。

あれは…………弓女とアキだと!!。

どうしてアキと弓女が決闘しているんだ!?

とにかく俺はDホイールを走らせ弓女の所に向かう。

「弓女えええええええ!!」

俺は弓女を見つけ叫んだ弓女は俺を見たが俺は弓女の表情を見て驚いた…………。

「あ、海斗…………来てくれたんだ弓女さん、嬉しいよ」

いつもの弓女じゃない……………弓女の雰囲気があるで、ひぐ。しのヤンでいるレ。みたいな表情になっている。

「一体、何をやっているんだ弓女！」

「決まってるよ弓女は、海斗を傷つけた、この魔女を倒しに来たの、悪いかな……………かな？」

「俺は、そんな事を頼んだ覚えはないだからやめ……………ぐ！」

くそ、傷口が……………本調子じゃないのにDホイールで爆走して来たからな……………くそ……………俺は膝を着いた。

「悪いけど、アナタに彼女を止める事は出来ないわ」

「お前は、ミスティ！」

ダークシグナーのミスティがどうしてココに……………。

それに何故、彼女がアキと決闘してないんだ……………たしか原作ならアキと決闘しているはずだが、コレが神様が言っていた似てるように似てない世界の影響なのか……………。

「彼女は、アナタの為に決闘をするのよ止める事は許されないわ」

俺の為だと…………俺は弓女に、こんな事をする事は望んでいないぞ。

「アナタは、望んでないと思っているみたいだけど、でもね女は本気で恋した男のためなら何でもするのよ」

恋…………誰にだ？

「鈍いわね」

大きなお世話だ!!。

「だから、アナタに彼女を止める事は出来ない。だから大人しく見ていなさい」

くそ…………また傷口が弓女…………お前は何かあったんだ。

俺はお前を、そんなにしてしまったのか!？。

「私のターン、ドロ―私はポタニカル・ライオを召喚」

レベル 4

ポタニカル・ライオ

ATK 1600

「ポタニカル・ライオの効果を発動、このカードの攻撃力は自分フィールドの植物族モンスター一体につき、攻撃力が300ポイントアップするポタニカル・ライオは植物族よってポタニカル・ライオの攻撃力は300ポイントアップする」

ポタニカル・ライオ

ATK 1600 ↓ 1900

「更にカードを一枚セットしてターンエンド。」

アキ

フィールド

ポタニカル・ライオ

伏せカード↓一枚

初めのターンにしては良い出だしだが弓女のヒーローの展開力は凄まじいからな…………。

しかし…………アキの植物族は、バーンと墓地肥やしが得意なデッキだ、どうなるか。

「弓女のターン、ドロー弓女は魔法カード、ダーク・フュージョンを発動するの」

なに！！ダーク・フュージョンだと！！

たしか、この世界でダーク・フュージョンを使える決闘者はいないはずだ…………どうなっているんだ！？。

「手札のフェザーマンとバーストレディーを融合、現れてE・HE RO インフェルノ・ウィング」

レベル6

E・HERO インフェルノ・ウイング

ATK 2100

E・HEROが悪の心を持ったHERO インフェルノ・ウイングが現れた。

「E・HERO?.....E・HEROじゃない?」

「魔女が気にする必要はないの速攻魔法、サイクロンを発動だよ、フィールド上に存在する魔法・罠カードを破壊するの弓女は魔女の伏せカードを破壊するの」

突風がアキの伏せカードを襲う、伏せカードは棘の壁だった。

「.....く!」

「弓女はインフェルノ・ウイングで攻撃だよ、インフェルノ・ブラスト!」

インフェルノ・ウイングの蒼い炎がポタニカル・ライオに直撃して

ポタニカル・ライオは塵となる。

「……………」

アキ 4000 ↓ 3800

「更にインフェルノ・ウイングの効果を発動だよ、インフェルノ・ウイングは戦闘でモンスターを破壊し墓地へ送ったモンスターの攻撃力と守備力の高い方の数値分のダメージを相手に与えるのよ」

「何ですって！」

ポタニカル・ライオの守備力は2000……………ライフ4000の世界では痛いダメージだな。

「やっちゃえ、インフェルノ・ウイング……………ヘルバック・ファイヤ」

蒼炎の炎の波がアキを襲う。

「きゃあああ!!」

アキ 3800 ↓ 1800

あのアキが苦しんでいる………と言つことは実際のダメージを与えているのか!!

バカな弓女に、そんな能力はないはずだ!!。

「コレは……サイコ決闘に匹敵する力」

「なに驚いているのかな……今まで自分がやった事だよ」

弓女……お前は……。

「いやいや、流石は女神さん、凄いですね!」

拍手をしながら近づいてくる男……その男は黒いスーツに黒い帽子に青い髪……だが、その姿は、まるでブレイブルーのハザマにソックリであった。

「あ、私はテルミと申します、以後お見知りおきを、真田 海斗さん」

「だ、誰なんだお前は……………」

なんだか嫌な感じがする、この男は……………。

「いやはや、私が渡したデッキは凄いですね、あの魔女にあそこまでのダメージを与えるとはい凄いものですよ!」

な、なんだと…………… コイツが。

「お、お前が弓女にE・HEROを渡して、弓女をあんなふうにしたのか!」

「私は別にそんな事をしていませんよ、私は彼女にデッキを渡しただけ……………彼女はデュエルモンスターの精霊を見る力があるのですから、サイコ決闘者に近い力があっても不思議では、ありませんよ」

確かに……………弓女は精霊を見ることは出来る……………だが今まで、そんな力の発動はなかった。

「まで、どうしてお前が、その事を知っている！」

「すいませんが、コレは話せませんね、無利益の人間に秘密を話すほど私も愚かではありませんので」

「……………く！」

情報は秘密と言っわけかよ……………。

「あ、でもコレは教えときましょう、同じ転生者であることはね」

な、コイツが……………俺と同じ転生者なのか。

「まあ、それはさておき楽しんで見物しましょうか・い・と・さん
へ」

笑顔で語るな……………くそ、コイツ……………一体、弓女を使って何を企んでいるんだ！？。

「やはり、アナタなのね……………テルミ」

「コレはミスティさん、ダークシグナーの格好も更に美しさを感じますね」

「あれを使わせたと言うことは彼女に」

「オッとこれ以上は喋らないでくださいね、彼に聞かれると面倒ですの」

やはり何か企んでいるのか……………無理矢理でも聞きだ……………ぐ！

「おやおや、無理はしないほうが良いですよ、もともと黒薔薇の魔女から受けた傷は重症のようです。歩く事もままならない体でココまでくる精神力は誉めますが、今は動かないほうが、身のためだと思いますがね」

くそ……………アイツの言うとおり傷口から血が……………。

「さて、ゆっくり見物でもしましょう最高の席でね」

……………「イツー!!」。

「黒薔薇の魔女……楽に倒せないのじつくりいたぶるから覚悟
するの」

弓女……俺は何もする事が出来ないのかよ!!。

強引な勧めかたですが・・よろしくお願いします

それとオリカが登場します。

「弓女はモンスターをセットしてターンエンドだよ」

弓女

フィールド

E・HERO インフェルノ・ウィング

セットモンスター

伏せカード↓無し

今の状況は弓女のほうが有利だと思うが、アキもこのまま殺られるとは思えない、E・HEROは効果は強力だがE・HEROと比べてプレイングは難しい、ダークフュージョンは融合と違ってサーチ出来るカードが少ないからだ。

それにE・HEROはE・HEROと比べたら属性ヒーローがいないし融合モンスターも少ない。E・HEROと比べたら難易度は高い。

どうなるんだ、この決闘は…………。

「私のターン、ドロー、ローンファイア・ブロッサムを召喚」

レベル3

ローンファイア・ブロッサム

ATK 500

あれは…………植物族の上级モンスターを簡単に召喚出来るモンスターだな、効果が強すぎて制限モンスターに指定されたからな、あのカードは…………。

「ローンファイア・ブロッサムの効果を発動、このカードをリリースして、デッキから植物族モンスターを一体、特殊召喚出来る、私はギガプラントを特殊召喚。」

レベル6

ギガプラント

ATK 2400

ギガプラントか……デュアルモンスターだが再召喚された時の効果は植物族にとって最高の効果だよな。

「更に私は装備魔法、スーペルヴィスを発動」

スーペルヴィス……これでギガプラントは再召喚の状態だな。

「私はギガプラントに装備、ギガプラントは再召喚の状態になり、ギガプラントの効果を発動、このカードは手札、または墓地に存在する昆虫族または植物族モンスター、一体を特殊召喚出来る私は墓地に眠る、ポタニカル・ライオを特殊召喚」

レベル4

ポタニカル・ライオ

ATK 1600

「ポタニカル・ライオの効果を発動、このカードは自分フィールド上の植物族モンスター、一体につき攻撃力が300ポイントアップする、私のフィールドにいる植物族は二体よってポタニカル・ライオの攻撃力は600ポイントアップする。」

ポタニカル・ライオ

ATK 1600 ↓ 2200

「ギガプラントで、インフェルノ・ウイングを攻撃！」

ギガプラントの棘がインフェルノ・ウイングに貫通して、インフェルノ・ウイングは塵となった。

弓女 4000 ↓ 3700

「……………」

弓女は、反応しない、まるで何かを待つように……………」

「更にポタニカル・ライオでセットモンスターを攻撃」

ギガプラントの棘が弓女に襲いかかる。

「セットモンスターは、メタモルポットだよ、メタモルポットのリバース効果を発動だよ、お互いのプレイヤーは手札を全て捨てて、カードを5枚ドローするんだよ・・・だよ」

これで弓女とアキは墓地肥やしとカード補充の2つが出来た、振り出しだな。

「私は、カードを一枚セットしてターンエンド」

アキ

フィールド

ギガプラント

ポタニカル・ライオ

伏せカード↓一枚

フィールドは逆転した……しかし弓女は、焦っていない余裕の表情であった。

まだ弓女には秘策があるようだ。

「弓女のターン、ドロー、弓女は二枚目のダークフュージョンを発動するの、手札のスパークマン、クレイマンをダークフュージョンなの」

まで！既に正規融合モンスターがそろっているのか！！。

インフェルノ・ウィングを召喚したから少しは防御に回らと思ったが逆だった、弓女の手札に既にスパークマンとクレイマンが手札にあったのか……ココで属性ヒーローを召喚するなら俺も驚かないが、E・HEROに属性ヒーローはいない、つまり ダークガイアとマリシヤス・デビル以外は正規融合モンスターじゃないと融合召喚が出来ない。

だから弓女の展開力に俺は驚いていた。

「現れてE・HERO ライトニング・ゴーレム」

レベル6

E・HERO ライトニング・ゴーレム

ATK 2400

これで、アキのフィールドはがら空きだな……………。

「ライトニング・ゴーレムの効果を発動するの……………フィールド上に存在するモンスターを一体を破壊できるの」弓女は、ギガプラントを破壊するの、ボルテック・ボム」

黒い雷の塊が、ギガプラントに命中して爆発してギガプラントは破壊された。

「く……………」

アキの表情が崩れる……………苦しい状況だからな、せつかくフィールド

を逆転したのにまた戻される

「そしてギガプラントが、フィールドから居なくなっただから、ポタニカル・ライオの攻撃力も下がるの」

ポタニカル・ライオ

ATK 2200 ↓ 1900

「……………」

……………弓女のプレッシャーにアキが怯えてるように見えた……………。

アキ Side

な、なんなの……………私が今まで感じた事がない力を感じる……………サイコ決闘なんて生易しいと感じる圧倒的力と威圧感。

女神は……………何者？。

「弓女の事を……………恐怖してるよね……………でも、魔女であるアナタも同じことしたんだよ……………だよ」

同じこと……この恐怖心……私が今まで相手に与えた気持ち。

私は………。

——アキは何も考えなくていいんだよ。——

そつだ考えるな……ディヴァインが私の全て……だから、この決闘……負けられない。

「更に弓女はライトニング・ゴーレムでポタニカル・ライオを攻撃だよ、ヘル・ライトニング♪」

黒い雷が私のポタニカル・ライオを破壊した……。

アキ 1800 ↓ 1300

「弓女は、魔法カード命削りの方札を発動するの、自分の手札が五枚になるようにドロースするの♪」

ココで強力なドロー補助の魔法を！

「弓女はカードを一枚セットしてターンエンドだよ」

弓女

フィールド

E・HERO ライトニング・ゴーレム

伏せカード↓一枚

私は今は……圧倒的不利な状況……でも私は負けられない、もう私の帰るべき場所はココだけ、だから負けられない……ココが私の全てだから。

アキ Side OUT

海斗 Side

まさか……扱いが難しいE・HEROをココまで扱いきる、なんて……しかし弓女もアキも、どっちが勝つかは予想が出来ないな……やはり現在、弓女のフィールドには、自分のターンがくれば問答無

用で相手モンスターを破壊するライトニング・ゴーレム……一見、弓女のほうが有利に見えるが……しかしアキは墓地に植物族が二体いるココで、ブラック・ローズを召喚されたら、弓女には大打撃のダメージが喰う……。

「私のターン、ドロー、私は夜薔薇の騎士を召喚」

レベル3

夜薔薇の騎士

ATK 1000

ココで夜薔薇の騎士か……夜薔薇の騎士を出した……出るのか。

「夜薔薇の騎士の効果を発動、このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスターを一体、特殊召喚出来る、私はロード・ポイズンを召喚。」

レベル4

ロード・ポイズン

ATK 1500

「レベル4のロード・ポイズンにレベル3の夜薔薇の騎士をチューニング！」

4 + 3 = 7

……ブラック・ローズ・ドラゴン……体の傷口がうずくな

「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け」

夜薔薇の騎士が三つの円になりロード・ポイズンは、それをくぐり抜け星となる。

「シンクロ召喚！現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

レベル7

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動、シンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊する、ブラックローズ・ガイル。」

ブラック・ローズ・ドラゴンの暴風が全体を襲う。

「悪いけどさせないの…… 罨カード発動、天罰…… カードを一枚墓地に送って相手モンスターの効果を無効にして破壊するの。」

ブラック・ローズ・ドラゴンに雷が落ちて破壊され暴風も収まる。

「私は永続罨、ウィキッド・リボーンを発動、800ポイントのライフをコストに、墓地のシンクロモンスターを特殊召喚する私はブラック・ローズ・ドラゴンを復活させる。」

レベル7

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK 2400

「ただし、このカード効果で特殊召喚された、シンクロモンスターは効果は無効化され、このターン攻撃宣言する事は出来ない、私はカードを一枚セットしてターンを終了する。」

アキ

フィールド

ブラック・ローズ・ドラゴン

ウィキッド・リボーン（永続罠）

伏せカード↓一枚

なんとか防いだようだが、ライトニング・ゴーレムの効果をアキが忘れてると思えないな……………何か秘策があるんだろうな、あの伏せカードに。

「いやはや、凄いですね、どちらも互角の攻防ですね、私達は、こ

んな素晴らしい決闘をタダで見てるんですから、特をしてると思いませんか」

テルミ……………相変わらず、その笑顔が嘘だとわかるくらいの男……………コイツの企みはなんなんだ一体？。

「弓女のターン、ドロ……………弓女はライティング・ゴーレムの効果を発動するの、ブラック・ローズ・ドラゴンを破壊だよ」

ライティング・ゴーレムの雷の塊を形成する。

「私は速攻魔法、発動、禁じられた聖杯！フィールド上の表側表示で存在するモンスター、一体の攻撃力を400ポイント上げて、エンドフェイズ時まで、モンスターの効果を無効にする」

E・HERO ライティング・ゴーレム

ATK 2400 ↓ 2800

ライティング・ゴーレムに聖杯が、かかりライティング・ゴーレムが形成した雷は消えた。

「魔女……………見せてあげるの……………弓女のおきのおきの最狂のヒーローを」

最狂のヒーロー……弓女の狂気がまた一段と強くなった。

アキも弓女の狂気に怯えてる。

「弓女は魔法カード、オーオーバーソウルを発動するの、このカードは自分の墓地に眠る通常のE・HEROを特殊召喚するの弓女はE・HERO スパークマンを墓地から特殊召喚するの」

レベル4

E・HERO スパークマン

ATK 1600

「更に弓女は速攻魔法、超融合を発動だよ」

なに超融合だと!!

まで超融合は確か、十代が使うカードのはずだろ、この世界に一枚しか存在しないカードがどうして弓女が持っているんだ!!。

「おや、超融合を使うんですか弓女嬢も人が悪いですね、このまま戦っても勝ちは見えていきますのに」

テルミは……笑顔で語る……まさかテルミのやつ！

「その表情は気付いたようですね……そうですね私が作ったんですよ、この世界でも使えるようにね」

やっぱりな……この世界では超融合や主人公専用のカードは、一般人に手に入る事はまずない。

俺もこの世界に転生した時には、シグナーや神のカードや地縛神や機皇帝のカードなどはなくなっていた。

だからテルミのやつは、そう言った一般人が保有する事がまずないカードを作って実用化したのだ。

「弓女のスパークマンと魔女のブラック・ローズ・ドラゴンを融合
……」

「そんな……相手モンスターを融合素材にするカードが存在するなんて！」

アキは驚いていた……無理もない超融合はアニメGXの十代の専用カードだ、世間に知れ渡ってるはずはないからだ。

「融合召喚……現れて地獄の炎 E・HERO ヘル・バーニング
！！」

レベル8

E・HERO ヘル・バーニング

ATK 2600

E・HERO ヘル・バーニング……あんなE・HERO 見た
ことがない、まさかテルミのやつ

「ええ、あなたの考えてるとおり作っただですよ、あのカードも」

E・HERO ヘル・バーニング……E・HEROの属性ヒーロー版だ。

しかし……もうアキに勝ち目はなくなった……。

弓女

フィールド

E・HERO ライトニング・ゴーレム

E・HERO ヘル・バーニング

アキ

フィールド

無し

伏せカード↓無し

次の瞬間突然、ビルが揺れ始めた……そして次々と何かが吸い込まれていくのを確認した。

「ついに始まりましたか……ミスティさんココは引きましょ」

「まで！お前たち……まさかあれは！」

「流石は転生者、さっしが良いですね……そうですよ地縛神が召喚されたんですよ……あ、でも安心してくださいね決闘に関係してる私達に危害はありませんから」

「ぐ、テメー！」

涼しい顔で言うんじゃねえ！！

人の命を代償に召喚されてんだぞ地縛神は！！

「弓女嬢、引き上げますよ……彼女との決着はまたの機会です。」

次の瞬間、ビルの上が爆発した、ビルの上から人が落ちてきた。

「デヴィアインー！！」

アキは叫んだ……そしてデヴィアインは下に落ちて消えていく。

「そうだね……魔女……次の戦いである男と同じめに合わせてあげるよ」

弓女はミステイと一緒にその場を去ろうとした。

「まて弓女!!」

「海斗………弓女さん……」

「おっと、それ以上、語る事は禁止ですよ、弓女嬢こちらのルールを守ってくださいね」

テルミは弓女にそういつて……その場から消えた。

「十六夜!海斗!逃げろ!!」

「氷室ちゃん!早く逃げなきゃ」ココも危ないよ!」

氷室とじいさん、それに龍可と龍亞！！

無事だったんだな。

「氷室！俺は十六夜を連れて逃げる、だから龍亞達を連れて逃げてくれ！！」

「ああ、わかった！お前も早く逃げろよ！！」

ビルは崩壊、寸前だ早めに逃げなきゃな……。

「おい、十六夜！」

「いや……ディヴァイン……いや……。」

まずい……。混乱している、無理もないか、自分が信頼している人物の、あんな光景をみたらな。

「とにかく逃げるぞ！」

俺は無理やり十六夜をDホイールに乗せて崩壊するビルを脱出する。

「おい！誰かいるのか！？誰か返事をしろ！！」

俺は聞き覚えのある声が聞こえた、あの白いDホイールに乗っているやつは・・・ジャック！！

「おい！ジャック！！」

「貴様は海斗！なぜ貴様がココにいる！？」

「そんな事より、早く逃げるぞ、ここはもう崩壊寸前だ！」

俺達はココから脱出しようとしたが・・・ジャックは一つのメガネをとり立ち止まった。

「おい！ジャックどうした！？」

「いや、何でもない早く脱出するぞ！」

「わかってる！」

俺はアキをDホイールに乗せて俺とジャックは、どうにか崩壊寸前だった、アルカディアムーブメント本部を脱出した。

そこに氷室達が出た。

「海斗！良かった無事で！」

「全くお前は、あれだけの重傷を負って無茶しやがって」

「まあ、あんちゃんが無事で何よりだわい」

そうか・・・みんな無事か・・・よか・・・。

ドサッ！！

海斗は倒れた。

「おい、海斗!!」

「これは、酷い傷じゃ、無理して傷口が開いたんじゃない!」

重傷で歩く事も厳しい傷を負っていた海斗だが、ついに無理が響いて、フォーチュン・カップで受けた、アキのブラック・ローズ・ドラゴンの傷口が開き、そこから再び出血が始まった。

「・・・ゆ・・・め・・・」

彼は自分の大切な仲間と思っている人物の名を言って意識が失った。

弓女 Side

黒薔薇の魔女・・・弓女の大切な人を傷つけた・・・憎むべき存在でも、魔女をもう少しで倒せそうだったのに・・・。

「おや、どうしました弓女嬢？」

「なんで邪魔したの・・・もう少しで魔女を倒せたのに邪魔したの・・・ねえ、なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで？」

どうしてなの？あときは仕方なく引いたのに・・・なんで？。

「ほら、あれですよ弓女嬢の力をたっぷりと彼女に与えれば次の決闘は、彼女はもっとアナタに恐怖するはずですよ、だから私は引くように言っただけですよ」

そうなの・・・だから引くんだけ。

「あ、それと弓女嬢、そのデッキを与えたんですから我々、ダークシグナーに協力してくださいよ」

「いいよ・・・魔女はシグナーだから協力してあげるの、弓女は次は確実に倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒す」

の倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの倒すの……
」

狂うように繰り返す弓女の言葉。

「テルミ……アナタ、最初っから、こうする予定だったのね」

「おや、何の事ですかミスティさん？」

ミスティはテルミに聞く。

「そもそも、なんで普通の人間であるアナタが、ダークシグナーと協力するのかしら……それにまるで私達、ダークシグナーとシグナーが戦う事を初めからわかってるように予測して……一つだけ聞かせてアナタは何者なのかしら？」

「私はテルミ……シグナーに恨みがある人間、それだけですよ」

テルミの言葉にミスティは疑問に思っていた、ミスティはこの男の野心はなんなのかと……普通の人間である彼がどうして危険でしかないダークシグナーである私達に協力するのかとミスティは疑問がつきなかった。

「もう聞かないわ」

ミスティはこれ以上の干渉はやめた。

「ええ、そうしてくれると私も助かりますので」

ミスティとテルミが何か言ってるようだけど弓女……には関係ないの……弓女は魔女を倒すだけなの次こそは必ず倒すの。

そういえば……精霊の声が聞こえなくなったの……でも弓女に関係ないから良いの。

「それでは、ミスティさん、カーリさん、弓女嬢、これからアナタ方に協力させていただきますので、よろしくお願いしますね」

テルミは何を考えてるか、わからないのでも弓女は海斗を傷つけた相手に制裁できるなら、だれと協力しても構わないの……例えば誰でも。

弓女
Side
OUT

今回のオリカ説明。

レベル8

属性↓炎

E・HERO ヘル・バーニング

ATK 2600 DEF 2100

悪魔族・融合/効果

『HERO』と名のついたモンスター+炎属性モンスター

このカードは『ダーク・フュージョン』での融合召還でしか特殊召
還できない。

このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、自分のデッキからカードを2枚ドローする事が出来る。

E・HERO ノヴァマスターのE・HERO版。

効果はノヴァマスターと同じだが、カードを二枚ドロウする事が出来るのが魅力であり融合素材もHEROと書いてあるだけなので、E・HEROという縛りがないので、どのHEROでも融合が可能となっている。

第二十二話　海斗の決意、そして新たなる仲間。（前書き）

無茶なのは、わかってます・・・ですが、使いたかったですよ!!。

納得しない方は読むのを止めてください。

第二十二話　海斗の決意、そして新たなる仲間。

ココは・・・？。

『気がついたか、海斗』

ちよつとまで・・・なんでE・HERO　ネオスが、俺の目の前にいるんだ!!。

『この世界では初めましてかな海斗』

この世界？　どついう意味だ。

『知らないのか君とは前の世界では、ともに戦った仲間じゃないか』

前の世界・・・そうだ俺がまだ転生する前の時の中学時代だ、俺は喜んだ融合がいらぬ新しいヒーローのカードに・・・そう、それがネオスだ。

周りはネオスなんか使えないと言われたが俺は違つた、ネオスをデッキに入れて俺は戦つた。友達やカードショップの対戦相手とも戦

って俺は派手に勝つことは、なかったけどネオスは好きだった。
シンクロ召喚が流行りだした時でもって俺は、ネオスを使い続けた。
・まあたまに別のデッキも使ったけど。

そういえば、この世界に来て最初に確認したけどネオスのカードが
無くなっていたんだよな。

ネオスが無くなって俺は落胆した、それでも俺は割り切り。揺りか
ごの中にあつたデッキを使って俺は、戦い続けた。

でもなんでネオスが俺の目の前に？。

『こうして君と話せて私は嬉しいよ海斗』

「俺もだよ、まさか、ネオスが精霊だったなんて」

これは俺も驚いていた、転生する前から、ネオスは俺の精霊だった
なんて驚きだよ、コッチの世界と違って前の世界でのデュエルモン
スターズは一つの遊びだからな。

それでもGXを見てた時から俺は、十代みたいにネオスの精霊と話
してみたいと思ってたけどな、それが現実になって俺は嬉しいよ。

「ネオス、何で俺から姿を消したんだよ俺は、お前と一緒に戦いたかったんだぞ！」

そうだよ、この世界に来たら、ネオスをデッキに入れるって決めていたのに、どうして居なくなっていたんだよネオス！！。

『すまない・・・でも理由は、あるんだ』

理由・・・

『この世界で存在する事は出来なかった理由は、海斗も知っているかも知れないが、E・HERO ネオスという存在は、GXの十代が生み出したヒーローである事を、ここまで話せば海斗も理由がわかるだろ』

そうか！

前の世界では当たり前のように数があるシグナーのカードや十代の専用カードのネオス達は、この世界では特別な意味があるカード達だ。

転生者で、カードを持つてきてくれと頼んでも、世界の中心である者を保有する事はまず出来ない、ネオスも、その一つに入るからだから無くなっていたんだな。

『海斗の考えてるとうり私は確かに十代の、ネオスとは別な存在である事は間違いないが世界の中心の一つであるため海斗と一緒にいる事は出来なかったんだ』

確かに、それを考えると納得するが、だったら何故、今になって現れたんだ。

『それは、私が神様をお願いしたからだ』

神様に・・・？。

『ああ、海斗と共に戦いと言ってね、無茶だとわかっているが神様は了承してくれたんだ、それに、この世界でも私の知っている海斗で私は嬉しいよ』

ネオスは嬉しそうに笑う。

確かに無茶だな、ネオス……。

『しかし、無茶を頼んで了承した以外に理由も、あった』

他の理由だと？。

『この世界は、海斗も神様から聞いているとおり、海斗の知っている世界とは似てるようで似てない世界なのは、わかっているな』

「……ああ」

『この世界は、すでに海斗と同じ転生者という、存在に崩され始めて通常より早く破滅の道に大きく加速している』

「な、なんだと！」

破滅の道に大きく加速してるだつて。

『その破滅の道を大きく加速させてる、転生者の名前は、テルミだ』

テルミ……あの弓女を巻き込んだ俺と同じ転生者か……！。

『だから私は頼んだ、今の海斗では、テルミと戦っても勝てる見込みはないとね、だから神様は私を海斗のところに送り出してくれたんだ。』

今の現状で勝てる見込みがない……。

『君も知った、だろテルミは、この世界では……いや、世界に存在する筈がない、カードを作る事が出来て実際にダメージを与える事が出来る事を』

確かに弓女と決闘は何回か、した事はあったが弓女に、サイコ決闘みたいな力は、なかったからな。

『テルミの野望は何なのかは私には、わからない、ダーク・シグナ―と手を組んだ事により加速する事は間違いない、私と海斗でテルミの野望を止めるしかない』

止めるテルミの野望を……そうだな俺も転生者だ、テルミと同じ人種の間人かも知れない。

世界の破滅に大きく加速させたのも俺かも知れない・・・だからこそ同じ転生者として俺はテルミを止めなくちゃいけない、この世界を破滅に追い込む事を！！。

「ネオス・・・こんな俺だけで力を貸してくれよ」

『無論だ、しかし力を貸すのは、どうやら私だけではないらしい』

「え！？」

そこにネオスの前に現れたのは、E・HERO達・・・そうだ弓女の精霊のHERO達だ。

『話はネオスから聞かせてもらいましたよ海斗様』

ワイルドマン。

『私達もネオスと一緒に協力させてください』

『俺達は遠慮なく力を貸すぜ!』

『ええ、だから協力させなさい』

フレイム・ウィングマン、フェザーマン、バーストレディ。

『『『我ら弓女のヒーロー達は協力を惜しみません!』』』

みんな・・・ありがとう。

『それより海斗・・・ごめんなさい』

バーストレディ・・・いきなり、どうした？。

『弓女の暴走を止める事が出来なくて』

「謝るのは俺だ、弓女を、あんなふうにしたのは俺の責任だ」

俺は言い訳は出来ない、弓女をあんなふうにしてしまったのは俺の責任だ・・・本当にすまない。

『私達、精霊の声は弓女に届かないわ、だから海斗、アナタを利用してる考えはわかっているわ、お願い弓女を止めて!』

バーストレディは俺に頼みこみ・そして他のヒーロー達も同じように頼みこんだ。

「わかった、俺は必ず弓女を助けるだからみんな、協力してくれ!」

『はい!!(おう!!)』『』『』『』

やるぞ・・・俺はテルミを止める・・・そして弓女を助けてみせる。

この仲間達と一緒に!!

そこで俺は目の前が真っ白になった。

「じじは・・・?」

また・・・病院かよ・・・。

「海斗さん・・・。」

あ・・・ミリア!?

しかし何か、めちゃくちゃ怒ってるような（汗）。

「海斗さん・・・また無茶をやって・・・あれだけの重傷で飛び出して、いくら何でも（ゴゴゴゴゴゴゴ!-!）」

ひ!-ミリアの後に、ドラゴエディアが見える!!。

ネオス!!助けてくれ!!

『すまない、私には止める事は出来ない』

ネオスの裏切り者!!。

「さて海斗さん少し・・・O・H・A・N・A・S・H・Iししょうね」

「字が違っ!！」

俺は、このあと地獄を見ました・・・（汗）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461v/>

遊戯王5D's～転生者はサテライト

2011年12月8日07時48分発行